

志木市の文化財 第91集

埼玉県志木市

# 埋蔵文化財調査報告書 9

西原大塚遺跡第70地点

2023

埼玉県志木市教育委員会



# はじめに

志木市教育委員会  
教育長 柚木 博

ここに刊行する『埋蔵文化財調査報告書9』は、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査事業の調査成果をまとめたもので、西原大塚遺跡第70地点を掲載しています。

現在、市内には、15カ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されています。これらの埋蔵文化財は祖先が残してきた貴重な文化遺産であり、私たちはこれを大切に保護し後世に伝えていく使命があると言えます。

西原大塚遺跡については、これまでの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

特に、縄文時代中期では、200軒以上の住居跡がおよそ南北290m×東西260mにも及びドーナッツ状に分布しており、「環状集落」と呼ばれる集落であることが判明してきました。また、弥生時代後期～古墳時代前期では、今回の検出例を含め、西原大塚遺跡において、すでに650軒を超える住居跡が発見されており、本遺跡が県内においても屈指の集落跡として知られています。

さて、今回の第70地点では、縄文時代中期の住居跡2軒、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡15軒、古墳時代後期の住居跡1軒が検出され、特に弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡からは多くの土器が出土し、当該期における弥生文化を理解する上でとても重要な発見となりました。

このように、今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者や土地所有者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。





## 例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡（県№.09－007）の第70地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、事業者である個人から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。整理作業及び報告書刊行は、志木市教育委員会が実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形が行った。なお、中世以降の遺物については、和光市教育委員会文化財調査指導員 野澤 均氏にご教示を頂いた。  
徳留彰紀 第3章第1節、第4節（1）縄文時代の遺物 [土器]  
大久保聡 第3章第4節（1）縄文時代の遺物 [石器]  
深井恵子 第3章第2節 [遺構]
4. 遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子・増田千春が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井・青木 修・池野谷有紀が行った。写真撮影は青木が行った。
5. 本書に掲載した石器については、有限会社アルケアーリサーチ（取締役社長 藤波啓容）に実測を委託した。
6. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。
7. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。  
埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

# 凡 例

1. 報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」株式会社パスコ調製

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成27年4月発行  
株式会社ゼンリン

2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。

3. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

4. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

5. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

6. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

7. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。

8. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は [ ]、推定値は ( ) を付した。

高：器高 口：口径 底：底径 厚：器厚

9. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

J = 縄文時代の住居跡 Y = 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡

H = 古墳時代後期の住居跡 D = 土坑 P = ピット

## 志木市遺跡調査会調査組織（平成14年度）

### 〈役員〉

会長 細田 信良（志木市教育委員会教育長）（平成12年7月～平成17年6月）  
副会長 谷合 弘行（志木市教育委員会教育政策部長）（平成12年4月～平成15年3月）  
理事 神山 健吉（志木市文化財保護審議会委員長）  
井上 國夫（志木市文化財保護審議会委員）  
高橋 長次（                   "                   ）  
高橋 豊（                   "                   ）  
内田 正子（                   "                   ）  
理事兼事務局長 土橋 春樹（志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長）

### 〈監査〉

監事 金子 雅佳（生涯学習課主幹）  
荒井 正夫（           "           ）  
福田 鮎子（社会教育指導員）

### 〈事務局〉

担当課 志木市教育委員会教育政策部生涯学習課  
事務局 土橋 春樹（教育政策部参事兼生涯学習課長）  
金子 雅佳（生涯学習課主幹）  
関根 正明（生涯学習課主査）  
佐々木保俊（           "           ）  
新井由紀子（生涯学習課主任）  
尾形 則敏（           "           ）

調査担当者 佐々木保俊

調査員 内野美津江

発掘協力員 足立裕子・阿部公子・阿部ふみ子・伊野部三千子・岩森 都・  
砂川春子・高倉光代・高杉朝子・高橋恭子・竹内美代子・  
塚田和枝・永井真理・成田しのぶ・二階堂美知子・広沢奈津子・  
久留浪子・松崎陽子・宮川幸佳・柳沢美子・吉川泰央・  
吉谷顕子

整理作業員 梅原裕子・遠藤英子・川井信子・下村康代・中嶋清美・  
中村逸子・橋本好子・山口優子・鎌本あけみ・高田美智子・  
星野恵美子・松浦恵子

## 志木市教育委員会組織（令和4年度）

教 育 長	柚木 博
教 育 政 策 部 長	今野美香（令和4年度～）
生 涯 学 習 課 長	土崎健太
生 涯 学 習 課 副 課 長	吉成和重
生 涯 学 習 課 主 幹	浅見千穂
生 涯 学 習 課 主 査	徳留彰紀
〃	大久保聡（令和4年度～）
生 涯 学 習 課 主 任	尾形則敏（令和4年度～）
〃	石川千尋
生 涯 学 習 課 主 事	塚原会理（令和4年度～）
生 涯 学 習 課 主 事 補	木村結香
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）
〃	深瀬 克（委員）
〃	上野守嘉（委員）
〃	新田泰男（委員）
〃	金子博一（委員）

### ○整理作業

担 当 者	尾形則敏・徳留彰紀・大久保聡
調 査 員	深井恵子・青木 修
調 査 補 助 員	星野恵美子
整 理 作 業 員	池野谷有紀・小林詠美子・片山 望・二階堂美知子・松浦恵子・ 村田浩美・山口優子・秋山良友・福田浩明

# 目 次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境 .....	1
第1節 市域の地形と遺跡 .....	1
第2節 遺跡の概要 .....	8
第2章 発掘調査の概要 .....	11
第1節 調査に至る経緯 .....	11
第2節 発掘調査の経過 .....	11
第3章 検出された遺構・遺物 .....	14
第1節 縄文時代の遺構・遺物 .....	14
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物 .....	17
第3節 古墳時代後期の遺構・遺物 .....	42
第4節 遺構外出土遺物 .....	43
第4章 調査のまとめ .....	54
第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物について .....	54
第2節 古墳時代後期の遺構・遺物について .....	63

図 版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2
第2図	西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)	9
第3図	遺構分布図 (1/200)	13
第4図	100号住居跡 (1/60)	14
第5図	100号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	15
第6図	121号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)	17
第7図	279号住居跡 (1/60)	18
第8図	279号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	19
第9図	305号住居跡 (1/60)	21
第10図	305号住居跡出土遺物 (1/3)	22
第11図	308号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)	23
第12図	387号住居跡 (1/60)	24
第13図	387号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	25
第14図	388号住居跡 (1/60)	26
第15図	388号住居跡出土遺物 (1/3)	27
第16図	389号住居跡 (1/60)	28
第17図	389号住居跡出土遺物 (1/3)	28
第18図	390号住居跡 (1/60)	29
第19図	396号住居跡 (1/60)	30
第20図	396号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	31
第21図	397号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)	32
第22図	398・399号住居跡 (1/60)	34
第23図	398・399号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	35
第24図	400・401・403号住居跡 (1/60)	37
第25図	400号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	38
第26図	402号住居跡 (1/60)	41
第27図	402号住居跡出土遺物 (1/3)	41
第28図	遺構外出土遺物1 (1/3)	44
第29図	遺構外出土遺物2 (1/3)	45
第30図	遺構外出土遺物3 (1/3)	46
第31図	西原大塚遺跡第70地点における土器変遷	60

## 表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	西原大塚遺跡第70地点の発掘調査工程表	12
第3表	100号住居跡出土土器一覧	16
第4表	100号住居跡出土石器一覧	16
第5表	121号住居跡出土土器一覧	17
第6表	279号住居跡出土土器一覧	20
第7表	305号住居跡出土土器一覧	22
第8表	308号住居跡出土土器一覧	23
第9表	387号住居跡出土土器一覧	25
第10表	388号住居跡出土土器一覧	27
第11表	389号住居跡出土土器一覧	28
第12表	396号住居跡出土土器一覧	31
第13表	397号住居跡出土土器一覧	32
第14表	398・399号住居跡出土土器一覧	36
第15表	400号住居跡出土土器一覧(1)	39
	400号住居跡出土土器一覧(2)	40
第16表	402号住居跡出土土器一覧	42
第17表	遺構外出土石器一覧	47
第18表	遺構外出土縄文土器一覧(1)	47
	遺構外出土縄文土器一覧(2)	48
	遺構外出土縄文土器一覧(3)	49
	遺構外出土縄文土器一覧(4)	50
	遺構外出土縄文土器一覧(5)	51
	遺構外出土縄文土器一覧(6)	52
第19表	遺構外出土縄文時代土製品一覧	52
第20表	遺構外出土弥生時代後期～平安時代土器一覧	53
第21表	遺構外出土陶器・土器一覧	53
第22表	弥生時代後期～古墳時代前期の掲載土器個体数と器種別割合	56
第23表	弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年基準	56
第24表	各器種に見られる主な属性の推移	61

## 图版目次

- 图版 1 1. 確認調査風景 2. 100号住居跡 3. 100号住居跡遺物出土状態  
4. 121号住居跡 5. 279号住居跡(第70地点)  
6. 279号住居跡(区画整理第39 I 地点) 7. 305号住居跡  
8. 308号住居跡(第70地点)
- 图版 2 1. 308号住居跡(区画整理第39 II 地点) 2. 387号住居跡 3. 388号住居跡  
4. 389号住居跡 5. 390号住居跡 6. 387~390号住居跡 7. 396号住居跡  
8. 396号住居跡遺物出土状态
- 图版 3 1. 397号住居跡 2. 398・399号住居跡 3. 398・399号住居跡貯藏穴遺物出土状态  
4. 398・399号住居跡炉 5. 400・401・403号住居跡 6. 400号住居跡炉  
7. 402号住居跡 8. 16号住居跡
- 图版 4 1. 100号住居跡出土遺物 2. 121号住居跡出土遺物 3. 279号住居跡出土遺物
- 图版 5 1. 305号住居跡出土遺物 2. 308号住居跡出土遺物 3. 387号住居跡出土遺物  
4. 388号住居跡出土遺物 5. 389号住居跡出土遺物 6. 396号住居跡出土遺物
- 图版 6 1. 397号住居跡出土遺物 2. 398・399号住居跡出土遺物 3. 400号住居跡出土遺物
- 图版 7 1. 402号住居跡出土遺物 2. 遺構外出土遺物 1
- 图版 8 遺構外出土遺物 2



# 第1章 遺跡の立地と環境

## 第1節 市域の地形と遺跡

### (1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.05km<sup>2</sup>、人口約7万6千人の自然と文化の調和する都市である。

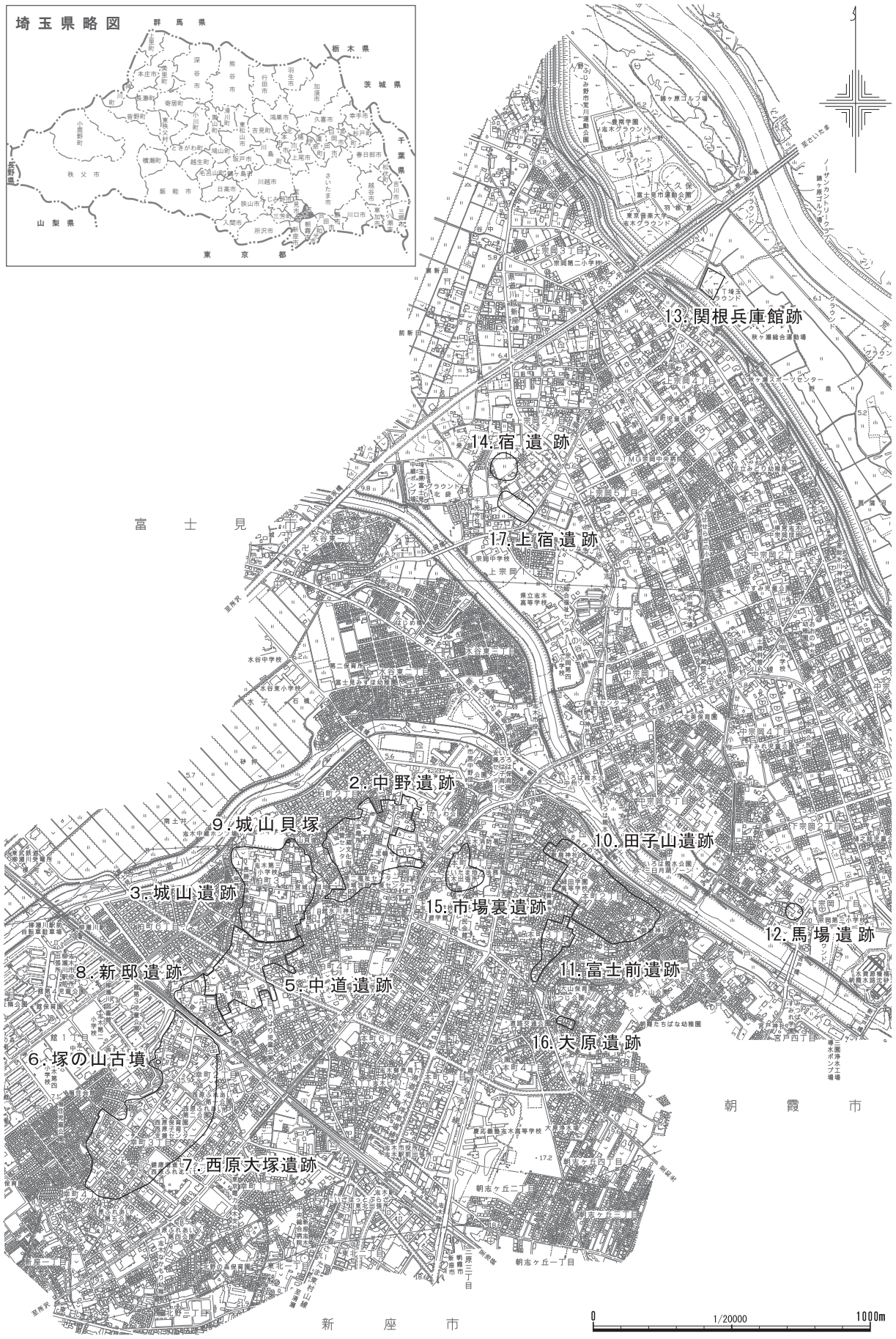
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新 邸 遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山

No.	遺跡名	遺跡の規模	地 目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中 野	71,220㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城 山	82,520㎡	畑・宅地	貝塚・城館跡・集落跡・墓跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（中・後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中 道	54,420㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古 墳？	古 墳？	古 墳？	なし
7	西原大塚	164,960㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新 邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝 塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830㎡	宅 地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑？、溝跡？	弥生土器、土師器
12	馬 場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グラウンド	館 跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	水 田	館 跡	中世	溝跡、井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800㎡	宅 地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大 原	1,700㎡	宅 地	集落跡	近世以降？	溝跡	なし
17	上 宿	8,600㎡	水田・宅地	集落跡・墓跡	平安、中・近世	住居跡、土坑、溝跡、井戸跡	土師器、須恵器、陶磁器、板碑等
合 計		523,260㎡					

令和5年1月31日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

令和5年1月31日現在



遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた15遺跡である（第1図・第1表）。

## （2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2か所、平成7（1995）年度には1か所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。最新では、令和元（2019）年に第224地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅶ層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成28（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91⑰地点からは、礫群1基が検出された。令和元～2（2019～2020）年にかけて発掘調査された中野遺跡第109地点では、立川ローム層第Ⅳ層下部～第Ⅴ層を中心とする石器集中地点が検出されており、石核調整剥片の良好な接合資料が出土している。

城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2か所で石器集中地点が検出されている。平成20・21（2008・2009）年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも石器集中地点1か所が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部で石器集中地点2か所、礫群9基が検出された。令和元（2019）年には第96地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅵ層・第Ⅶ層で石器集中地点や礫群が検出されている。

### 2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡としては、令和4（2022）年に田子山遺跡第172

地点で市内初となる撚糸文期の住居跡が1軒検出された。また、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点では、早期末葉（条痕文系）の10号住居跡が検出されている。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとめて出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。令和元（2019）年度に発掘調査が実施された城山遺跡第96地点、令和3～4（2021～2022）年に実施された中野遺跡第116①地点では、前期後葉の諸磯a式期の住居跡が検出されている。そのうち、城山遺跡第96地点では貝層を持つ住居跡が3軒検出された。住居内貝層からヤマトシジミ・マガキが検出されている。平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で200軒以上の住居跡が環状に分布していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡1軒が確認されているが、平成28（2016）年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曾利EⅣ式の両耳壺を出土する住居跡1軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡2軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1か所、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居（敷石住居）1軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。その他、平成26（2014）年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の遺物が比較的まとめて出土している。最新資料として、平成30（2018）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第216地点で、堀之内1式期の住居跡が1軒検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されている。また、令和3（2021）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第234地点で、遺構外出土ではあるが、縄文時代晩期～弥生時代初頭に位置づけられる土器片が1点発見されている。以降、市内では弥生時代中期まで空白の時代となる。

### 3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については令和元（2019）年に発掘調査された城山遺跡第96地点で市内初となる宮ノ台式期の住居跡1軒、方形周溝墓1基が検出された。住居跡からは壺、甕、高坏、挟入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。なお、これらの資料のうち、土器、石器、土製品計44点の城山遺跡10号住居跡出土遺物は、考古資料として、市指定文化財（令和3年7月1日付け）に指定されている。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27・28

(2015・2016)年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成6(1994)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子(イネ・アワ・ダイズなど)、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が650軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24(2012)年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅釧が出土している。

昭和62(1987)年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、平成15(2003)年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18(2006)年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単一的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。また、平成11(1999)年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺形土器が出土している。なお、鳥形土製品1点と壺形土器4点の計5点は、考古資料として、市指定文化財(平成25年3月1日付け)に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

#### 4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15(2003)年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7(1995)年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後葉から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後葉以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期(7世紀中葉)の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化

材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後葉から7世紀後葉にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で265軒、次いで中野遺跡で58軒、中道遺跡で20軒、田子山遺跡で17軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後葉以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形で2か所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

## 5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山・富士前遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げるができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶<sup>ふじゆしんぼう</sup>が2枚とその近くからは鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群と南比企窯跡群の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

最新では、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、平安時代の住居跡・土壇・溝跡などが検出され、宗岡地区における自然堤防上に立地する遺跡の存在が明らかになりつつある。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、市指定文化財（平成25年3月1日付け）に指定されている。

## 6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と大塚千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『<sup>たてむら</sup>館村<sup>きゆうき</sup>旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『<sup>かいくごつき</sup>廻国雑記』（註2）に登場する「<sup>おおいしなののかみのやかた</sup>大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「<sup>おおつかじゆうぎよくぼう</sup>大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土し



ており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鑄造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鑄造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鑄型、鍋の耳部分の小型鑄型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、<sup>よろい さね</sup>鎧の札である鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新たに土坑45基・井戸跡2基・溝跡1本・ピット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「T字形」の火葬土坑5基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「<sup>しょうりんざんかんのんじだいじゆいん</sup>松林山観音寺大受院」関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、中道遺跡第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

最新資料としては、令和2・3年度に発掘調査を実施した西原大塚遺跡第234地点の地下式坑（912号土坑）から、人骨（女性2体）と完形品の播鉢が共伴する良好な資料が発見された。人骨は「通常とは異なる状況」で埋葬されたと考えられ（田中 2022）、播鉢は古瀬戸後期IV古～新段階（藤澤 2008）に比定されることから、時期は中世（15世紀中葉～後葉）のものと考えられる。

また、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、中・近世の土坑・井戸跡・溝跡などの多くの遺構が検出され、中世における『宗岡宿』の様相や近世における千光寺に関連する墓域群などを知ることができる貴重な成果につながった。

## 7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

---

---

## 第2節 遺跡の概要

---

---

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町2～4丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約1kmに位置している。北東—南西方向に約700m、北西—南東方向に約150mの広がりを持ち、遺跡面積164,960㎡の市内最大規模の遺跡である。

本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に形成されている。標高は10～18mと遺跡内で8mの比高差があるが、遺跡範囲の大部分は標高14～16mに位置しており、おおむね緩やかな傾斜をもち、台地から低地に移行している。遺跡北西部分の台地下では、今でも小規模な湧水点が確認されている。

昭和48（1973）年に最初の調査が実施されて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市史編さん室による度重なる調査が実施されてきた。平成元（1989）年から平成19（2007）年までは、西原特定土地地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地・保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施された。近年では区画整理事業の完了に伴い、共同住宅や分譲住宅、個人住宅の建設などの各種土木工事が盛期を迎え、それらに伴う発掘調査も増加傾向にある。

本遺跡は、これまでに240回の調査（令和5年1月31日現在）が実施され、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。特に、縄文時代中期では住居跡約200軒以上からなる大規模な環状集落が形成され、また、弥生時代後期～古墳時代前期では、住居跡650軒以上、方形周溝墓36基が調査され、さらに環濠の存在が確認されている。

特に本遺跡から発見された資料として、以下の2件が、平成24年度に市指定文化財に指定され、大きな成果を上げることができた。

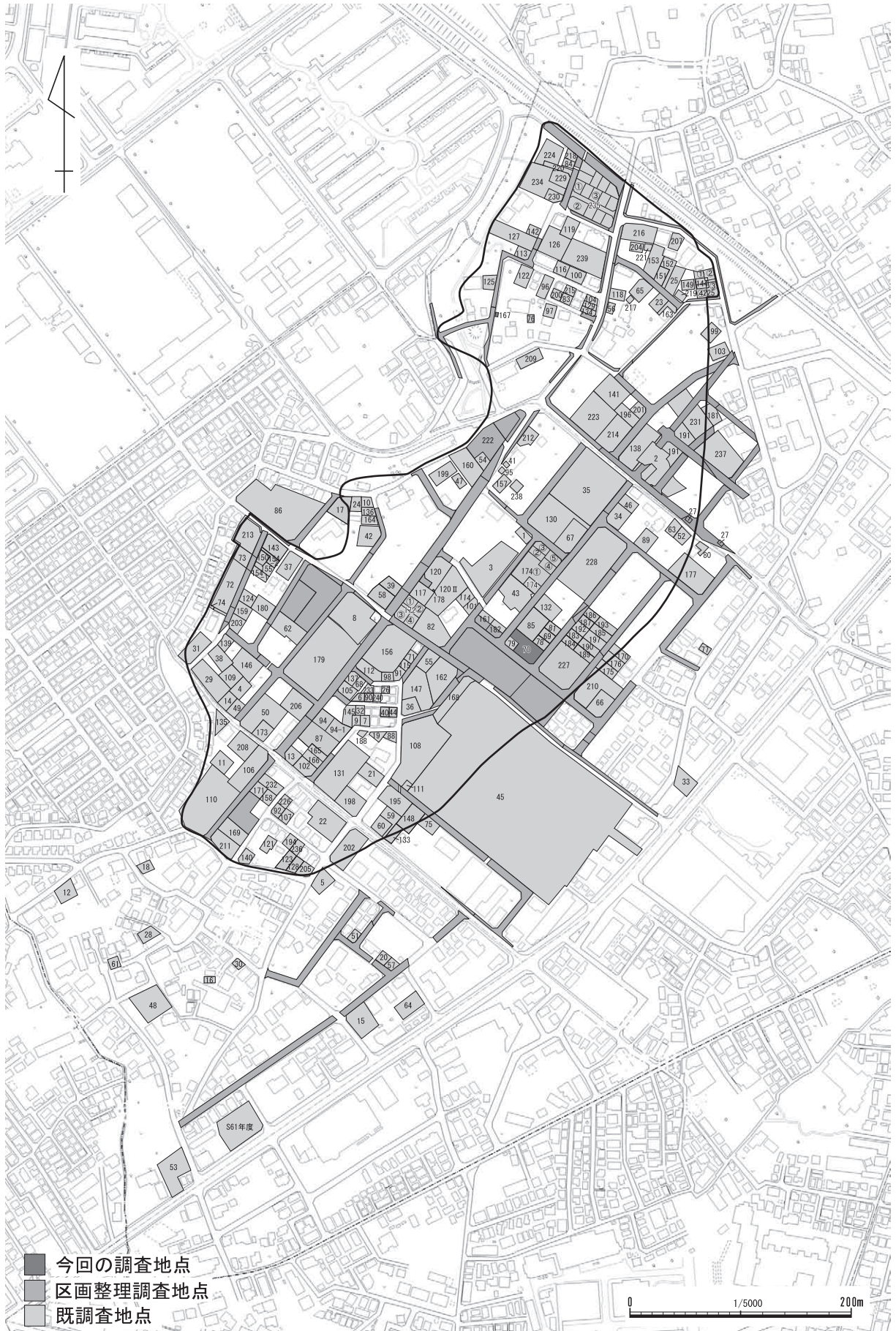
- ①西原大塚遺跡出土の動物形土製品
- ②西原大塚遺跡17号方形周溝墓出土遺物

### [註]

註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18（1486）年6月から10か月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。





第2図 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)

令和5年1月31日現在

## 第1章 遺跡の立地と環境

### [引用文献]

- 神山健吉 1988 「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号  
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号
- 田中 信 2022 「第3章 調査のまとめ 第3節 中世以降について」『西原大塚遺跡第234地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』  
志木市の文化財第86集 埼玉県志木市教育委員会
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院

## 第2章 発掘調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

平成14年7月、個人から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木工事計画における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町3丁目7175～7177（面積534.47㎡）内において共同住宅建設を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-09-007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該土木工事予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成14年9月30日、教育委員会は、土木工事主体者である個人より埋蔵文化財確認調査依頼書及び埋蔵文化財発掘届を受理し、10月15日に確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸に合わせ、4本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡3軒を検出したが、さらに過去に発掘調査を実施した際の縄文時代の住居跡1軒、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡2軒（区画整理第39Ⅰ地点）、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡の住居跡1軒（区画整理第39Ⅱ地点）、古墳時代後期の住居跡1軒（区画整理第13Ⅳ地点）が本地点に延びていることが明らかであった。

教育委員会は、この結果を直ちに依頼者に報告し、埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、盛土保存は難しいという回答から、面積534.47㎡を発掘調査の対象と決定し、教育委員会は依頼者に対し、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、依頼者と10月29日に委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出した。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、平成14年10月31日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。

### 第2節 発掘調査の経過

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第2表の発掘調査工程表に示した。

10月31日 重機（バックホー）による表土剥ぎ作業を開始し、本日中に終了する。

11月1日 人員導入による発掘調査を開始する。まず、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った。同日には、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡2軒（387・388 Y）の精



第2章 発掘調査の概要

	10月	平成14年11月					
	30日	5日	10日	15日	20日	25日	30日
表土剥ぎ作業	10.31			11.13			
279 Y		11.5		11.7			
304Y					11.19		
305Y					11.19		11.20
308Y		11.5					
387Y	11.1						11.11
388Y	11.1						11.11
390Y		11.6					11.11
396Y			11.8				11.13
397Y			11.8				11.12
398Y				11.12			11.13
399Y				11.12			11.13
400Y				11.15			11.20
401Y					11.18		11.20
402Y					11.18		11.19
403Y					11.18		11.20
16 H				11.14			11.19
100 J					11.18		11.20
121 J					11.19		11.20
埋戻し作業						11.25	11.27

第2表 西原大塚遺跡第70地点の発掘調査工程表

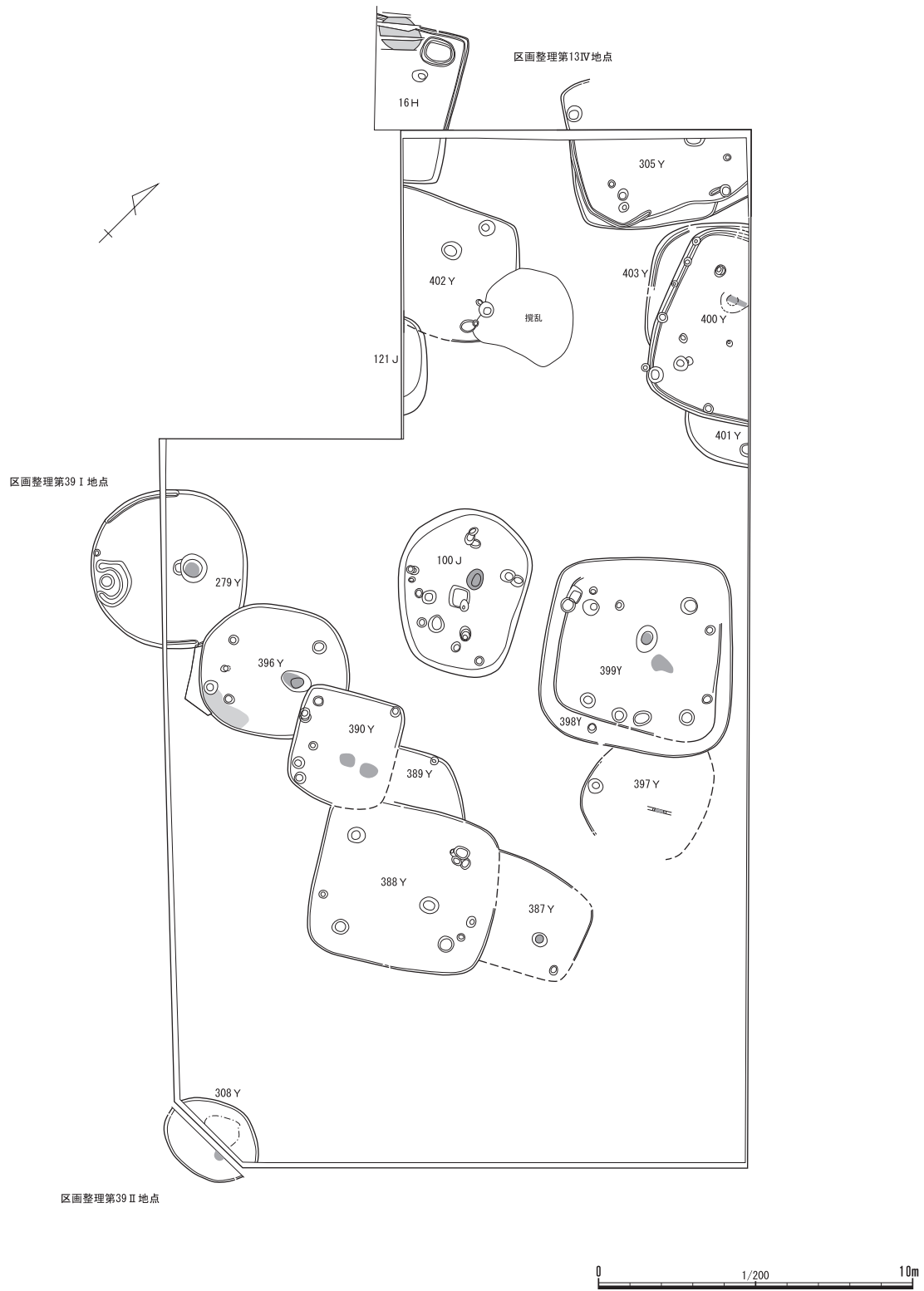
査を開始する。

11月上旬 387・388 Yの精査に併行し、新たに弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡3軒(279・308・390 Y)の精査を開始する。

中旬 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡7軒(387・388・390・396～399 Y)の精査を終了し、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒(400 Y)と古墳時代後期の住居跡(16 H)の精査を開始する。

下旬 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡の精査はすべて終了、新たに縄文時代中期の住居跡2軒(100・121 J)の精査を開始し、20日にはすべての遺構の精査を完了する。

25～27日 埋戻し作業を実施する。



第3図 遺構分布図（1/200）

# 第3章 検出された遺構・遺物

## 第1節 縄文時代の遺構・遺物

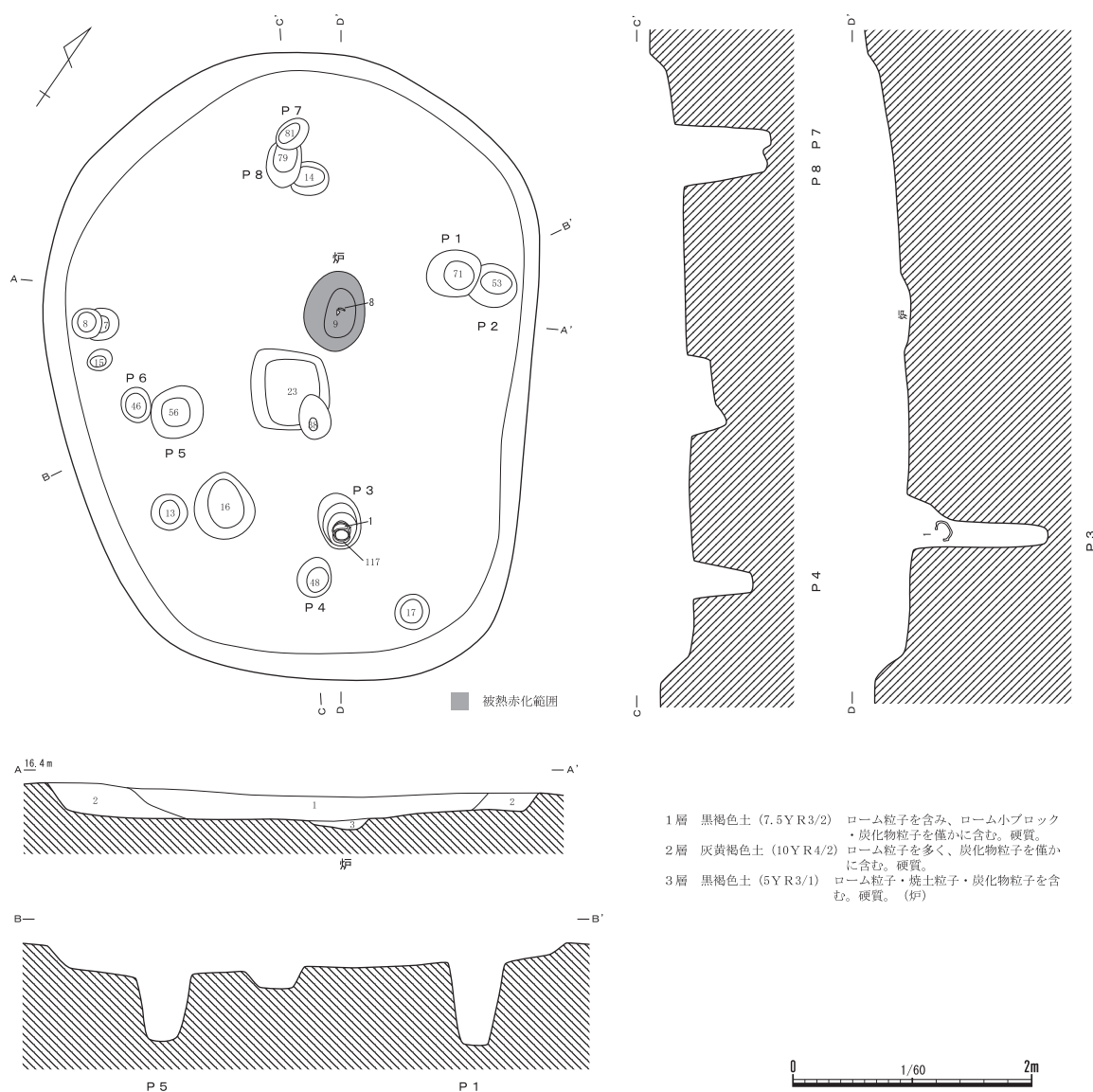
### (1) 概要

本地点からは、縄文時代の住居跡2軒（100・121 J）が検出された。住居跡の時期は、100 J は中期中葉（勝坂3式期）、121 J は中期後葉（加曾利E 3式期）に比定されるものである。

### (2) 住居跡

#### 100号住居跡

#### 遺 構（第4図）



第4図 100号住居跡（1/60）

[位置] 調査区中央。

[検出状況] 他の遺構との切り合いはなかった。

[構造] 平面形：不整五角形か。規模：長軸5.24m／短軸4.12m／遺構確認面からの深さ9～26cm。壁：50～55°程の角度で立ち上がる。長軸方位：N-12°-W。P3とP5の中間と、P1とP8の中間、炉の中心を通るラインを主軸と捉えた。壁溝：確認できなかった。床面：直床で、硬化面は確認できなかった。炉：住居中央よりやや北側に偏って位置する。楕円形の地床炉である。長軸66cm／短軸50cm／床面からの深さ9cm。被熱により赤化していた。柱穴：本住居に伴うものはP1～P8の8本と思われる。深さ46～117cm。P1・2、P3・4、P5・6、P8・7を主柱穴と捉えた。4本柱建物で、建替1回を想定する。P3覆土上層から小型浅鉢（第5図1）が出土した。

[覆土] 3層に分層された。住居中央は黒褐色土を基調とし、壁際は灰黄褐色土を基調とする。

[遺物] 土器・石器が出土した。

[時期] 中期中葉（勝坂3式期）。

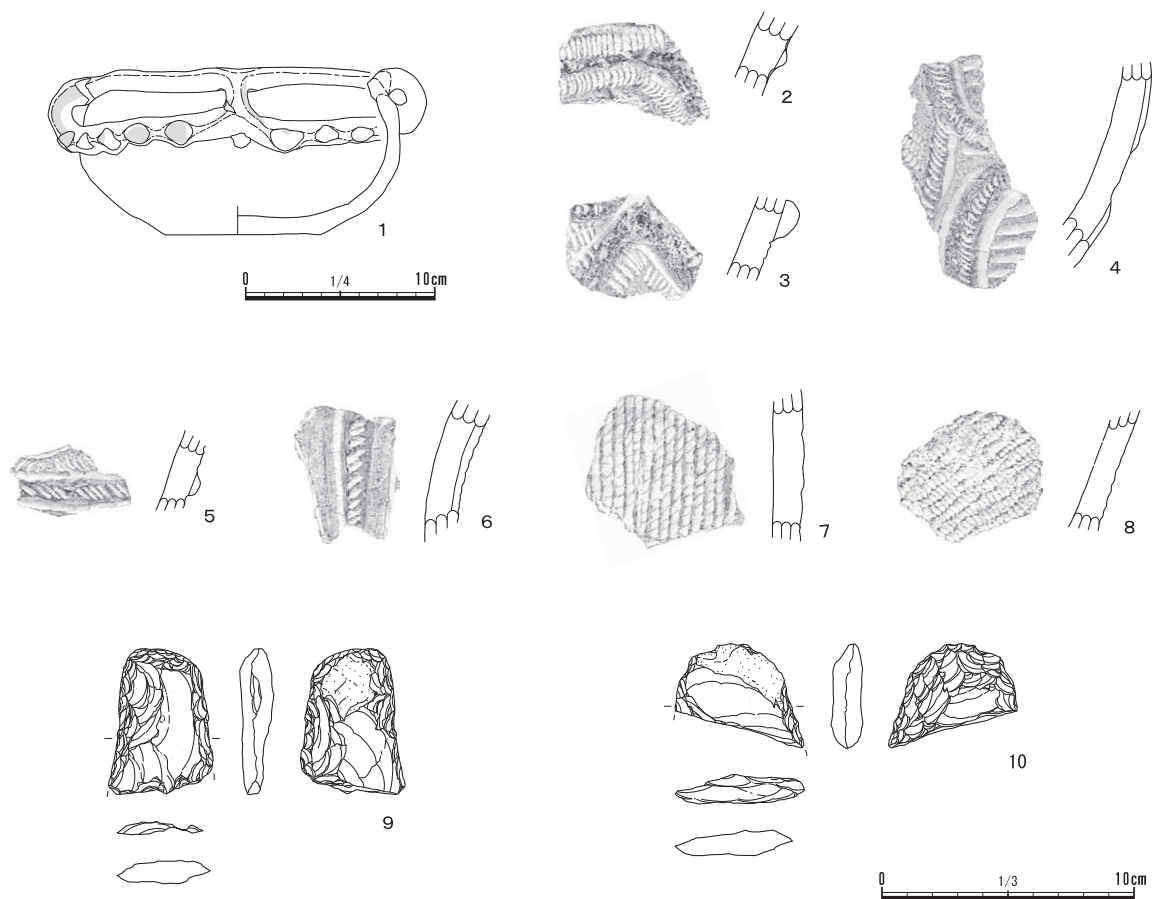
**遺物**（第5図、図版4-1、第3・4表）

[土器]（第5図1～8、図版4-1-1～8、第3表）

1は勝坂3式の小型浅鉢で、ほぼ完形品である。2・3は勝坂2式、4～6は勝坂3式、7は加曽利E1式、8は中期の深鉢形土器である。

[石器]（第5図9・10、図版4-1-9・10、第4表）

9・10は砂岩製の打製石斧である。



第5図 100号住居跡出土遺物（1/4・1/3）

第3章 検出された遺構・遺物

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 式	出土位置
第5図1 図版4-1-1	浅鉢	完形品	口15.5 高9.8 底8.2	僅かに凹凸が見られる 底部/内湾して広がる 体部/口縁部は内湾して 内傾	口縁部に4単位の「X」字 状の突起/楕円区画の 下端隆帯に5か所の押捺 文/隆帯に赤彩、部分的 に朱色が鮮やかに残る	橙/角閃石・砂粒を含む	縄文中期中葉 (勝坂3式)	P3内 覆土上層
第5図2 図版4-1-2	深鉢	頸部 破片	厚1.2	僅かに外反して外傾	断面カマボコ状の隆帯に よる区画文/隆帯脇には 爪形文が沿う	にぶい赤褐/砂粒多量、 礫・雲母少量	縄文中期中葉 (勝坂2式)	覆土中
第5図3 図版4-1-3	深鉢	胴部 破片	厚1.1	僅かに外反して外傾	断面カマボコ状の隆帯に よる区画文/区画文は重 三角区画文か/隆帯脇に は幅広爪形文が沿う	にぶい褐/砂粒・礫多量、 雲母中量	縄文中期中葉 (勝坂2式)	覆土中
第5図4 図版4-1-4	深鉢	胴部 破片	厚1.0	内湾して開く胴部下位	押圧文を付された断面台 形の隆帯による区画文/ 隆帯脇には単沈線1本が 沿う/区画文内には沈線 文列が充填/一部単節R L横位施文内面に被熱に よる痘痕状剥落か	赤褐/砂粒・礫多量	縄文中期中葉 (勝坂3式)	覆土中
第5図5 図版4-1-5	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	僅かに内湾して外傾	押圧文が斜位に付された 断面カマボコ状の隆帯に よる区画文/隆帯脇には 沈線1本と爪形文列が 沿う	灰褐/砂粒・礫少量	縄文中期中葉 (勝坂3式)	覆土中
第5図6 図版4-1-6	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外反して外傾	押圧文が斜位に付された 断面台形の隆帯による区 画文/隆帯脇には沈線2 本が沿う	明赤褐/砂粒中量、礫少 量	縄文中期中葉 (勝坂3式)	覆土中
第5図7 図版4-1-7	深鉢	胴部 破片	厚1.1	ほぼ直立する	捺糸L縦位施文	橙/砂粒中量・礫少量	縄文中期後葉 (加曾利E1式)	覆土中
第5図8 図版4-1-8	深鉢	胴部 破片	厚1.0	僅かに外反して外傾	単節RL施文/内外面に 被熱による剥落か	暗赤褐/砂粒・礫多量	縄文中期	炉内

第3表 100号住居跡出土土器一覧

挿図番号 図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置
第5図9 図版4-1-9	打製石斧	砂岩	57.5	41.3	13.6	34.1	短冊形か/基部断片/右側 縁稜上に潰れが認められ る/裏面の基部に礫面ない し節理面を残す	覆土中
第5図10 図版4-1-10	打製石斧	砂岩	41.1	50.7	12.4	24.6	基部断片/平面形状不明 (側縁は直線状?)	覆土中

(単位: mm, g)

第4表 100号住居跡出土石器一覧

121号住居跡

遺 構 (第6図)

[位 置] 調査区北西隅。

[検出状況] 402 Yに切られ、大部分が調査区外にあるため、詳細は不明である。

[構 造] 平面形: 不明。規模: 不明/遺構確認面からの深さ51~54 cm。壁: 緩やかに立ち上がる。

長軸方位: 不明。壁溝: 確認できなかった。床面: 直床で、硬化面は確認できなかった。炉: 確認できなかった。柱穴: 確認できなかった。

[覆 土] 3層に分層された。硬質の黒褐色土を基調とする。

[遺 物] 土器破片2点が出土した。

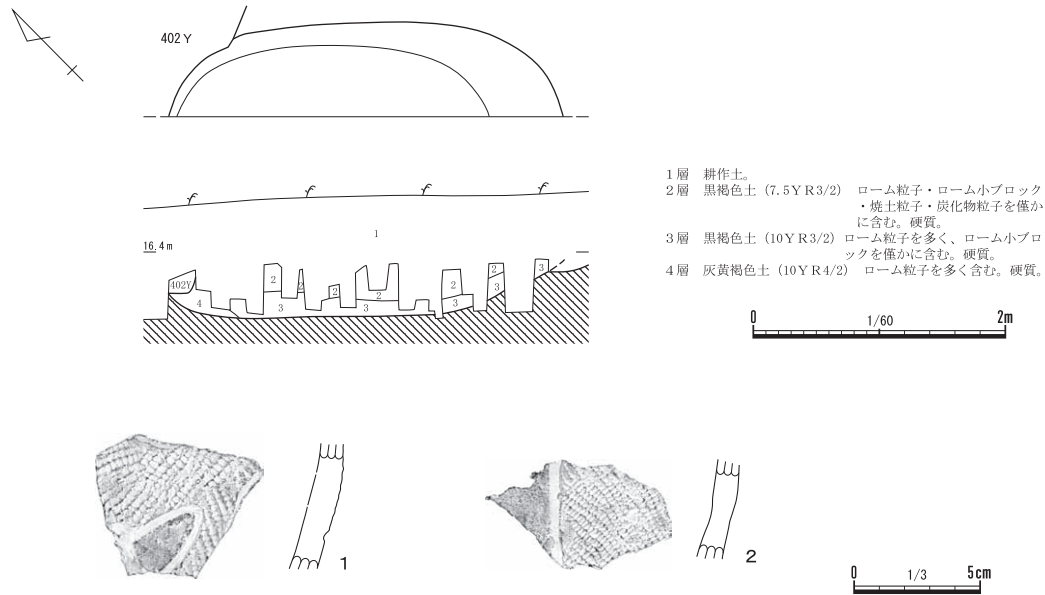
[時 期] 中期後葉(加曾利E3式期)。

遺 物 (第6図、図版4-2、第5表)

[土 器] (第6図1・2、図版4-2、第5表)

1・2は加曾利E3式の深鉢形土器である。





第6図 121号住居跡・出土遺物（1/60・1/3）

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式	出土遺構 出土位置
第6図1 図版4-2-1	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	内湾して外傾／胴 部下位か	地文は単節LRを多方位に施 文／沈線による区画文／区画 文内は無文	黒褐／砂粒中量、 礫少量	縄文中期後葉 (加曾利E3式)	覆土中
第6図2 図版4-2-2	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	外傾する	地文は単節LR縦位施文／幅 広の磨消を伴う太く浅い沈線 が垂下	にぶい橙／角閃石・ 砂粒・小石を含む	縄文中期後葉 (加曾利E3式)	覆土中

第5表 121号住居跡出土土器一覧

## 第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

### (1) 概要

本地点からは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡15軒（279・305・308・387～390・396～403 Y）が検出された。遺存状態としては、全体的に耕作による著しい攪乱を受けており、住居跡の切り合い関係はあるものの新旧関係の見極めは困難な状況であったと言える。なお、279 Yの住居西半部は区画整理第39 I地点、305 Yの住居西半部は区画整理第13 IV地点、308 Yの住居南半部は区画整理第39 II地点ですでに報告されている（佐々木・内野・宮川 2009）。本稿では上記の3軒（279・305・308 Y）分について、今回の調査分と統合し報告するものであり、遺物等の内容についても再確認し修正を加えるものとする。

## (2) 住居跡

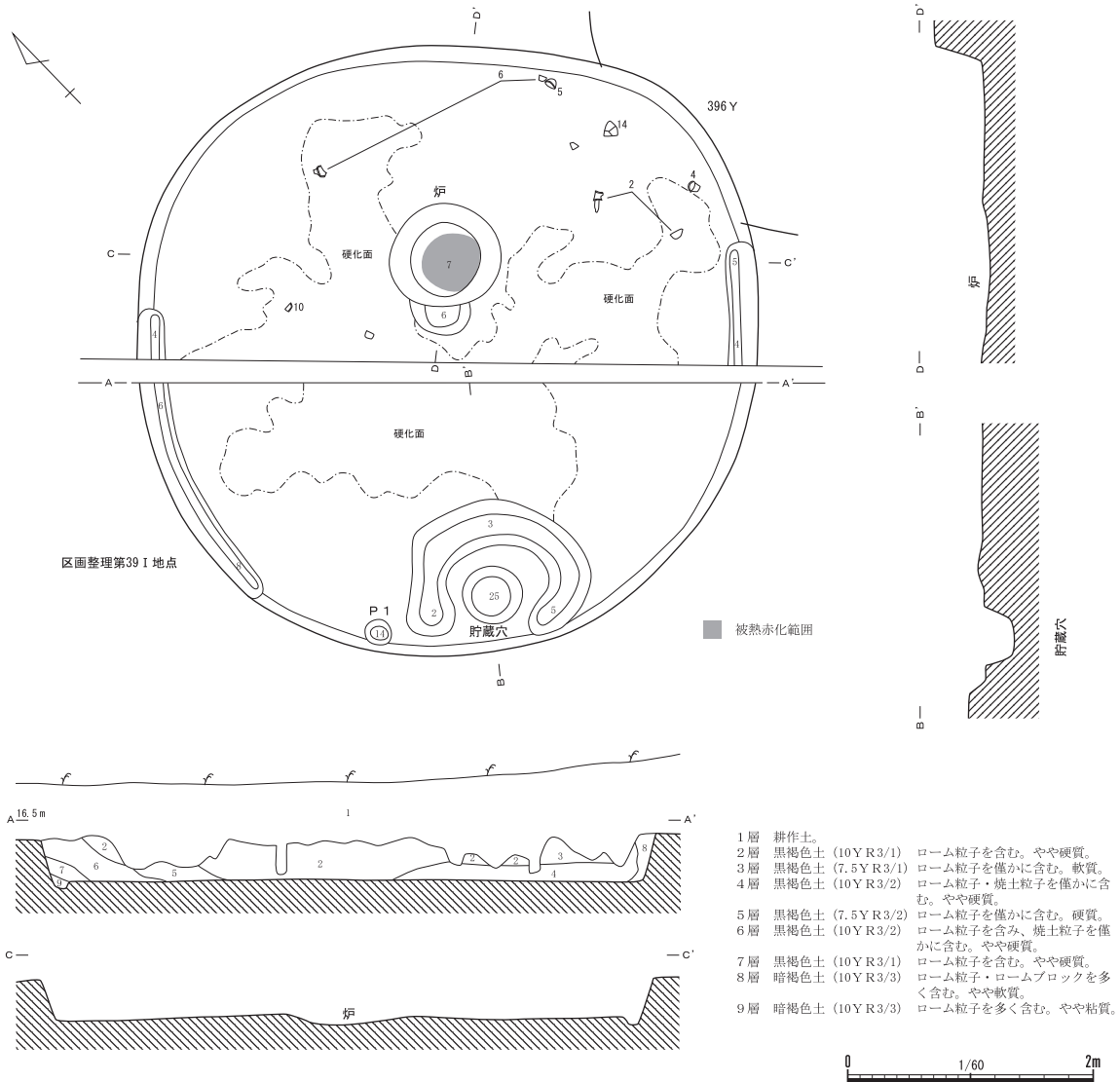
### 279号住居跡

#### 遺 構 (第7図)

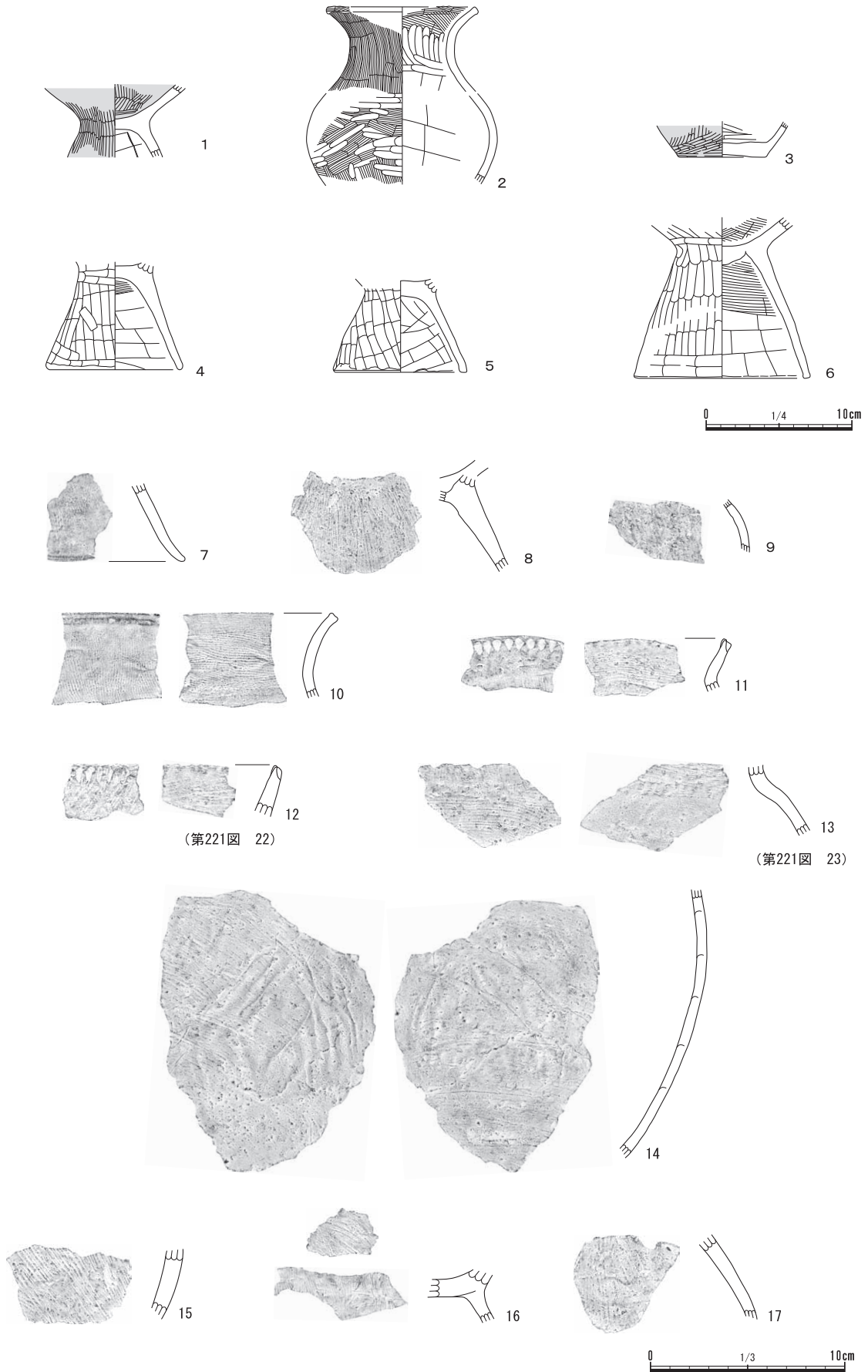
[位 置] 調査区西隅。

[検出状況] 396 Yに切られる。南西側は区画整理第39 I地点で調査済みである。

[構 造] 平面形：円形に近い隅丸方形。規模：長軸5.05m／短軸4.97m／確認面から床面までの深さ29～38cm。壁：75°程で立ち上がる。長軸方位：N-43°-W。壁溝：西壁と東壁の一部に検出された。上幅14～25cm・下幅5～7cm・深さ4～8cm。床面：硬化面は壁際を除き確認できた。炉：住居中央からやや北東に偏って位置する。楕円形の地床炉である。掘り込みは長軸90cm／短軸83cm／深さ7cm。中央部は被熱により赤化していた。貯蔵穴：南西壁近くで検出された。平面形は49×47cmの円形で、深さ25cm。周囲に高さ2～5cmの凸堤が検出された。柱穴：検出されなかった。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：P 1が入口ピットの可能性がある。



第7図 279号住居跡 (1/60)



第8図 279号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

第3章 検出された遺構・遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第8図1 図版4-3-1	高坏	坏部下半～ 脚台部上半 60%	高 [4.9]	脚台部は「ハ」の字状/外面 及び坏部内面に赤彩	内面:坏部はへら磨き調整、脚 台部はへらナデ/外面:へら磨 き調整	黄褐色/砂粒を含 む	覆土中
第8図2 図版4-3-2	壺	口縁部～ 胴部下半 50%	高 [12.3] 口 (10.4)	小型壺/単純口縁/口縁部は 外反する/口唇部は平坦/胴 部から頸部への移行はスムー ズ/最大径は胴部中位にもつ	内面:口縁部から頸部はハケ目 調整後へら磨き調整、胴部は へらナデ/外面:口縁部から胴 部上半はハケ目調整、以下は ハケ目調整後粗いへら磨き調 整	黄褐色/黄褐色粒 子をやや多く、砂 粒を含む	住居東コーナ ーのぼぼ床面上 (2点接合)
第8図3 図版4-3-3	壺	胴部下半～ 底部70%	高 [2.5] 底 6.0	平底/外面に赤彩	内面:ナデ/外面:へら磨き調 整	黄褐色/黄褐色粒 子をやや多く、橙 色粒子・砂粒を含 む	覆土中
第8図4 図版4-3-4	甕	脚台部のみ 90%	高 [7.4] 底 9.4	台付甕/脚台部は「ハ」の字 状	内面:脚台部上半はハケ目調 整、以下はへらナデ/外面:へ らナデ	黄褐色/黄褐色粒 子・砂粒・小石を 含む	住居東コーナ ーのぼぼ床面上
第8図5 図版4-3-5	甕	脚台部のみ 100%	高 [6.4] 底 9.2	台付甕/脚台部は「ハ」の字 状/内面は赤色を呈するが赤 彩であるか不明	内面:ナデ/外面:へらナデ (工 具の先端がささくれ状)	黄褐色を基調/茶 褐色粒子・砂粒を 含む	北東壁近くのほ ぼ床面上
第8図6 図版4-3-6	甕	胴部下半 ～脚台部 60%	高 [11.1] 底 12.2	台付甕/脚台部は「ハ」の字 状/4・5に比べ大型	内面:胴部と脚台部ともに粗い 目のハケ目調整/外面:へらナ デ	黄褐色/黄褐色粒 子・砂粒・小石を 含む	北東壁近くのほ ぼ床面上 (2点 接合)
第8図7 図版4-3-7	高坏	脚台部 破片	高 [4.0]	脚台部は裾部に向かって外反 する/外面に赤彩	内面:へら磨き調整/外面:ハ ケ目調整後へら磨き調整	黄褐色/茶褐色粒 子・砂粒を含む	覆土中
第8図8 図版4-3-8	高坏	脚台部 破片	高 [5.2]	脚台部は裾部に向かって開く /外面に赤彩	内面:へらナデ/外面:ハケ目 調整後へら磨き調整	黄褐色/黄褐色粒 子・砂粒を含む	覆土中
第8図9 図版4-3-9	壺	胴部上半 小破片	厚 0.4	小型壺/胴部に膨らみをもつ /外面に赤彩(黒斑後)/埴の 可能性あり	内面:指ナデ/外面:へら磨き 調整	暗黄褐色/黄褐色 粒子・砂粒を含む	覆土中
第8図10 図版4-3-10	壺	口縁部～ 頸部破片	厚 0.5	単純口縁/口縁部は外反する /口唇部は中央が沈線状に 窪んでいる/口唇部及び内面 口縁部(幅2cmほど)に赤彩 /形態は甕か	内面:ハケ目調整、頸部はその 後へらナデ/外面:ハケ目調整	黄褐色/黄褐色粒 子・砂粒を含む	炉西側のぼぼ床 面上
第8図11 図版4-3-11	甕	口縁部 破片	厚 0.5	口縁部は内湾気味に開く/口 唇部外面にハケ状工具による 刻みがまわる/外面は黒く煤 けている	内外面:ハケ目調整/内外面口 唇部付近は指頭による押捺痕 が残る	暗褐色/黄褐色粒 子・茶褐色粒子・ 砂粒を含む	覆土中
第8図12 図版4-3-12	甕	口縁部 小破片	厚 0.6	口縁部はやや内湾気味に外傾 する/口唇部外面に刻みがま わる/区画39 I -22を再掲載	内外面:ハケ目調整	黄褐色/黄褐色粒 子・茶褐色粒子・ 砂粒を含む	覆土中 (区画整 理第39地点)
第8図13 図版4-3-13	甕	頸部～胴部 上半 破片	厚 0.7	胴部から頸部の移行は僅かに 屈曲し、頸部は外反する/外 面は黒色/区画39 I -23を再 掲載	内面:頸部はハケ目調整、胴部 はへらナデ/外面:ハケ目調整	黄褐色/黄褐色粒 子・砂粒を含む	覆土中 (区画整 理第39地点)
第8図14 図版4-3-14	甕	胴部中位～ 下半 破片	厚 0.5	胴部最大径は中位にもつと思 われる/胴部中位以下の内外 面は黒く煤けている	内面:粗い目のハケ目調整後胴 部中位以上は指ナデと思われ る/外面:粗い目のハケ目調整	淡茶褐色/黄褐色 粒子をやや多く、 砂粒を含む	住居東コーナ ーのぼぼ床面上
第8図15 図版4-3-15	甕	胴部中位 破片	厚 0.6	胴部に膨らみをもつ/外面は 黒色	内面:へらナデ/外面:ハケ目 調整	黄褐色/黄褐色粒 子・橙色粒子を多 く、砂粒・小石(大 きいもので1.2×1.0 cm)を含む	覆土中
第8図16 図版4-3-16	甕	胴部下半～ 脚台部上半 破片	高 [3.0]	台付甕/脚台部は「ハ」の字 状になると思われる/外面及 び胴底部内面は黒く煤けてい る	内面:胴底部は粗い目のハケ目 調整、脚台部はへらナデ/外 面:ハケ目調整	暗黄褐色/黄褐色 粒子・橙色粒子・ 砂粒を含む	覆土中
第8図17 図版4-3-17	甕	脚台部 破片	高 [4.5]	台付甕/脚台部は「ハ」の字 状	内面:へらナデ/外面:ハケ目 調整	黄褐色/黄褐色粒 子・砂粒を含む	覆土中

第6表 279号住居跡出土土器一覧

[覆 土] 8層に分層される。

[遺 物] 高坏・壺・甕形土器が出土した。

[時 期] 弥生時代後期後葉。

**遺 物** (第8図、図版4-3、第6表)

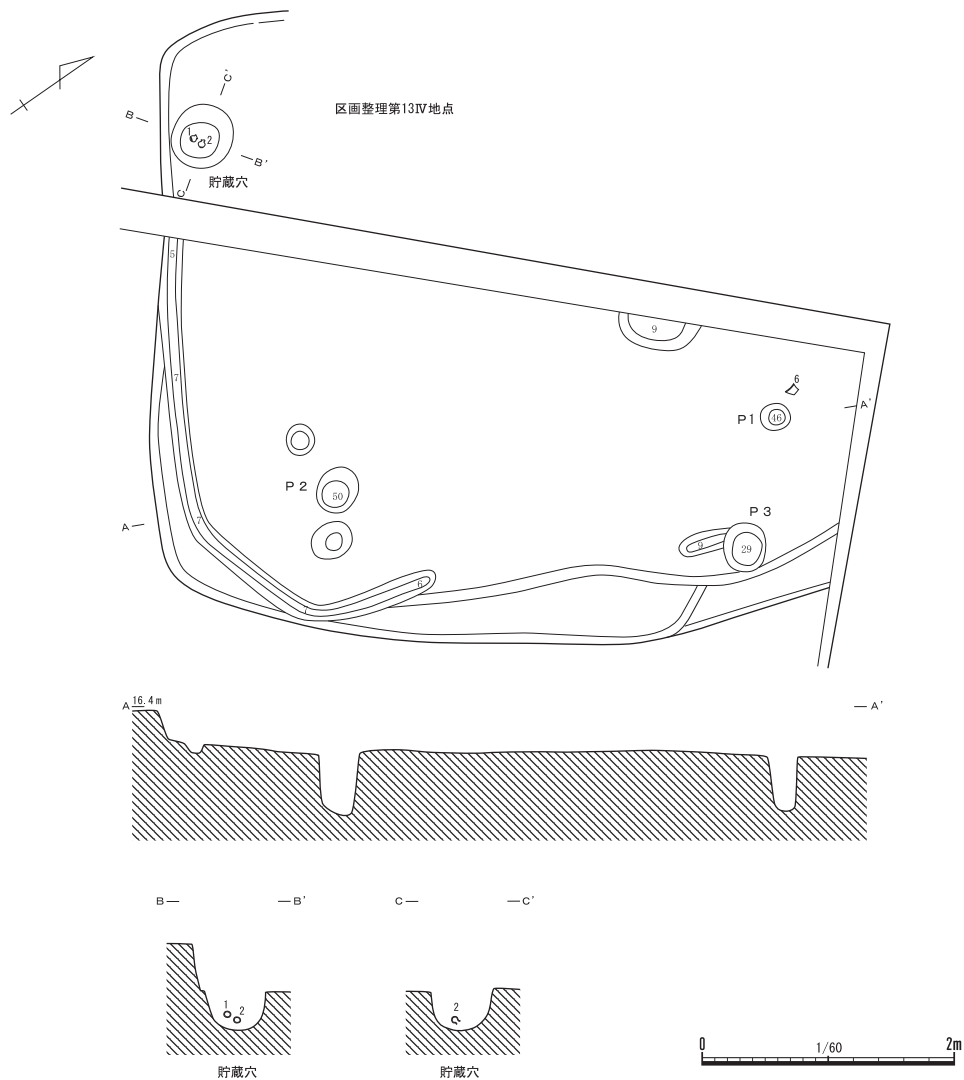
本住居跡出土の遺物は、すでに区画整理第39 I 地点において、甕形土器2点(22・23)として報告されているが、本地点では新たに遺物が出土したため、今回はその2点を12・13に変更し、全体を統合して報告することとする。

1・7・8は高坏形土器、2・3・9・10は壺形土器、4～6・11～17は甕形土器である。

### 305号住居跡

**遺 構** (第9図)

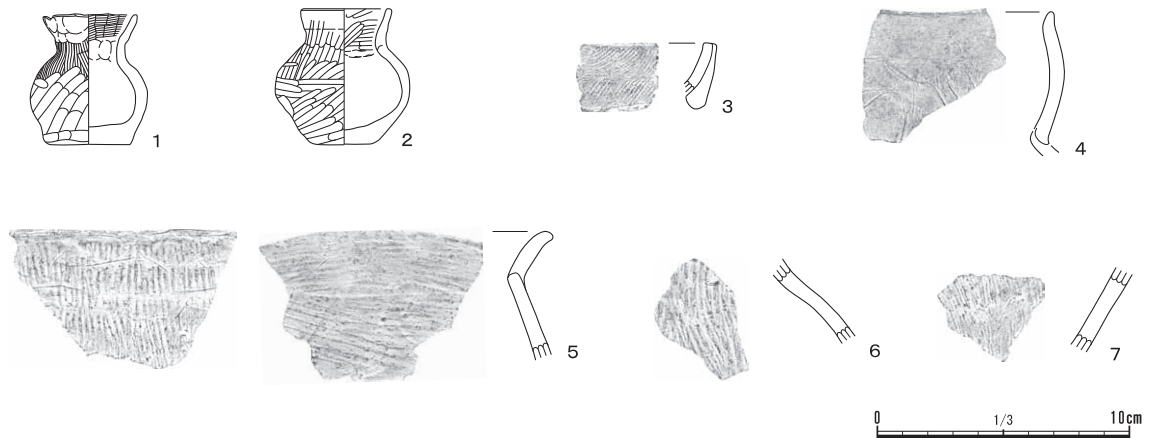
[位 置] 調査区北端。



第9図 305号住居跡 (1/60)

[検出状況] 北西側は区画整理第13Ⅳ地点で調査済みであるが、北側は遺存状態不良のため詳細は不明である。

[構 造] 平面形：隅丸長方形か。規模：長軸5.60m以上／短軸4.80m／確認面から床面までの深さ20～36cm。壁：75°程度で立ち上がる。長軸方位：N-33°-E。壁溝：住居跡南側で確認できた。上幅15～17cm／下幅4～7cm／深さ5～7cm。床面：南コーナーから南東壁付近は、床面から2～7cmほど高いテラス状になっている。硬化した床面は確認できなかった。炉：確認できなかった。貯蔵穴：西コーナー付近で検出された。平面形は51×48cmの楕円形で、深さ33cm。下層からミニチュア



第10図 305号住居跡出土遺物（1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第10図1 図版5-1-1	ミニ チュア 土器	90%	高 5.2 口 3.8 底 3.4	壺形／単純口縁／胴部から頸部は屈曲し、口縁部は内湾気味に開く／最大径は胴部上半にもつ／平底／区画13Ⅳ-1を再実測	内面：口縁部はハケ目調整、頸部は指頭押捺による成形、胴部は不明／外面：口縁部は指頭押捺による成形、以下はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	貯蔵穴下層
第10図2 図版5-1-2	ミニ チュア 土器	80%	高 5.4 口 (3.6) 底 2.4	壺形／単純口縁／口縁部はやや内湾気味に直立し、口縁部は外傾する／最大径は胴部上半にもつ／平底／区画13Ⅳ-2を再実測	内外面：ヘラ磨き調整、胴部内面は不明であるが、ヘラ磨き調整と思われる	淡茶褐色／黄褐色粒子を多く、橙色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	貯蔵穴下層
第10図3 図版5-1-3	壺	口縁部 小破片	厚 0.8	幅広複合口縁／口縁部は内湾気味に立ち上がる／口唇部は平坦／内面に赤彩	文様は外面複合部にLRの単節斜縄文を2段、円形赤彩文を1か所と縦方向の沈線文1本、口唇端部にLR単節斜縄文を施文／内面はヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒含む	覆土中
第10図4 図版5-1-4	壺	口縁部 破片	高 [5.0]	瓢形壺／口縁部は途中膨らみをもち、口唇部は外反する	内外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	貯蔵穴
第10図5 図版5-1-5	甕	口縁部～胴 部上半 破片	高 [5.1]	「く」の字口縁／口唇端部は丸い／内外面は黒く煤けている	内外面：粗い目のハケ目調整後口縁部は横ナデ	淡茶褐色を基調／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第10図6 図版5-1-6	甕	口縁部上半 破片	厚 0.6	胴部に膨らみをもつ／外面は黒く煤けている	内面：ヘラナデ／外面：粗い目のハケ目調整	暗黄褐色／茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	P1すぐ北側の ほぼ床面上
第10図7 図版5-1-7	甕	胴部下半 破片	厚 0.6	胴部に膨らみをもつ／内面は黒く煤けている	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整	暗褐色を基調／暗黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	覆土中

第7表 305号住居跡出土土器一覧



土器2点（1・2）が出土した。柱穴：P1とP2が主柱穴と思われる。深さ46・50cm。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆土] 区画整理第13Ⅳ地点では、攪乱が著しいため詳細は不明とある。

[遺物] 壺・甕形土器、ミニチュア土器が出土した。

[時期] 古墳時代前期前葉。

**遺物**（第10図、図版5-1、第7表）

本住居跡出土の遺物は、すでに区画整理第39Ⅰ地点においてミニチュア土器2点（1・2）が報告されている。今回はその2点を含めて報告することとする。

1・2はミニチュア土器である。区画整理第39Ⅰ地点において報告されたミニチュア土器（1・2）に相当する。今回、再実測を行い掲載した。

3・4は壺形土器、5～7は甕形土器である。

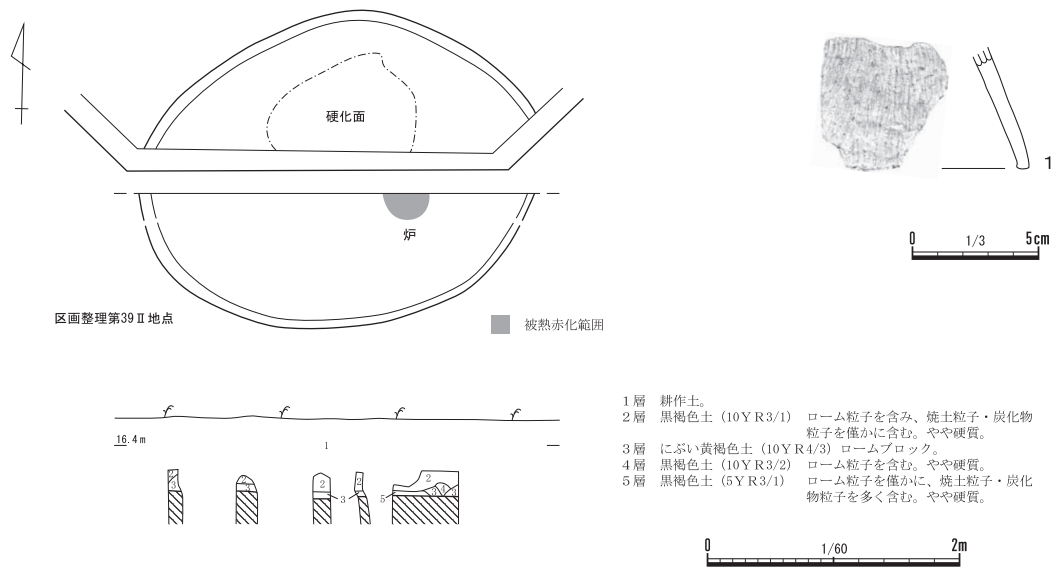
308号住居跡

**遺構**（第11図）

[位置] 調査区南隅。

[検出状況] 南側は区画整理第39地点Ⅱで調査済みである。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸3.22m／短軸2.47m／確認面から床面までの深さ12～26cm。



- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10Y R3/1) ローム粒子を含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 にぶい黄褐色土 (10Y R4/3) ロームブロック。
- 4層 黒褐色土 (10Y R3/2) ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (5Y R3/1) ローム粒子を僅かに、焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。

第11図 308号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第11図1 図版5-2-1	高坏	脚台部破片	高 [4.8]	脚台部は「ハ」の字状／裾部はやや内湾する／内外面に赤彩	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中

第8表 308号住居跡出土土器一覧

壁：80°前後で立ち上がる。長軸方位：N-95°-E。壁溝：検出されなかった。床面：住居中央よりやや北壁寄りに硬化面が確認できた。炉：住居中央よりやや東に偏って位置する。楕円形の地床炉である。39cm×不明／深さ1cm。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：検出されなかった。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆 土] 4層に分層される。

[遺 物] 高環形土器の脚台部破片1点が出土した。

[時 期] 弥生時代後期後葉。

**遺 物** (第11図1、図版5-2-1、第8表)

1は高環形土器である。

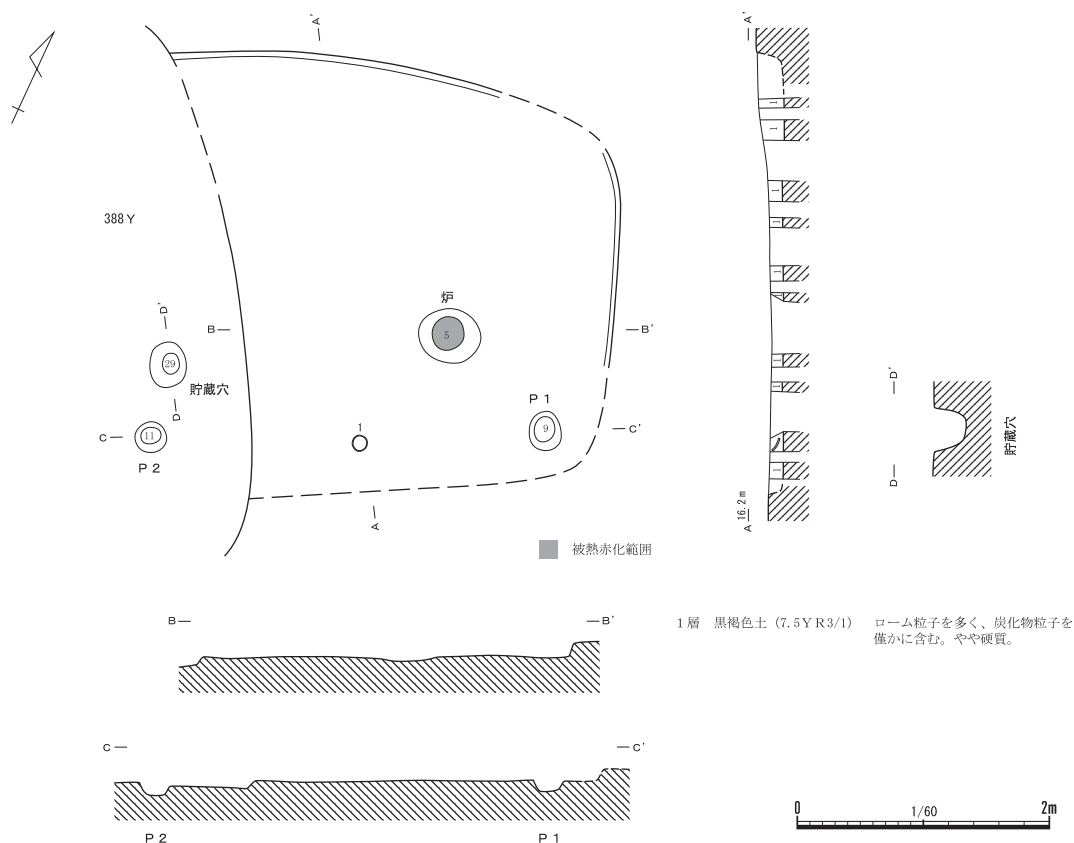
### 387号住居跡

**遺 構** (第12図)

[位 置] 調査区中央やや南寄り。

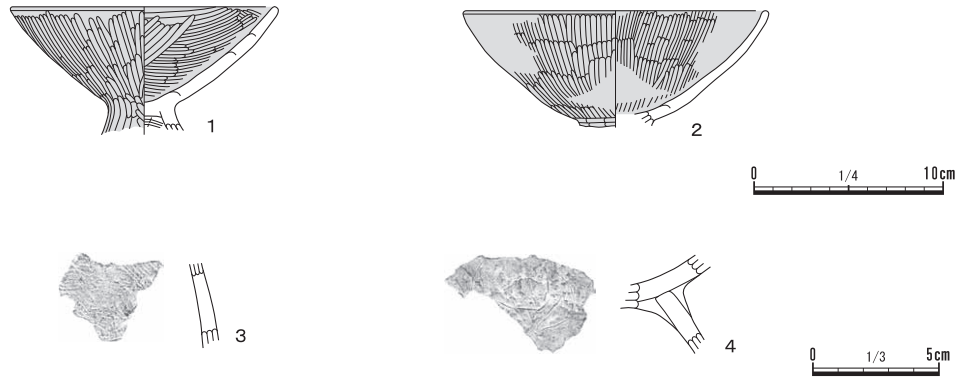
[検出状況] 388Y切られる。かなりの部分が耕作による影響を受けている。

[構 造] 平面形：隅丸長方形か。規模：長軸3.65m以上／短軸3.55m／確認面から床面までの深さ8～29cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-70°-E。壁溝：検出されなかった。床面：一部硬化面を確認できた。炉：東壁から1m程離れて位置する。楕円形の地床炉である。長軸50cm／短軸44cm／深



第12図 387号住居跡 (1/60)





第13図 387号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第13図1 図版5-3-1	高坏	口縁部～脚 台部上半 90%	高 [6.8] 口 14.2	坏部の器形は全体に口縁部にかけて内湾気味に開く／脚台部は「ハ」の字状／外面及び坏部内面に赤彩	内面:坏部はへら磨き調整、脚台部はハケ目調整／外面:へら磨き調整	淡茶褐色～暗赤褐色／茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	南壁近くのほぼ床面上
第13図2 図版5-3-2	高坏	坏部のみ 20%	高 [6.1] 口 (16.0)	坏部の器形は全体に口縁部にかけて内湾気味に開く／外面及び坏部内面に赤彩	坏部内面及び外面:へら磨き調整	暗赤褐色／茶褐色粒子・橙色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第13図3 図版5-3-3	甕	胴部上半 小破片	厚 0.5	胴部に僅かに膨らみをもつ	内面:へらナデ後粗いへら磨き調整／外面:ハケ目調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第13図4 図版5-3-4	甕	胴部下半～ 脚台部上半 破片	高 [3.8]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／外面は一部黒く煤けている	内面:胴底部はへら磨き調整、脚台部はへらナデ／外面:ハケ目調整後へら磨き調整	暗橙色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中

第9表 387号住居跡出土土器一覧

さ5cm。中央付近は被熱により赤化していた。貯蔵穴：住居東側の388 Y床下より検出された。平面形は35×28cmの隅丸方形で、深さは387 Yの床面から29cm。柱穴：P1とP2は本住居に伴うと思われる。深さは387 Y床面から9～11cm。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆 土] 黒褐色土を基調とする。

[遺 物] 高坏・甕形土器が出土した。

[時 期] 古墳時代前期初頭。

**遺 物** (第13図、図版5-3、第9表)

1・2は高坏形土器、3・4は甕形土器である。

### 388号住居跡

**遺 構** (第14図)

[位 置] 調査区中央やや南寄り。

[検出状況] 390 Yに切られ、387・389 Yを切る。かなりの部分耕作による影響を受けている。

[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸5.86m／短軸5.18m／確認面から床面までの深さ15～28cm。壁：60～70°程度で立ち上がる。長軸方位：N-56°-E。壁溝：検出されなかった。床面：

一部に硬化面が確認できた。炉：住居中央よりやや東側に偏って位置する。楕円形の地床炉である。長軸60cm／短軸52cm／深さ6cm。貯蔵穴：検出されなかった。柱穴：P1～P4が支柱穴と思われる。P4は4本の重複形を呈する。深さ23～58cm。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：P5が入口ピットの可能性がある。深さ9cm。

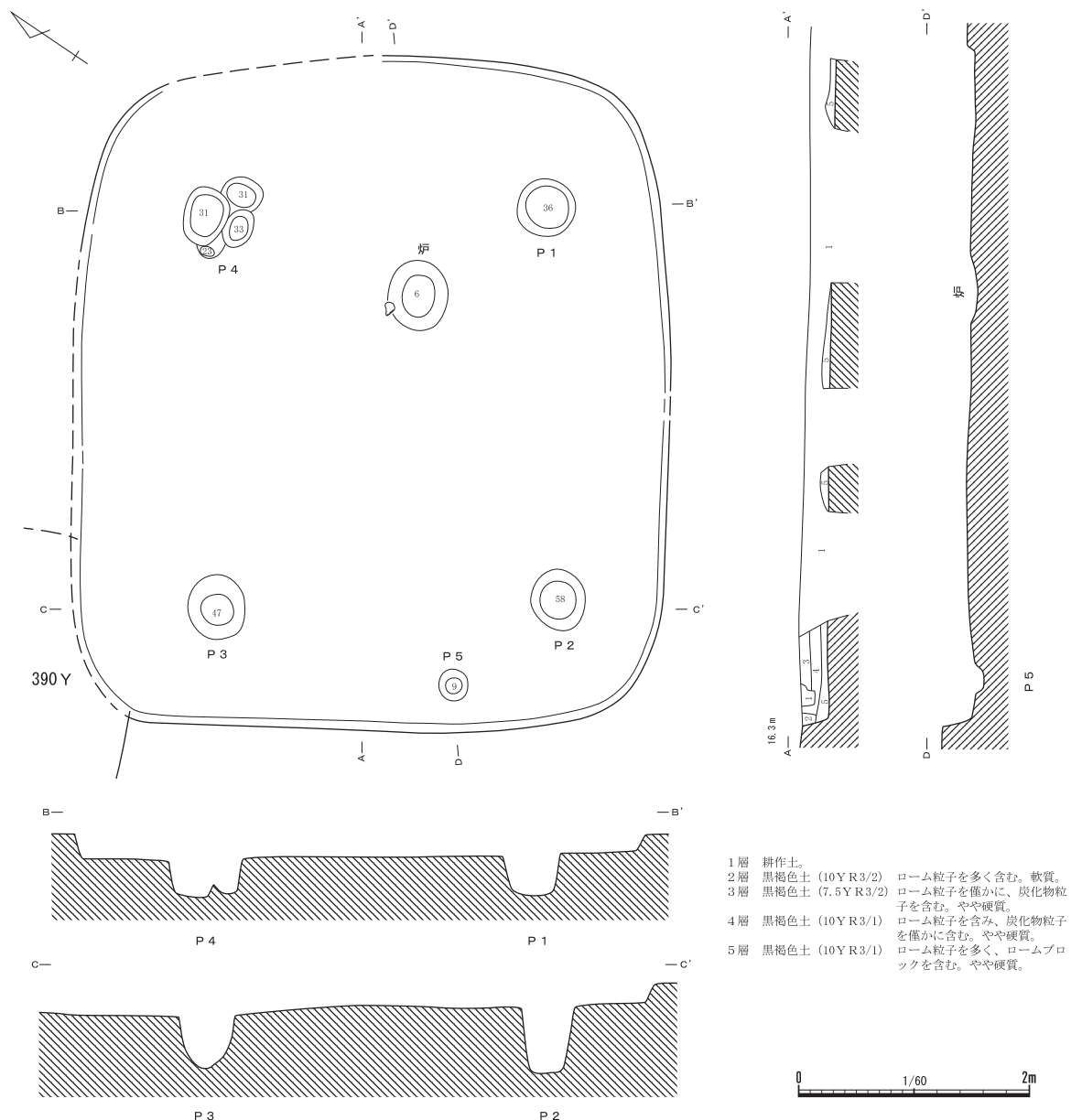
[覆 土] 4層に分層される。

[遺 物] 鉢・壺・甕形土器が出土した。

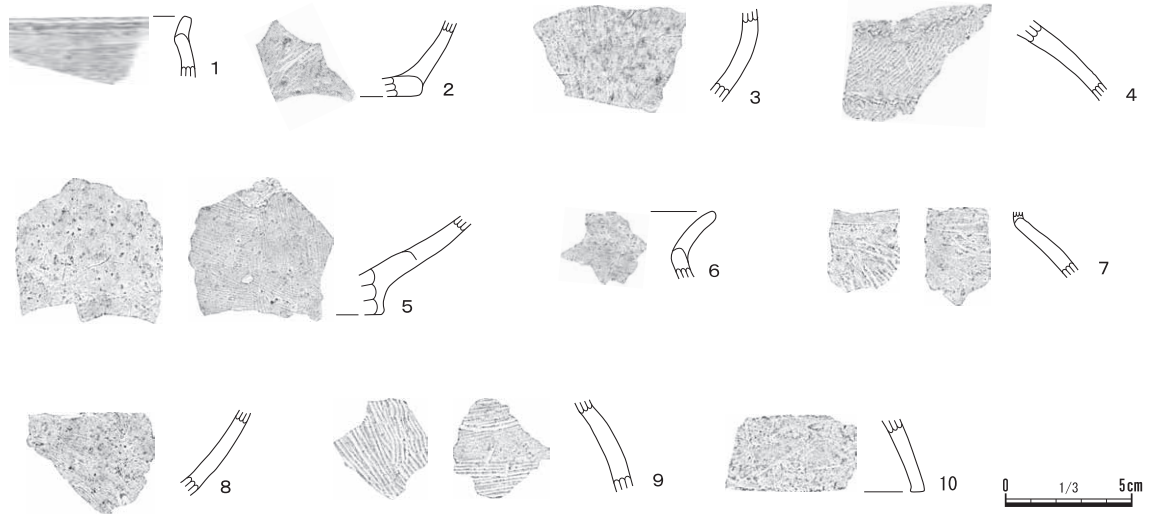
[時 期] 古墳時代前期前葉。

**遺 物** (第15図、図版5-4、第10表)

1・2は小型鉢形土器で同一個体と思われるが、高环形土器の可能性もある。3～5は壺形土器、6～10は甕形土器である。



第14図 388号住居跡 (1/60)



第15図 388号住居跡出土遺物 (1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第15図1 図版5-4-1	鉢	口縁部～体 部上半破片	厚 0.4	小型鉢／口縁部は短く外反する／内外面に赤彩／2と同一個体と思われる	内外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第15図2 図版5-4-2	鉢	体部下半～ 底部破片	高 [2.8]	小型鉢／平底／内外面に赤彩／1と同一個体と思われる	内外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第15図3 図版5-4-3	壺	胴部中位～ 下半破片	厚 0.6	胴部に膨らみをもつ／外面に赤彩(黒斑後)	内面:ヘラナデ／外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第15図4 図版5-4-4	壺	胴部上半破 片	厚 0.8	僅かに膨らみをもつ	文様は胴部上半に端末結節を伴うLR単節斜縄文を3段施文か／斜縄文は羽状構成をとらない／内面:ヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒・小石を含む	覆土中
第15図5 図版5-4-5	壺	胴部下半～ 底部破片	高 [4.5]	平底の底部から立ち上がり胴部は大きく開く／内外面黒色	内面:ハケ目調整／外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	覆土中
第15図6 図版5-4-6	甕	口縁部～胴 部上半小破 片	厚 0.5	「く」の字口縁／口唇部に刻みなし／外面は黒く燥けている	内面:粗い目のヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒をやや多く含む	覆土中
第15図7 図版5-4-7	甕	頸部～胴部 上半小破片	厚 0.5	胴部上半から頸部にかけて屈曲する	内面ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整、頸部は指頭による押捺とナデ	暗黄褐色／黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第15図8 図版5-4-8	甕	胴部下半破 片	厚 0.4	胴部に膨らみをもつ	内面:ヘラナデ／外面:ハケ目調整	暗黄褐色／黄褐色粒子を多く、橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第15図9 図版5-4-9	甕	胴部上半破 片	厚 0.5	胴部に膨らみをもつ	内面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整	暗赤褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第15図10 図版5-4-10	甕	脚台部破片	高 [3.0]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整か	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中

第10表 388号住居跡出土土器一覧

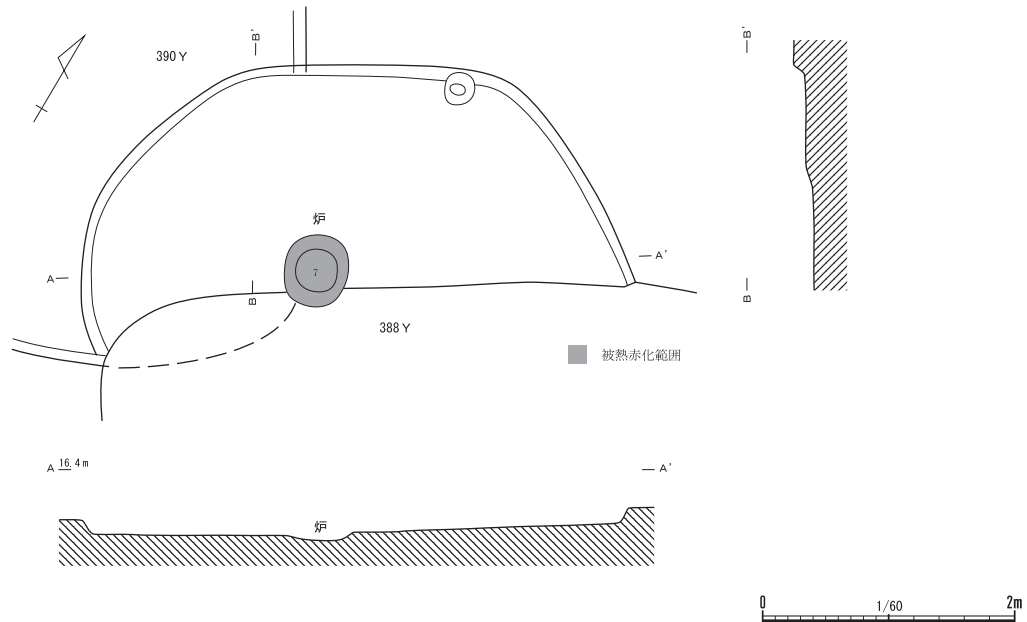
389号住居跡

遺 構 (第16図)

[位 置] 調査区中央やや南寄り。

[検出状況] 388・390Yに切られる。かなりの部分耕作による影響を受けている。

[構 造] 平面形：不整な隅丸方形か。規模：長軸4.40m／短軸2.40m以上／確認面から床面までの深さ13～26cm。壁：60°程度で立ち上がる。長軸方位：N-60°-E。壁溝：検出されなかった。床



第16図 389号住居跡 (1/60)



第17図 389号住居跡出土遺物 (1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第17図1 図版5-5-1	鉢	口縁部～体 部上半 破片	厚0.5	複合口縁／体部は丸味をもつ ／内外面に赤彩／高坏の可能 性あり	内外面：ヘラ磨き調整	黄褐色を基調／黄褐色 色粒子をやや多く、 砂粒を含む	覆土中
第17図2 図版5-5-2	甕	口縁部 破片	厚0.5	口縁部はやや内湾気味に開く ／口唇部外面にハケ状工具に よる刻みがまわる	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目 調整	黄褐色／黄褐色粒子・ 砂粒を含む	覆土中
第17図3 図版5-5-3	甕	口縁部 破片	厚0.5	口縁部は内湾気味に開く／口 唇部外面にハケ状工具による 刻みがまわる	内外面：ハケ目調整	暗黄褐色／黄褐色粒 子・茶褐色粒子・砂粒 を含む	覆土中
第17図4 図版5-5-4	甕	胴部下半 破片	厚0.6	胴部にやや膨らみをもつ	内面：ヘラナデ後粗いヘラ磨き 調整／外面：ハケ目調整	暗黄褐色／黄褐色粒 子・砂粒を含む	覆土中

第11表 389号住居跡出土土器一覧

面：硬化面は確認できなかった。炉：住居中央よりやや西側に偏って位置する。楕円形の地床炉である。長軸56cm／短軸52cm／深さ7cm。被熱による赤化が確認できた。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：検出されなかった。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆 土] 攪乱が著しいため、土層セクションはなし。土層記録なし。

[遺 物] 鉢・甕形土器が出土した。

[時 期] 弥生時代後期末葉。

**遺 物** (第17図、図版5-5、第11表)

1は鉢形土器であるが、高坏形土器の可能性もある。2～4は甕形土器である。

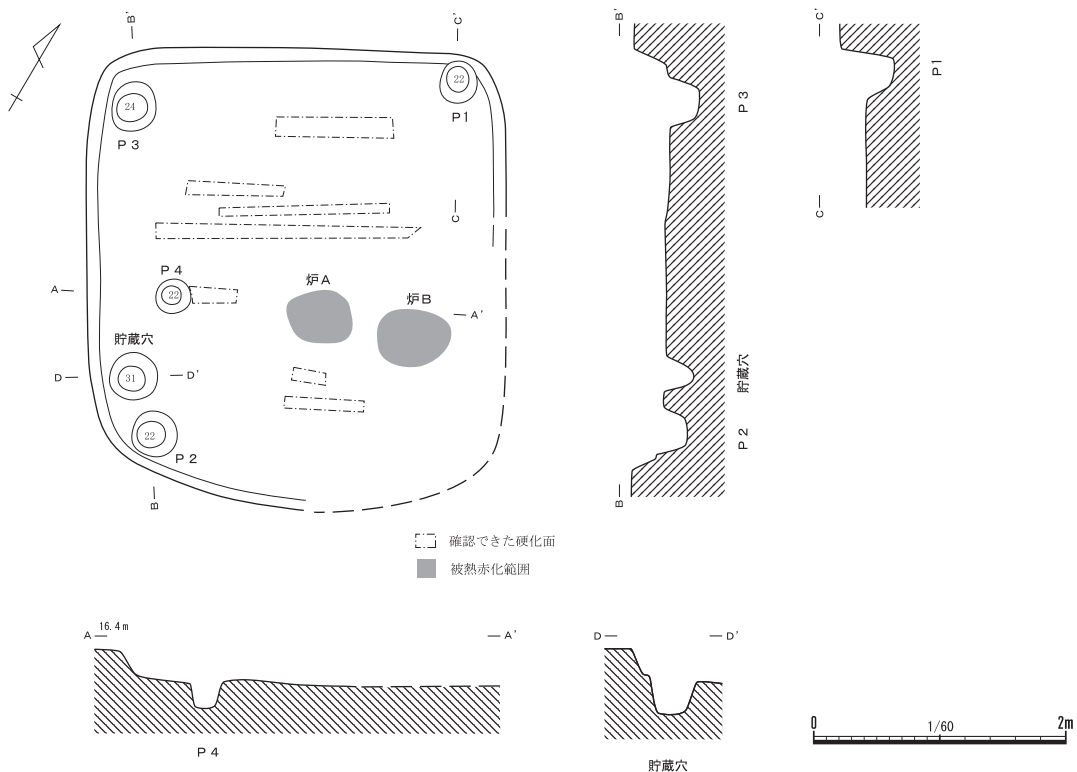
390号住居跡

**遺 構** (第18図)

[位 置] 調査区中央やや南寄り。

[検出状況] 388・389・396 Yを切る。かなりの部分耕作による影響を受けている。

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸3.63m／短軸3.34m／確認面から床面までの深さ12～28cm。壁：60°程度で立ち上がる。長軸方位：N-30°-W。壁溝：検出されなかった。床面：かなりの部分硬化面があったと思われるが、確認できた部分のみ図示した。炉：被熱により赤化した範囲が2か所確認できたことから、炉（炉A・炉B）と考えた。炉Aは長軸65cm／短軸64cm／深さ6cmの隅丸長方形で、炉Bは長軸65cm／短軸64cm／深さ6cmの楕円形で、両者とも良く被熱により赤化していた。貯蔵穴：南コーナー近くに位置する。38×37cmの円形。深さ31cm。柱穴：P1～P3が検出されているが、位置関係から支柱穴かどうかは不明である。深さ22～24cm。赤色砂利層：確認できなかった。



第18図 390号住居跡 (1/60)

入口施設：P 4が入口ピットと思われる。深さ22cm。

[覆 土] 攪乱が著しいため、土層セクションはなし。土層記録なし。

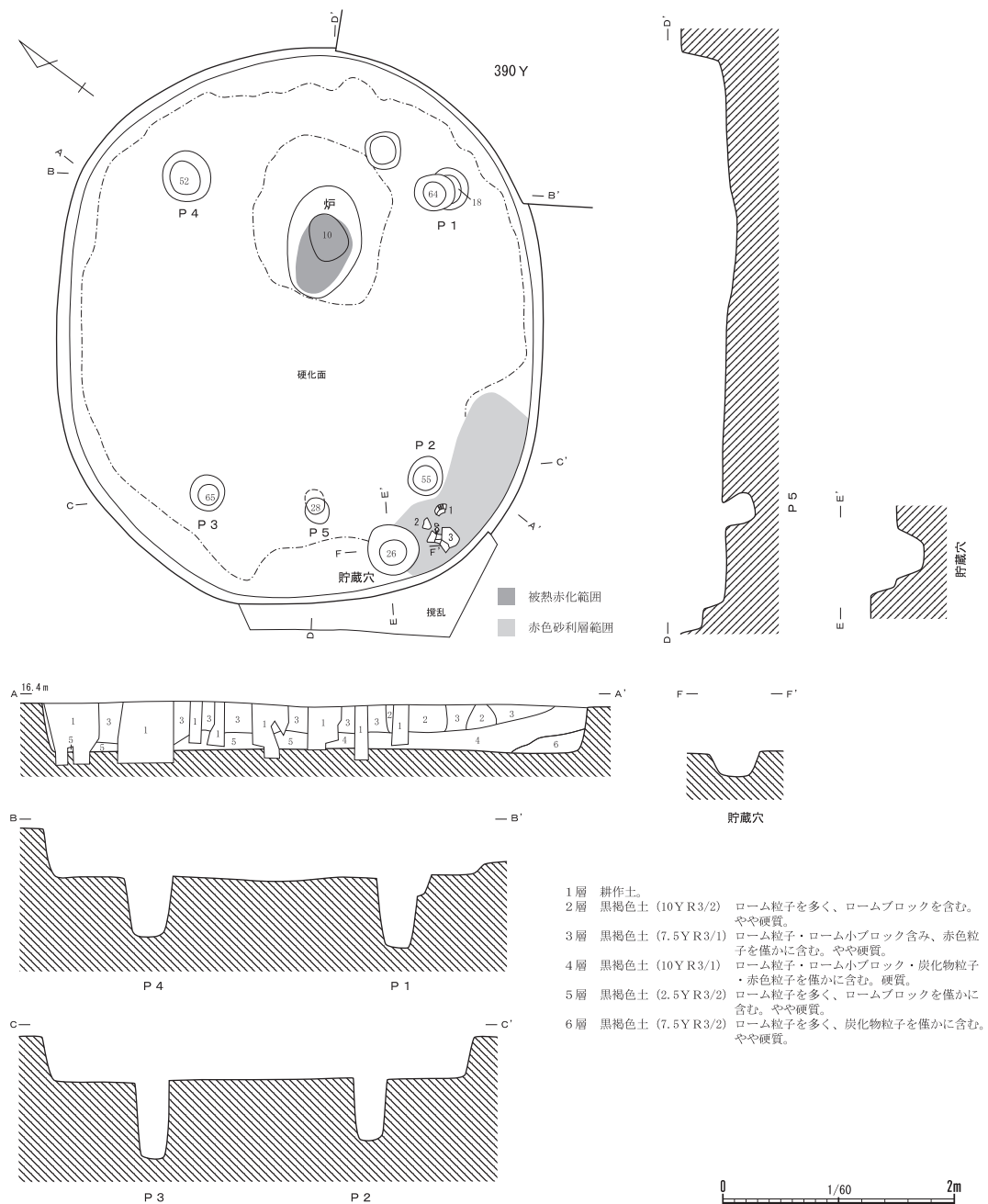
[遺 物] 小破片のみで、図示できなかった。

[時 期] 古墳時代前期中葉か。

### 396号住居跡

遺 構 (第19図)

[位 置] 調査区中央から南西寄り。

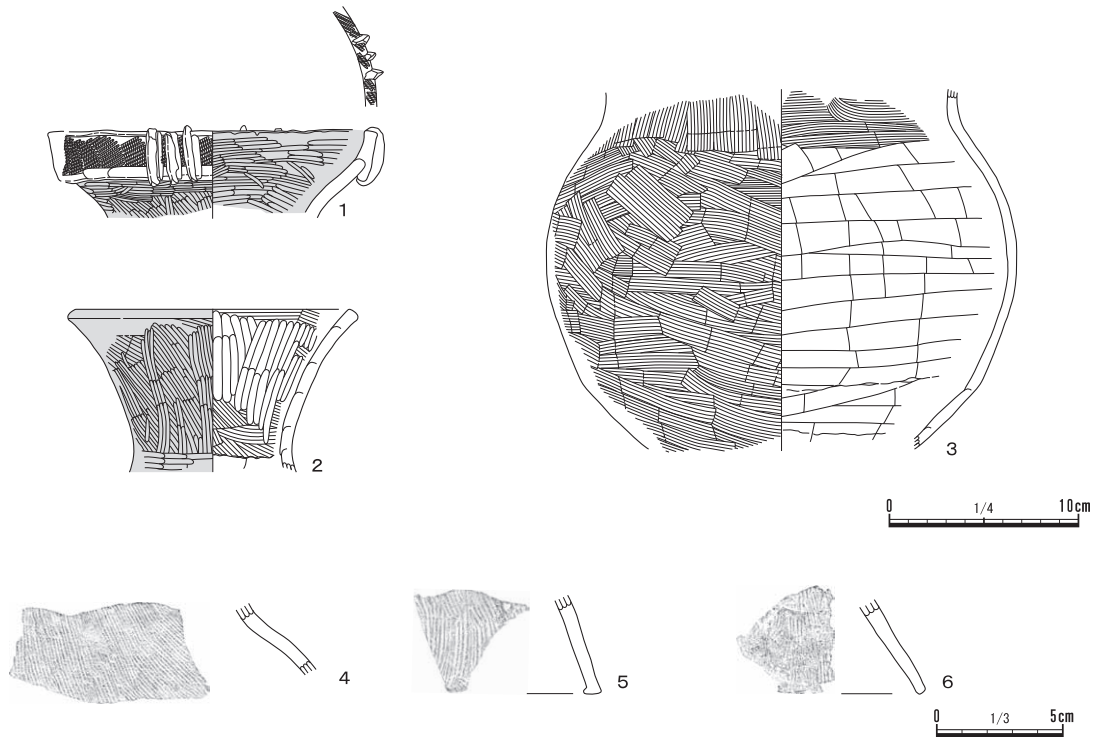


- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10Y R 3/2) ローム粒子を多く、ロームブロックを含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5Y R 3/1) ローム粒子・ローム小ブロック含み、赤色粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10Y R 3/1) ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・赤色粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (2.5Y R 3/2) ローム粒子を多く、ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5Y R 3/2) ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

第19図 396号住居跡 (1/60)

[検出状況] 279 Yを切り、390 Yに切られる。東側は耕作による影響を受けている。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸4.80m／短軸4.20m／確認面から床面までの深さ35～50cm。壁：75～80°程で立ち上がる。長軸方位：N-53°-E。壁溝：検出されなかった。床面：壁側を除いて硬化面を確認できた。炉：住居中央より東に偏って位置する。楕円形の地床炉である。長軸96cm／短軸63cm／深さ10cm。中央から西側にかけて被熱により赤化していた。貯蔵穴：南コーナーよりに



第20図 396号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第20図1 図版5-6-1	壺	口頸部 40%	高 [4.9] 口 (17.4)	幅広複合口縁／口縁部は内湾し直立する／口唇端部は平坦／内面及び外面頸部に赤彩	外面複合部及び口唇端部にLの無節斜縄文を1段施文／3本一単位の棒状貼付文が2か所見られる／内面及び外面無文部：へら磨き調整	暗黄褐色を基調／黄褐色・橙色粒子・砂粒を含む	貯蔵穴東の赤色砂利層直上
第20図2 図版5-6-2	壺	口頸部 20%以下	高 [8.6] 口 (15.4)	単純口縁／口頸部は外反する／口唇部は平坦／外面に赤彩、内面は一部赤彩が残るが不明	内面：ハケ目調整後幅の広い粗いへら磨き調整／外面：ハケ目調整後へら磨き調整、口縁部はハケ目調整後横ナデ	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・茶褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	貯蔵穴東の赤色砂利層直上
第20図3 図版5-6-3	甕	頸部～胴部 下半30%	高 [19.0]	胴部から頸部にかけての移行はスムーズ／最大径は胴部上半にもつ	内面：頸部はハケ目調整、胴部はへらナデ／外面：ハケ目調整	暗黄褐色を基調／ぶ褐色粒子・砂粒を含む	貯蔵穴東の赤色砂利層直上
第20図4 図版5-6-4	甕	頸部～胴部 上半破片	厚 0.5	胴部から頸部にかけて僅かにくびれている	内面：へらナデ／外面：ハケ目調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第20図5 図版5-6-5	甕	脚台部破片	高 [3.8]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内面：へらナデ／外面：ハケ目調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第20図6 図版5-6-6	甕	脚台部破片	高 [4.0]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／外面は僅かに黒く煤けている	内面：へらナデ／外面：ハケ目調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中

第12表 396号住居跡出土土器一覧



位置する。45×42cmの不整な円形で、深さ26cm。柱穴：P1～P4が支柱穴と思われる。深さ52～65cm。赤色砂利層：南コーナーの壁際の床面直上に長さ約150cm・幅約50cmの範囲で確認できた。入口施設：P5が入口ピットと思われる。深さ28cm。

[覆 土] 5層に分層される。

[遺 物] 貯蔵穴付近から壺・甕形土器がまとまって出土した。

[時 期] 弥生時代後期末葉。

**遺 物** (第20図、図版5-6、第12表)

1・2は壺形土器、3～6は甕形土器である。

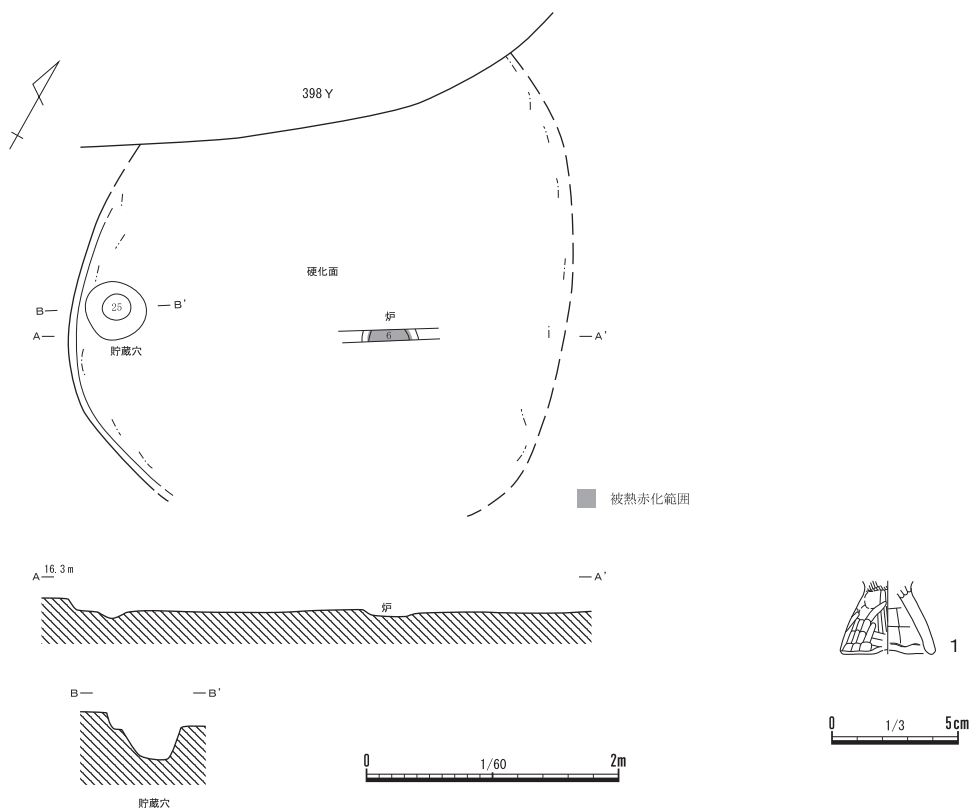
### 397号住居跡

**遺 構** (第21図)

[位 置] 調査区中央から東寄り。

[検出状況] 398 Yに切られる。かなりの部分耕作による影響を受けているため、詳細は不明。

[構 造] 平面形：隅丸方形か。規模：長軸4.0m以上／短軸3.87m／確認面から床面までの深さ9～



第21図 397号住居跡・出土遺物 (1/60・1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第21図1 図版6-1-1	ミニ チュア 土器	脚台部 20%以下	高 [2.9] 底 (3.9)	台付甕形か／脚台部は「ハ」 の字状	内面:ヘラナデ/外面:ハケ目 調整後粗いヘラ磨き調整、指 頭による成形痕が残る	黄褐色/黄褐色粒子・ 砂粒を僅かに含む	覆土中

第13表 397号住居跡出土土器一覧

14 cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：検出されなかった。床面：壁際を除いて、硬化していたと思われる。炉：住居中央より南に偏って位置する。地床炉と思われるが、ごく一部の検出であるため詳細は不明。深さ6 cm。被熱による赤化が確認できた。貯蔵穴：西壁際で検出された。46 × 45 cmの隅丸方形で、深さ25 cm。柱穴：検出されなかった。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：検出されなかった。

[覆 土] 攪乱が著しいため、土層セクションはなし。土層記録なし。

[遺 物] ミニチュア土器1点のみが出土した。

[時 期] 弥生時代後期末葉。

**遺 物** (第21図1、図版6-1、第13表)

1はミニチュア土器で、台付甕形の脚台部破片である。

### 398・399号住居跡

**遺 構** (第22図)

[位 置] 調査区中央から東寄り。

[検出状況] 調査時においては、住居跡2軒の新旧関係として認識されていたようであるが、セクションAにおける切り合いが確認できなかったことや床硬化面が住居中央に確認でき、その下部にもう1枚床面が確認できたことなどから、ここでは拡張住居として理解することとする。拡張前の旧住居跡を399号住居跡、拡張後の新住居跡を398号住居跡として説明する。397 Yを切る。

#### 新住居跡 (398号住居跡)

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸6.28m／短軸6.16 m／確認面から床面までの深さ10 cm前後。壁：残りの良い部分では70°程度で立ち上がる。長軸方位：N-42°-W。壁溝：検出されなかった。床面：住居中央付近で硬化面を確認できた。炉：2か所で検出されたうちの炉1が該当する。楕円形の地床炉である。長軸88 cm／短軸65 cm／深さ8 cm。中央付近は被熱により赤化していた。炉の南側からは3の甕形土器の胴部破片が出土している。貯蔵穴：住居西コーナーから2か所検出され、貯蔵穴2を切る貯蔵穴1が該当するものと思われる。規模は径45 cmの円形で、深さ24 cm。2の甕形土器が出土した。柱穴：P1～P4が支柱穴と思われる。深さ42 cmのP5は本住居跡に伴うのか不明である。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆 土] 6層に分層される。

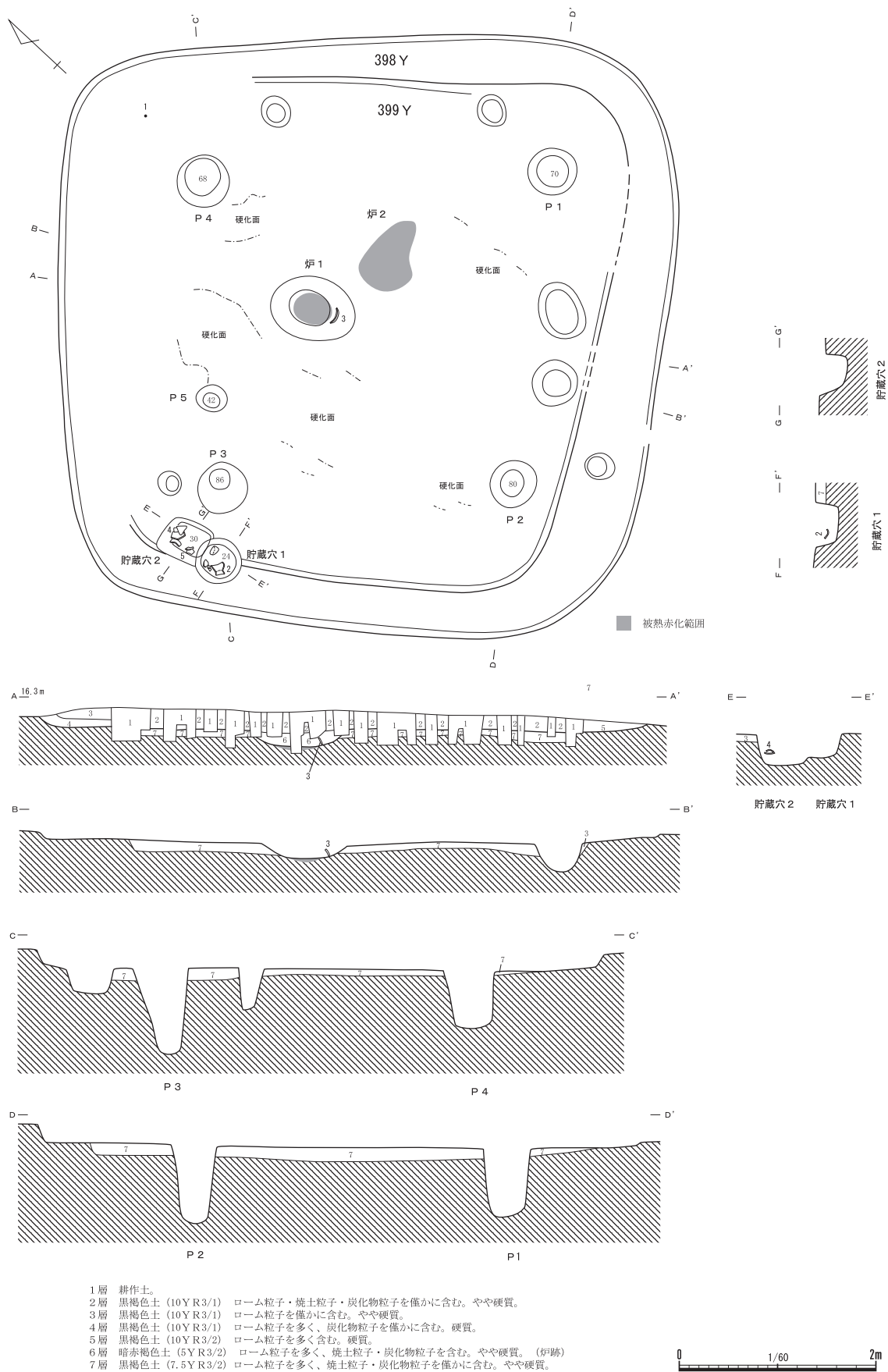
[遺 物] 壺・甕形土器が出土した。

[時 期] 古墳時代前期前葉。

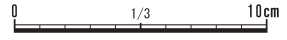
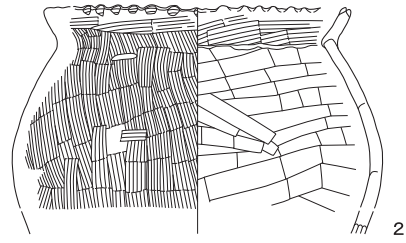
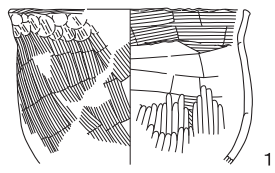
#### 旧住居跡 (399号住居跡)

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸5.64m／短軸不明／確認面から床面までの深さ25 cm。壁：残りの良い部分では70°程度で立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：検出されなかった。床面：住居中央付近で硬化面を確認できた。炉：2か所で検出されたうちの炉2が該当する。78 cm × 54 cmの不整形で全体に被熱により赤化していた。貯蔵穴：貯蔵穴1に切られる貯蔵穴2が該当するものと思われる。規模は52 × 42 cmの長方形で、深さ30 cm。4の壺形土器、5の甕形土器が出土した。柱穴：不明。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

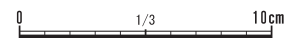
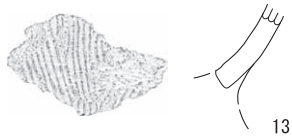
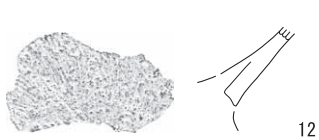
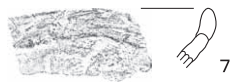
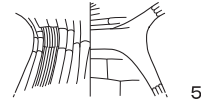
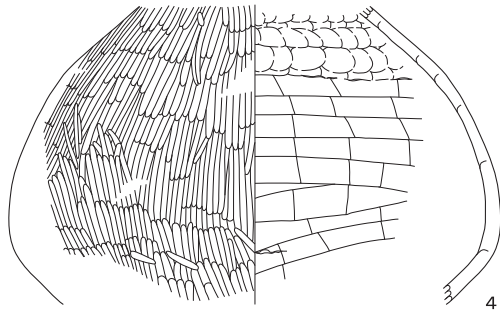
[覆 土] 5層に分層される。7層は399 Yを覆う貼床である。



第22図 398・399号住居跡 (1/60)



398号住居跡出土遺物



399号住居跡出土遺物

第23図 398・399号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

第3章 検出された遺構・遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第23図1 図版6-2-1	甕	口縁部～胴 部下半 50%	高 [8.2] 口 12.8	小型甕／口唇部はハケ状工具により平坦に面取りされ、刻みなし／頸部は屈曲せずに口縁部は緩やかに外反する／最大径は口縁部にもつ／外面は黒く煤けている	内面:口縁部はハケ目調整、胴部はハケ目調整後ヘラナデ、下半はその後粗いヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整、口縁部は指頭による成形痕が残る	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	398Y住居北 コーナーのほ ぼ床面上
第23図2 図版6-2-2	甕	口縁部～ 胴部中位 20%	高 [12.1] 口 (16.2)	「く」の字口縁／口唇部外面にハケ状工具による刻みがまわる／最大径は胴部中位にもつ／外面は黒く煤けている	内面:口縁部はハケ目調整後横ナデ、以下はヘラナデ／外面:ハケ目調整、口縁部はその後横ナデ	淡茶褐色／黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	398Y貯蔵穴1
第23図3 図版6-1-3	甕	胴部中位 破片	厚0.6	胴部に膨らみをもつ／内外面黒色	内面:ヘラナデ後粗いヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整(ランダム状)	黒褐色を基調／黄褐色粒子を多く、砂粒をやや多く含む	398Y炉1
第23図4 図版6-2-4	壺	胴部上半～ 下半 20%	高 [15.8]	最大径は胴部下半にもち、下膨れの器形	内面:ヘラナデ、胴部上半に指頭押捺による成形痕が残る／外面:ヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	399Y貯蔵穴2
第23図5 図版6-2-5	甕	胴部下半～ 脚台部中位 60%	高 [5.0]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内面:胴底部はヘラ磨き調整、脚台部はヘラナデ／外面:ハケ目調整後粗い目のいヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	399Y貯蔵穴2
第23図6 図版6-2-6	壺	口縁部 破片	厚 0.5	幅狭複合口縁／口頸部が外傾する／内外面に赤彩か	内外面:ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	399Y覆土中
第23図7 図版6-2-7	壺	口縁部 破片	高 [2.0]	口縁部はやや受口状／口縁部はやや肥厚し複合口縁状を呈する／内外面に赤彩／埴の可能性あり／粗雑品	内外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子・黒色粒子・砂粒を含む	399Y覆土中
第23図8 図版6-2-8	甕	口縁部～胴 部上半 破片	高 [4.5]	口縁部は直立気味に外反する／口唇部に刻みなし	内外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子を多く、砂粒を含む	399Y覆土中
第23図9 図版6-2-9	甕	口縁部 小破片	厚 0.5	口縁部は外反する／口唇部は平坦で刻みなし	内外面:ハケ目調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子を含む	399Y覆土中
第23図10 図版6-2-10	甕	口縁部 小破片	厚 0.5	口縁部は外反する／口唇部にやや間隔が開いた刻みがまわる	内外面:ハケ目調整後横ナデ	暗茶褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	399Y覆土中
第23図11 図版6-2-11	甕	口縁部 小破片	厚 0.5	口縁部はやや内湾気味に開く／口唇部にハケ状工具による刻みがまわる／外面は黒く煤けている	内外面:ハケ目調整	暗茶褐色を基調／橙色粒子・砂粒を含む	399Y覆土中
第23図12 図版6-2-12	甕	胴部下半 破片	高 [3.5]	台付甕／脚台部付近は器厚が厚くなっている	内面ヘラナデ／外面:ハケ目調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒・小石を多く含む	399Y覆土中
第23図13 図版6-2-13	甕	胴部下半 破片	高 [3.3]	台付甕／脚台部付近は器厚が厚くなっている	内面ヘラナデ／外面:粗い目のハケ目調整	暗褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	399Y覆土中
第23図14 図版6-2-14	甕	脚台部 破片	高 [3.7]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内外面:粗い目のハケ目調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒をやや多く含む	399Y覆土中

第14表 398・399号住居跡出土土器一覧

[遺 物] 掲載した出土遺物の多くは出土状態の詳細が不明であるため、多分に混在している可能性が高い。出土遺物は壺・甕形土器である。

[時 期] 古墳時代前期前葉。

**遺 物** (第23図、図版6-2、第14表)

398・399号住居跡出土遺物を通し番号とし、398号住居跡出土遺物は、1～3ですべて甕形土器である。399号住居跡出土遺物は、4～14で、4・6・7は壺形土器、5・8～14は甕形土器である。

400号住居跡

遺 構 (第24図)

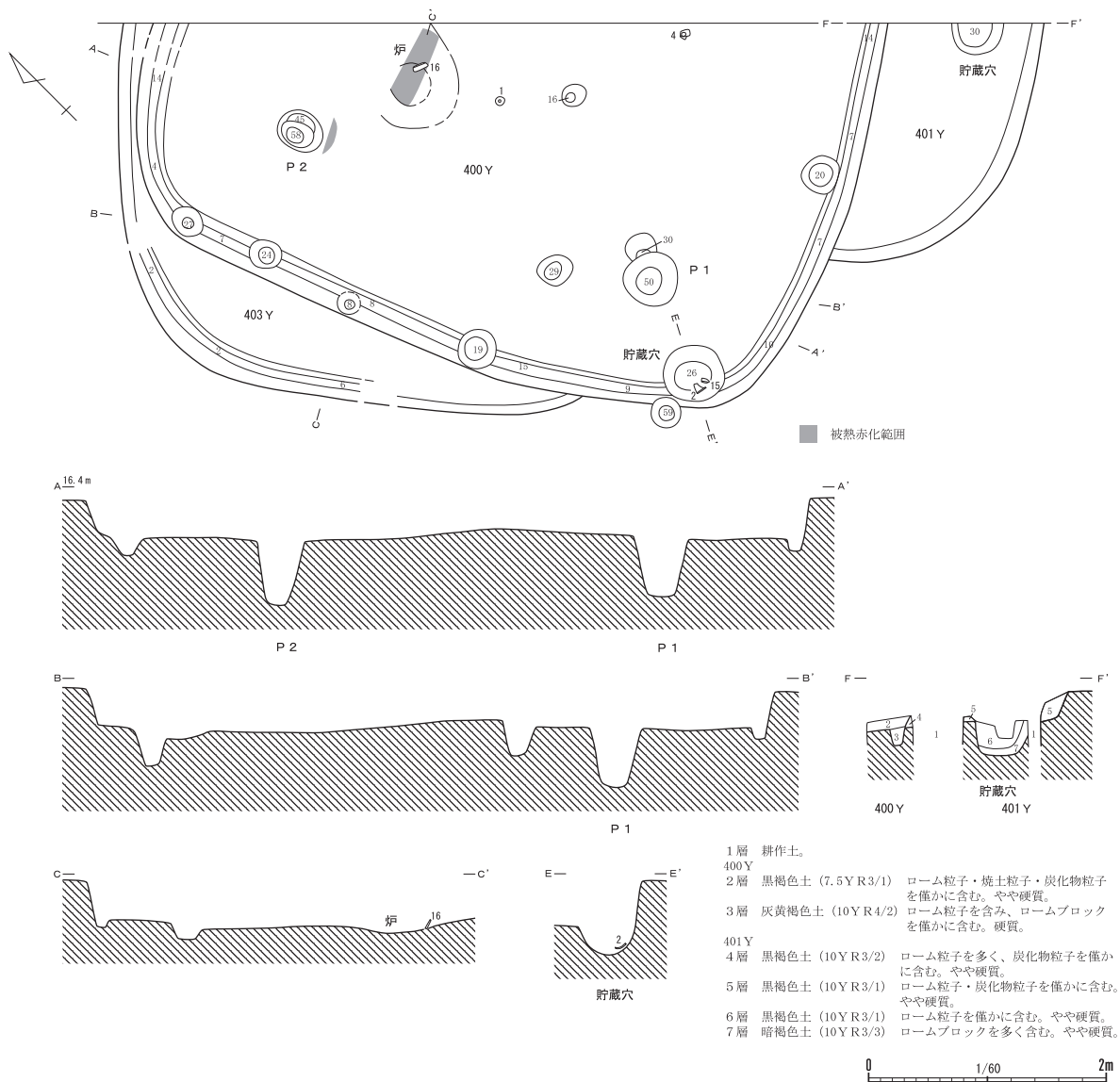
[位 置] 調査区北端。

[検出状況] 401・403 Yを切る。東側は調査区域外である。耕作の影響を大きく受けている。

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：6.02m×不明／確認面から床面までの深さ33～40cm。壁：80°程度で立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：確認できた範囲では全周する。上幅17～27cm／下幅6～10cm／深さ4～15cm。床面：一部硬化面が確認できた。炉：西コーナー寄りに位置する。地床炉で、被熱による赤化が確認できた。規模は不明、深さ8cm。403 Yの炉の可能性もある。貯蔵穴：南コーナーに位置する。50×47cmの楕円形で、深さ26cm。壺が出土した。柱穴：P 1とP 2が支柱穴と思われる、重複形態を呈する。深さ30～58cm。その他のピットは住居に伴うか不明であるが、一応深さを示した。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

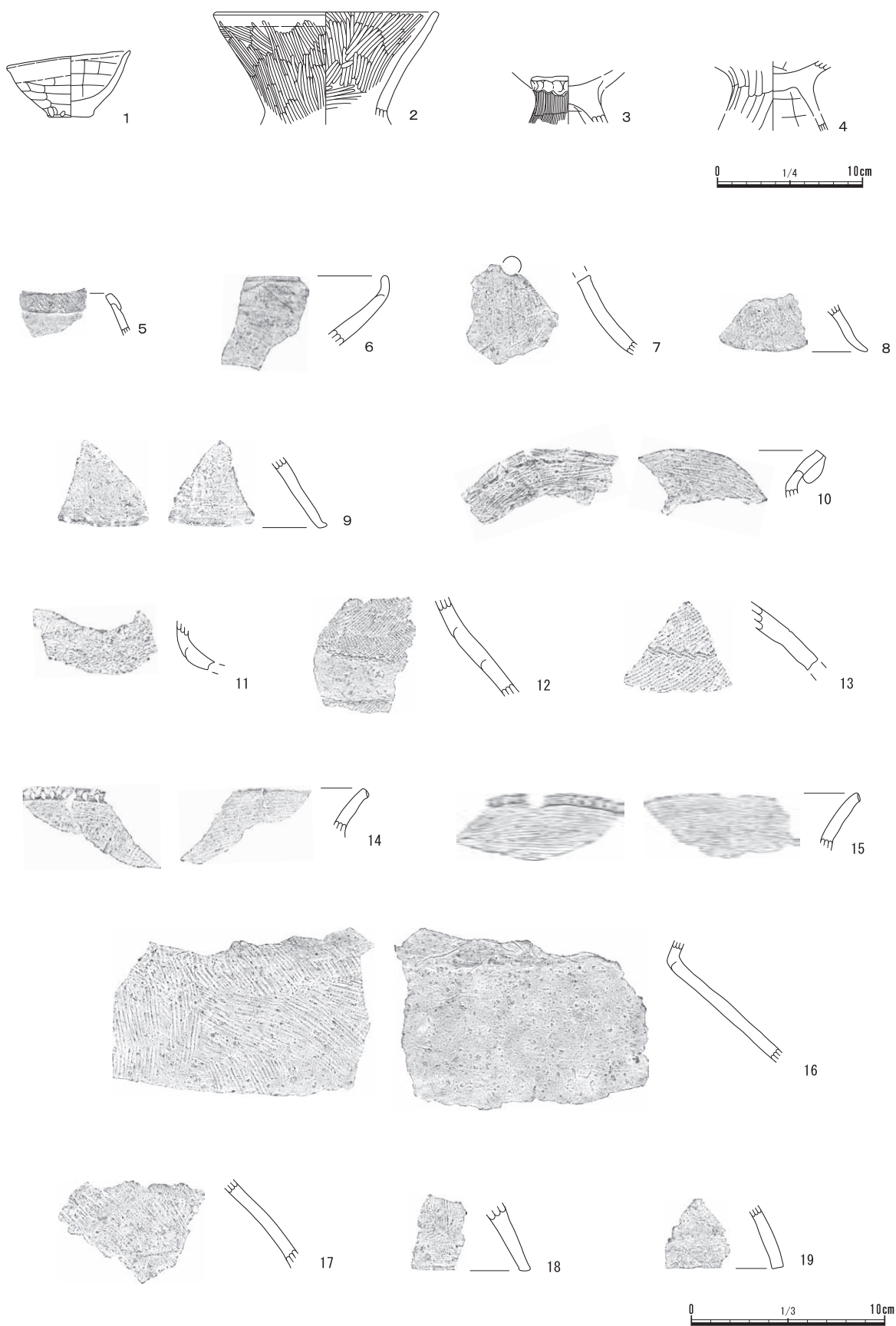
[覆 土] 2層に分層される。

[遺 物] 鉢・高坏・壺・甕形土器が出土した。



第24図 400・401・403号住居跡 (1/60)





第25図 400号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第25図1 図版6-3-1	鉢	90%	高 4.6 口 8.6 底 3.2	小型鉢／やや粗雑品／口縁部はシャープで短く外反する／胴部にやや膨らみをもつ／平底	内面:ヘラナデ／外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ	黄褐色／黄褐色粒子を多く、砂粒・小石を含む	炉すぐ南東のほぼ床面上
第25図2 図版6-3-2	壺	口頸部 50%	高 [7.8] 口 15.5	単純口縁／頸部から口縁部にかけて内湾気味に開く／内外面に赤彩の可能性あり	内面:ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒・小石をやや多く含む	貯蔵穴
第25図3 図版6-3-3	甕	脚台部上半 70%	高 [3.4]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／外面の剥離面に指頭による成形痕が観察できる	内面:ヘラナデ／外面:ハケ目調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第25図4 図版6-3-4	甕	胴部下半～ 脚台部上半 60%	高 [4.8]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内面:ヘラナデ／外面:ヘラナデ(先端はささくれ状)	暗黄褐色／黄褐色粒子を非常に多く、砂粒を含む	炉南東の調査区境際のほぼ床面上
第25図5 図版6-3-5	鉢	口縁部 小破片	厚 0.4	小型鉢／複合口縁／全体に内湾する／内外面に赤彩	文様は口縁複合部にRLの単節斜縄文を施文／内面:ハケ目調整／外面:複合部を除きヘラ磨き調整	暗赤褐色／暗黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	覆土中
第25図6 図版6-3-6	鉢	口縁部 破片	高 [3.5]	高坏の可能性あり／口縁部は受口状を呈する／内外面に赤彩／器台の可能性あり	内外面:ヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図7 図版6-3-7	高坏	脚台部 破片	高 [4.7]	脚台部は裾部に向かって外反する／途中に透かし孔1か所あり／外面に赤彩／器台の可能性あり	内面:ヘラナデ／外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	黄褐色／暗黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第25図8 図版6-3-8	高坏	脚台部 破片	高 [2.5]	脚台部は裾部に向かって外反する／内外面に赤彩／器台の可能性あり	内外面:ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図9 図版6-3-9	高坏	脚台部 破片	高 [4.1]	脚台部は「ハ」の字状／底部外面は粘土がめくれている／外面に赤彩か／器台の可能性あり	内外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第25図10 図版6-3-10	壺	口縁部 破片	高 [3.3]	幅狭複合口縁／口唇部は平坦／内外面に赤彩	内外面:口縁複合部・口唇部を含めハケ目調整	淡茶褐色を基調／黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第25図11 図版6-3-11	壺	頸部～胴部 上半 破片	厚 0.5	胴部から頸部の移行は屈曲せずスムーズ／内面に健著に輪積み痕が残る	文様は自縄結節文2段が確認できる／内面:ヘラ磨き調整、頸部には指頭による押捺痕が残る／外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／暗黄褐色粒子・橙色粒子を非常に多く含む	覆土中
第25図12 図版6-3-12	壺	頸部～胴部 上半 破片	厚 0.6	胴部から頸部の移行は屈曲せずスムーズ	頸部から胴部上半に2帯の文様帯を構成／上部文様帯:単節斜縄文を上下羽状に4段、その下端に自縄結節文2段を施文／下部文様帯:単節斜縄文の上端に自縄結節文2段を施文／内面:粗いヘラ磨き調整／外面:無文部はヘラ磨き調整	黄褐色を基調／黄褐色粒子をやや多く、橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図13 図版6-3-13	壺	胴部上半 破片	厚 0.8	胴部に膨らみをもつ	文様はLRの単節斜縄文2段を施文し、うち上段は端末結節を伴う／内面はヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第25図14 図版6-3-14	甕	口縁部 破片	厚 0.6	台付甕／口縁部は外傾する／口唇部外面に刻みがまわる／内外面黒く煤けている／15と同一個体の可能性あり	内外面:ハケ目調整、その後外面口縁部は横ナデ	黒褐色／黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	貯蔵穴
第25図15 図版6-3-15	甕	口縁部 破片	厚 0.5	口縁部は外反する／口唇部外面にハケ状工具による刻みがまわる／外面は僅かに煤けている／14と同一個体の可能性あり	内面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	貯蔵穴

第15表 400号住居跡出土土器一覧(1)

第3章 検出された遺構・遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第25図16 図版6-3-16	甕	頸部～胴部 上半 破片	厚0.5	頸部は「く」の字状に屈曲する／外面は黒く煤けている	内面:頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ／外面:粗い目のハケ目調整、その後頸部は横ナデ	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・橙色粒子をやや多く、砂粒を含む	炉
第25図17 図版6-3-17	甕	胴部上半 破片	厚0.6	台付甕／内面は黒く煤けている	内面:ヘラナデ後粗いヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図18 図版6-3-18	甕	脚台部 小破片	高[3.1]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整、裾部は横ナデ	淡茶褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第25図19 図版6-3-19	甕	脚台部 小破片	高[3.0]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内外面:粗いヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中

第15表 400号住居跡出土土器一覧(2)

[時 期] 古墳時代前期初頭。

**遺 物** (第25図、図版6-3、第15表)

1・5・6は鉢形土器、7～9は高環形土器、2・10～13は壺形土器、3・4・14～19は甕形土器である。

#### 401号住居跡

**遺 構** (第24図)

[位 置] 調査区北端。

[検出状況] 400 Yに切られる。東側は調査区域外であり、南コーナー付近のみの検出で詳細は不明である。耕作による影響も受けている。

[構 造] 平面形:楕円形か。規模:不明／確認面から床面までの深さ22～25cm。壁:75°程度で立ち上がる。長軸方位:不明。壁溝:検出されなかった。床面:耕作によりかなり破壊を受けているが、貯蔵穴付近は僅かに硬化している。炉:確認できなかった。貯蔵穴:東側の調査区際にある掘り込みが貯蔵穴の可能性はある。不明×44cmの楕円形と思われる、深さ30cm。柱穴:確認できなかった。赤色砂利層:確認できなかった。入口施設:確認できなかった。

[覆 土] 4層に分層される。

[遺 物] 小破片のみで図示できなかった。

[時 期] 弥生時代後期後葉。

#### 402号住居跡

**遺 構** (第26図)

[位 置] 調査区北西端。

[検出状況] 121 Jを切る。南西側は調査区域外であり、さらに耕作や攪乱により壊されている。

[構 造] 平面形:隅丸長方形か。規模:長軸不明／短軸4.20m／確認面から床面までの深さ22～26cm。壁:60°程度で立ち上がる。長軸方位:不明。壁溝:検出されなかった。床面:耕作によりかなり破壊を受けているが、壁際を除き硬化している。炉:住居中央よりやや北西壁に偏って位置する。

楕円形の地床炉である。長軸64cm／短軸56cm／深さ9cm。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：P1とP2が支柱穴と思われる。深さ65・70cm。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

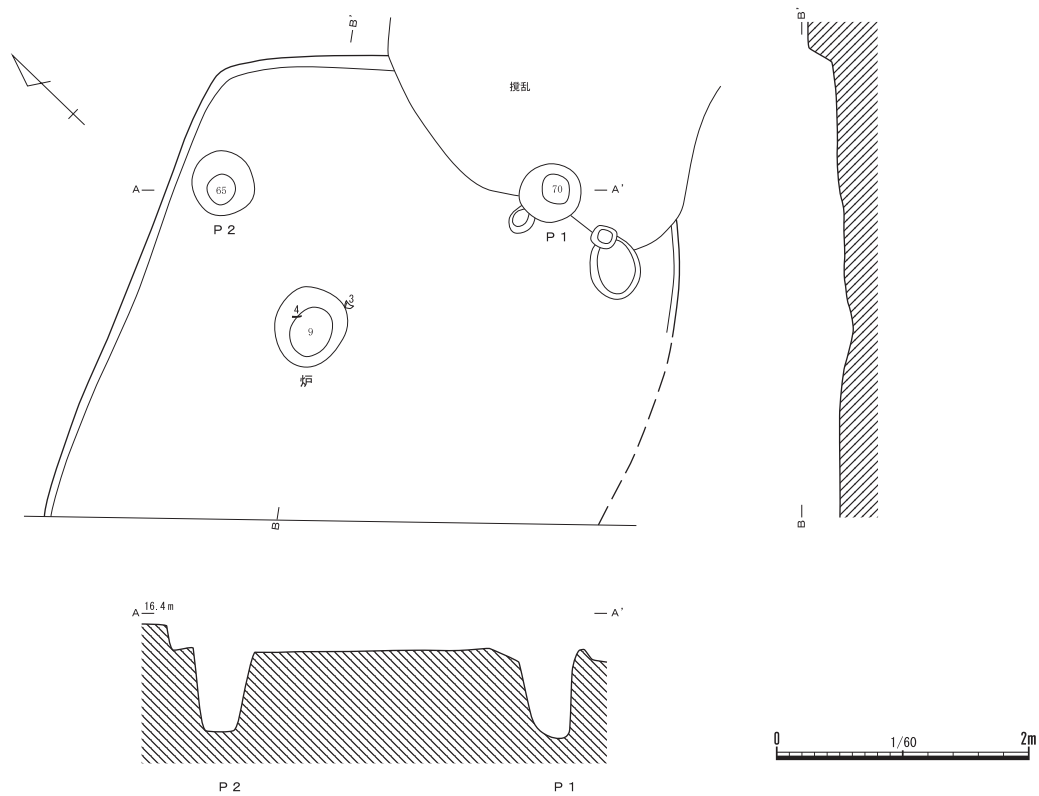
[覆土] ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む、黒褐色土を基調とする。

[遺物] 壺・甕形土器が出土した。

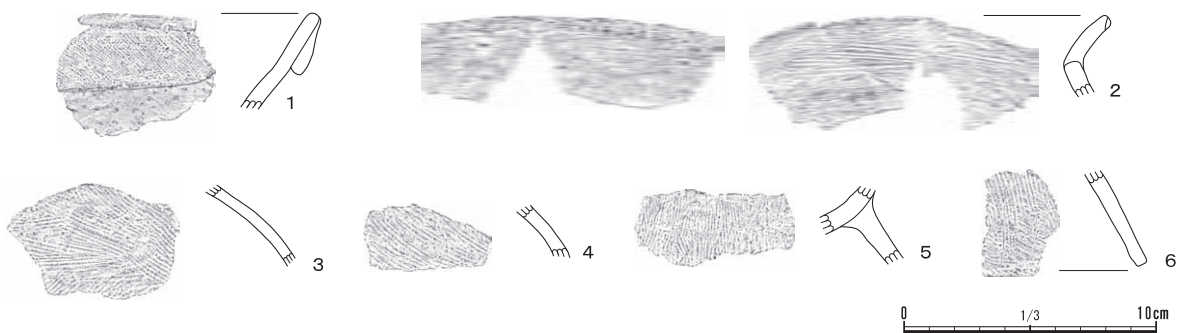
[時期] 古墳時代前期初頭。

**遺物** (第27図、図版7-1、第16表)

1は壺形土器、2～6は甕形土器である。



第26図 402号住居跡 (1/60)



第27図 402号住居跡出土遺物 (1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	出土位置
第27図1 図版7-1-1	壺	口縁部 破片	高 [4.3]	幅広複合口縁／口縁部は内湾 気味に開く／口唇部は平坦／ 内面及び外面無文部に赤彩	文様は口縁複合部にRLの単節 斜縄文を施文し、円形赤彩文 2か所が付される／内面:へら 磨き調整／外面:口縁複合部を 除きへら磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子 ・砂粒を含む	覆土中
第27図2 図版7-1-2	甕	口縁部～胴 部上半 破片	高 [3.4]	「く」の字口縁／口唇部外面 にハケ状工具による刻みがま わる	内面:ハケ目調整／外面:ハケ 目調整、口縁部はその後軽く 横ナデ	黄褐色／黄褐色粒子 を多く、茶褐色粒子・ 砂粒を含む	覆土中
第27図3 図版7-1-3	甕	胴部上半 破片	厚 0.4	胴部に膨らみをもつ	内面:へらナデ／外面:ハケ目 調整	黄褐色／黄褐色粒子 をやや多く、砂粒を 含む	炉
第27図4 図版7-1-4	甕	胴部上半 小破片	厚 0.5	胴部に膨らみをもつ	内面:へらナデ／外面:ハケ目 調整	黄褐色／黄褐色粒子・ 砂粒を含む	炉
第27図5 図版7-1-5	甕	脚台部 破片	高 [3.2]	台付甕／脚台部は「ハ」の字 状	内外面:ハケ目調整	暗赤褐色／茶褐色粒子 ・砂粒を含む	覆土中
第27図6 図版7-1-6	甕	脚台部 破片	高 [3.8]	台付甕／脚台部は「ハ」の字 状	内面:へらナデ、裾部は横ナデ ／外面:ハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子・ 砂粒を含む	覆土中

第16表 402号住居跡出土土器一覧

### 403号住居跡

#### 遺 構 (第24図)

[位 置] 調査区北端。

[検出状況] 400 Yに切られる。東側は調査区域外であり、西コーナー付近のみの検出で詳細は不明である。耕作の影響が大きく土層の確認が困難であった。

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：不明／確認面から床面までの深さ30～36cm。壁：70°程度で立ち上がる。長軸方位：不明。壁溝：一部で確認できた。上幅18～26cm／下幅6～8cm／深さ2～6cm。炉：不明。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆 土] 攪乱が著しいため、土層セクションはなし。土層記録なし。

[遺 物] 小破片のみで図示できなかった。

[時 期] 古墳時代前期末葉。

## 第3節 古墳時代後期の遺構・遺物

### (1) 概 要

古墳時代後期の遺構としては、住居跡1軒(16H)が検出された。住居北側部分はずでに区画整理第13IV地点(佐々木・内野・宮川 2009)において報告され、本地点では、調査区北西隅から南東隅の一部のみの検出であり、追加資料がなかったため、今回は遺構・遺物・写真図版は割愛することとする。

また、時期については、古墳時代後期(6世紀後半)に比定されているが、時期については、再確認を行った結果、古墳時代後期(6世紀前葉)に改めることとする。

## (2) 住居跡

### 16号住居跡

**遺 構** (第3図)

[位 置] 調査区北西端。

[検出状況] 今回の調査では、南東コーナーのみの検出である。

[構 造] 平面形：方形と思われる。規模：南北軸5.0m／確認面からの深さ4～10cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-22°-W。壁溝：上幅15cm前後／下幅5cm前後／深さ7～15cm。床面：住居中央に硬化面が認められる。カマド：北西壁に位置する。長さ130cm・幅130cm・壁への掘り込み10cm。主軸方位はN-29°-W。両袖部はロームを掘り残し、天井部と共に灰褐色粘土を被覆させ構築している。貯蔵穴：北コーナーに位置する。平面形は長方形。長軸115cm／短軸90cm／深さ62cm。底部からは環形土器2点(2・4)が出土した。柱穴：北コーナーに近い1本が支柱穴と思われる。深さは55cm。

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] 今回の調査において、新たな遺物は出土しなかった。本住居跡出土遺物については、区画整理第13IV地点においてすでに報告済みであるため、掲載を省略した。出土遺物は土師器坏(1～4)・甕形土器(5・6)が出土している。

[時 期] 古墳時代後期(6世紀前葉)。

---



---

## 第4節 遺構外出土遺物

---



---

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の遺物、弥生時代後期～古墳時代前期の土器、平安時代の土器、中世以降の遺物に分類する。

### (1) 縄文時代の遺物 (第28～30図1～95、図版7-2-1～46、図版8-47～95、第17～19表)

[石 器] (第28図1～4、図版7-2-1～4、第17表)

1～4は打製石斧で、1～3は砂岩製、4は頁岩製である。

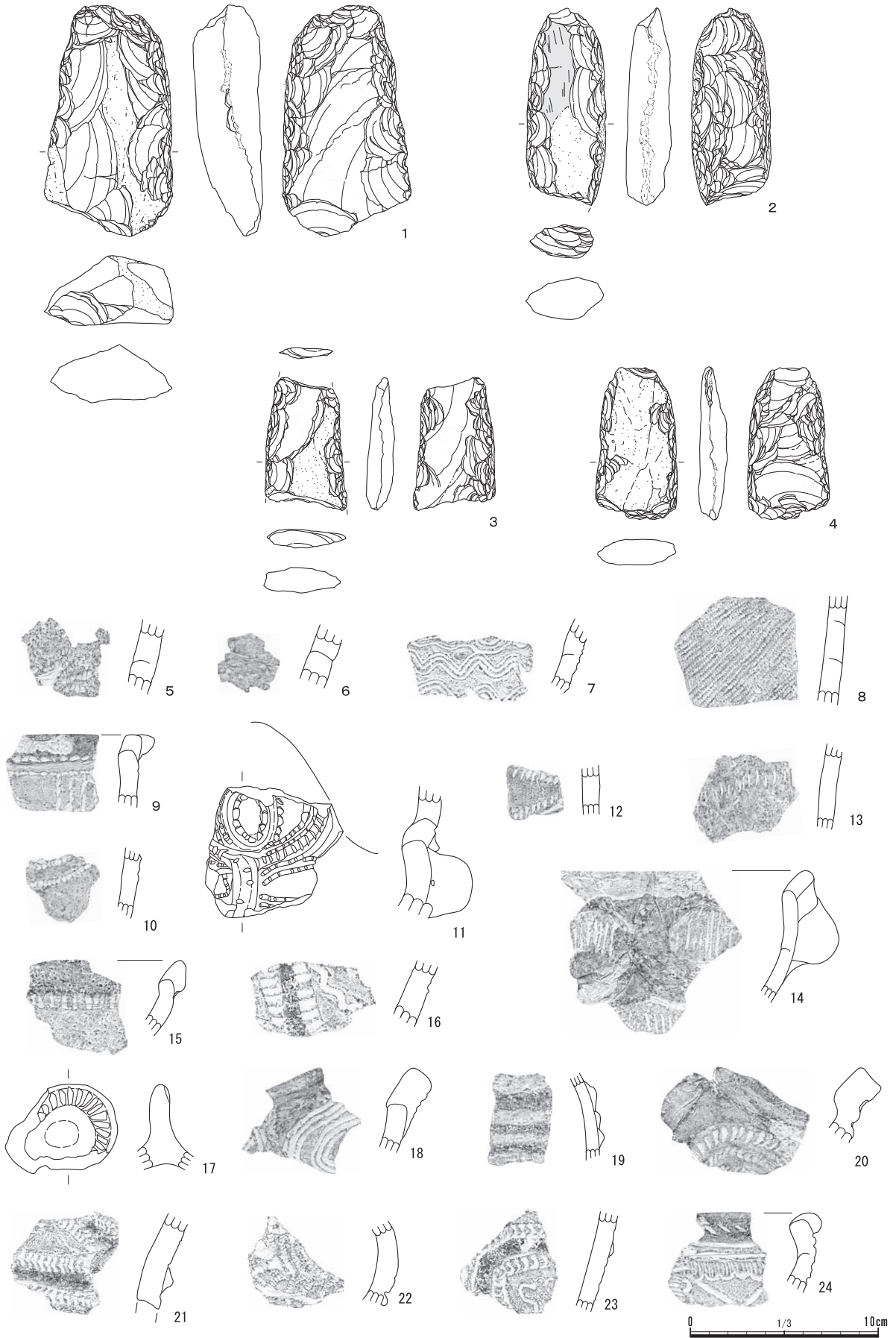
[土 器] (第28～30図5～84、図版7-2-5～46、図版8-47～95、第18表)

5～7は前期の深鉢形土器で、5・6は前期前葉の黒浜式土器、7は前期後葉の諸磯a式土器である。

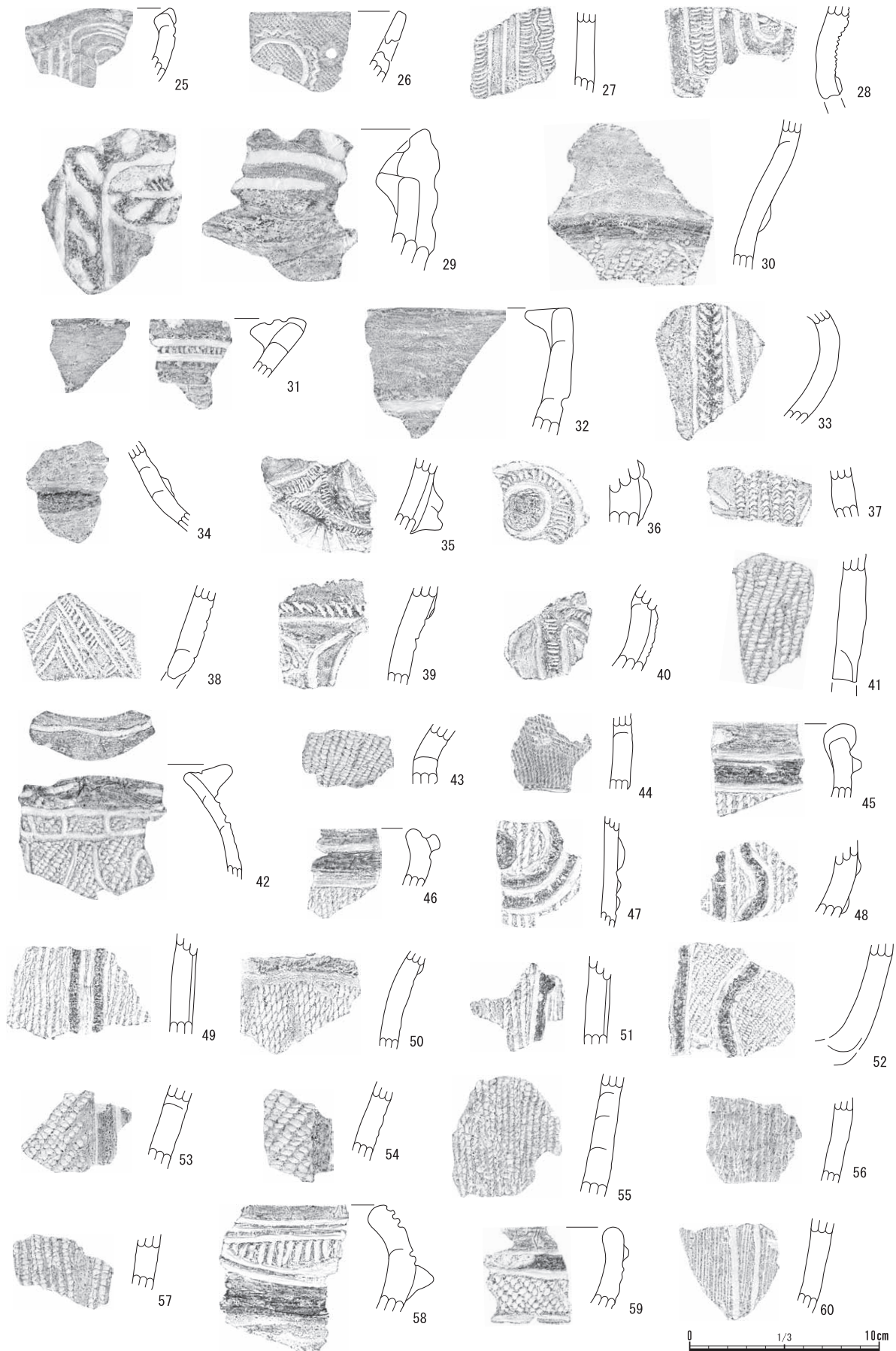
8～76は中期の深鉢形土器で、8は中期初頭の五領ヶ台式土器、9～19は中期中葉の阿玉台式土器、20～41は中期中葉の勝坂式土器、42・43は中期中葉～後葉の土器、44～71は中期後葉の加曾利E式土器、72は中期後葉の曾利式土器、73は中期後葉の連弧文土器、74は中期中葉～後葉の土器、75・76は中期の土器である。

77～81は後期の深鉢形土器で、77～79は後期前葉の堀之内式土器、80は後期中葉の加曾利B式土器、81は安行1～2式土器である。

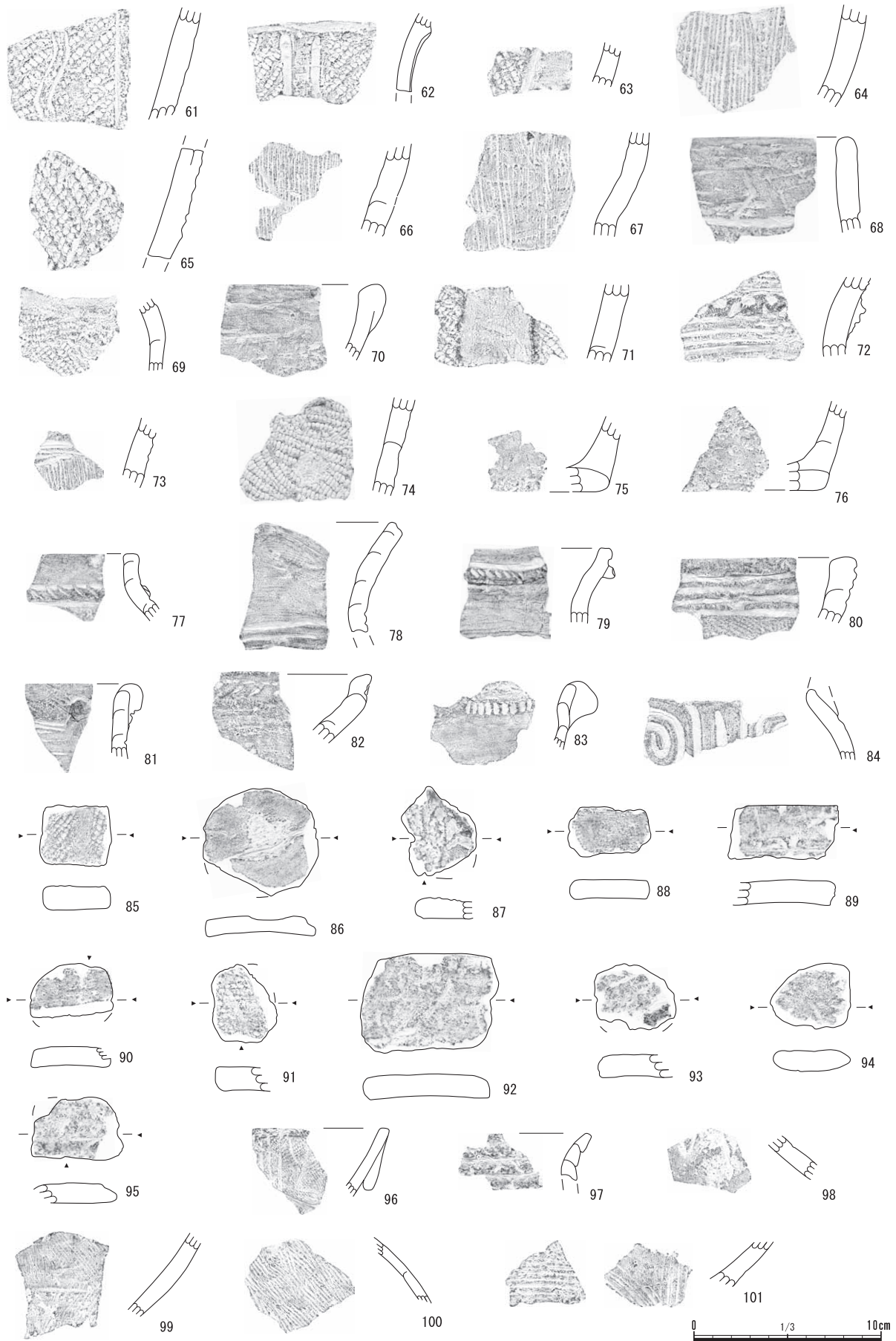




第28図 遺構外出土遺物 1 (1/3)



第29図 遺構外出土遺物 2 (1/3)



第30図 遺構外出土遺物3 (1/3)



82～84は中期の浅鉢形土器で、82は中期中葉の阿玉台式土器、83・84は中期中葉の勝坂式土器である。

[土製品] (第30図85～95、図版8－85～95、第19表)

85～95は土器片錘である。いずれも中期の土器片を転用している。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器 (第30図96～101、図版8－96～101、第20表)

96～101は土器で、96～98は壺形土器、99～101は甕形土器である。

(3) 平安時代の土器 (図版8－102、第20表)

102は須恵器甕形土器である。

(4) 中世以降の遺物 (図版8－103～108、第21表)

[陶器・土器] (図版8－103～108、第21表)

103～107は陶器で、103・104・107は瀬戸・美濃系の陶器で、103は志野皿、104は鉢、107は捏鉢である。105は小破片のため産地は不明であるが、徳利である。106は唐津系の鉢である。

108は土器で、焙烙の破片である。

挿図番号 図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置
第28図1 図版7-2-1	打製石斧	砂岩	122.2	68.1	36.9	326.8	刃部一部欠損／撥形／厚手／側縁は直線状／表面中央に礫面を残す／両側縁中央の稜上が敲打により潰れ、面状のなっている	279Y
第28図2 図版7-2-2	打製石斧	砂岩	104.2	42.1	23.8	142.4	刃部一部欠損／短冊形／側縁は弧状／側縁の潰れは全体的に顕著／表面の中央に礫面を残す	279Y
第28図3 図版7-2-3	打製石斧	砂岩	70.4	43.4	15.1	50.6	基部及び刃部欠損／短冊形か／側縁は直線状／左側縁中央稜上に顕著な潰れ／表面中央に礫面を残す	402Y
第28図4 図版7-2-4	打製石斧	頁岩	80.8	43.2	15.2	68.2	刃部欠損／短冊形か／側縁は直線状／両側縁中位以下に潰れが認められ、一部で面状になる／表面に礫面を多く残す	400Y

(単位：mm, g)

第17表 遺構外出土石器一覧

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	時期 型式	出土遺構 出土位置
第28図5 図版7-2-5	深鉢	胴部 破片	厚 1.3	外傾	地文は単節RL横位施文か／被熱による赤化・痘痕状剥離あり	灰褐／砂粒・繊維微量	前期前葉 (黒浜式)	遺構外
第28図6 図版7-2-6	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	外傾／粘土紐積上げ痕顕著	無文	明赤褐／砂粒・繊維微量	前期前葉 (黒浜式)	遺構外
第28図7 図版7-2-7	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	外傾	3本1対の沈線による多段の波状文	にぶい褐／砂粒・礫微量	前期後葉 (諸磯a式)	388 Y
第28図8 図版7-2-8	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	やや外傾	地文は単節LR横位施文	にぶい赤褐／砂粒・礫少量	中期中頭 (五領ヶ台式か)	279 Y

第18表 遺構外出土縄文土器一覧 (1)

第3章 検出された遺構・遺物

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	時 期 式	出土遺構 出土位置
第28図9 図版7-2-9	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	やや外傾して内湾する口縁／口唇部は断面三角形に肥厚	口縁部上端の隆帯脇には先丸ペン先状工具の押し引きによる結節沈線が2本巡る／下位の横位結節沈線から、縦位の結節沈線が4本垂下	にぶい褐／砂粒・礫少量、雲母多量	中期中葉 (阿玉台I b式)	遺構外
第28図10 図版7-2-10	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾	先丸ペン先状工具の押し引きによる孤状の結節沈線2本	褐／砂粒・礫・雲母少量	中期中葉 (阿玉台I b式)	遺構外
第28図11 図版7-2-11	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	内湾する口縁部／内湾してやや外傾する把手	山形の板状把手が付くか／把手直下の円環状突起を起点に、一部に押圧文が付された断面カマボコ状の隆帯による区画文を配す／隆帯脇には単列ないし複列の結節沈線が沿う	灰褐／砂粒・繊維微量	中期中葉 (阿玉台II式)	遺構外
第28図12 図版7-2-12	深鉢	胴部 破片	厚0.8	やや外傾	沈線と角押文列による区画文か	褐灰／砂粒・礫中量、雲母少量	中期中葉 (阿玉台II式)	遺構外
第28図13 図版7-2-13	深鉢	胴部 破片	厚0.9	やや外傾	無文の胴部に爪形文列が横走	にぶい黄橙／砂粒・雲母微量	中期中葉 (阿玉台II式)	遺構外
第28図14 図版7-2-14	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	やや外傾して内湾する口縁／口縁部上端で外傾／口唇部は断面三角形に肥厚	太く背の高い断面三角形の隆帯による区画文／隆帯脇ないし区画文内には縦位沈線列充填	にぶい橙／砂粒・礫・雲母中量	中期中葉 (阿玉台III式)	遺構外
第28図15 図版7-2-15	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾して外傾する口縁部／口唇部は断面三角形に肥厚して外傾	肥厚する口唇部直下に幅広竹管状工具の押し引きによる結節沈線が横走	橙／砂粒・礫多量、雲母中量	中期中葉 (阿玉台III式)	遺構外
第28図16 図版7-2-16	深鉢	胴部 破片	厚1.2	外傾	断面カマボコ状の隆帯による垂下文／隆帯脇には幅広の結節沈線が沿う／斜位の波状沈線文	にぶい橙／砂粒・礫少量	中期中葉 (阿玉台III式)	遺構外
第28図17 図版7-2-17	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	円形状の把手か	縁辺に押圧文が付された円形の把手	橙／砂粒多量、礫少量、雲母多量	中期前葉 (阿玉台III～IV式)	遺構外
第28図18 図版7-2-18	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部／口唇部は肥厚して外傾	肥厚する口唇部から断面カマボコ状の太い隆帯が垂下し区画文を形成するか／区画文内隆帯脇には3本1対の沈線が沿う	にぶい褐／砂粒・礫少量、雲母微量	中期中葉 (阿玉台IV式)	遺構外
第28図19 図版7-2-19	深鉢	口縁部 破片	厚0.6	内湾する口縁か	背の低い太い隆帯1本と細い隆帯2本が横走／細い隆帯の一端には幅広の爪形文が沿う	にぶい黄橙／砂粒多量、雲母中量	中期中葉 (阿玉台I式)	遺構外
第28図20 図版7-2-20	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部／口唇部は断面方形に肥厚して外傾／波状の口縁部ないし把手部か	口縁部上端には幅広角押文と三角押文が沿う	にぶい橙／砂粒・礫中量	中期中葉 (勝坂1式)	遺構外
第28図21 図版7-2-21	深鉢	口縁部 破片	厚1.2	僅かに内湾して広がる口縁部か	断面カマボコ状の隆帯による三角形区画文か／隆帯脇には幅広の三角押文と細く浅い沈線が沿う	明赤褐／砂粒多量、礫少量	中期中葉 (勝坂1式)	遺構外
第28図22 図版7-2-22	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する	三角押文列が波状に付される	にぶい橙／砂粒多量、礫中量	中期中葉 (勝坂1式)	遺構外
第28図23 図版7-2-23	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外傾する	断面カマボコ状の隆帯による区画文／隆帯脇には変形した幅広の角押文と細く浅い沈線が沿う	明赤褐／砂粒多量、礫少量	中期中葉 (勝坂1式)	遺構外
第28図24 図版7-2-24	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	内湾する	口縁部上端に斜行沈線が付された断面カマボコ状の隆帯が巡る／隆帯直下には半截竹管状工具による並行沈線、幅広角押文、半円形刺突文が沿い、区画文を形成するか／区画文内には斜行沈線が充填	にぶい赤褐／砂粒少量、礫中量	中期中葉 (勝坂2式)	遺構外

第18表 遺構外出土縄文土器一覧(2)

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	時期 型式	出土遺構 出土位置
第29図25 図版7-2-25	深鉢	口縁部 破片	厚0.7	内湾してやや外傾する／口唇部内面で肥厚／波状の口縁部か	一端を重ねた半歳竹管状工具の腹面引きによる区画文	灰褐／砂粒少量	中期中葉 (勝坂2式)	遺構外
第29図26 図版7-2-26	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	外傾する口縁部／上端はやや薄手	地文は単節RL横位施文／円形印刻文が付され、その周囲を沈線と波状沈線が円形に沿う／焼成後穿孔あり、補修孔か	にぶい黄橙／砂粒・礫中量	中期中葉 (勝坂2式)	遺構外
第29図27 図版7-2-27	深鉢	胴部 破片	厚0.6	僅かに外傾する	幅広の角押文列に沿う並行沈線による区画文／区画文内には波状沈線	灰黄褐／砂粒多量、礫少量	中期中葉 (勝坂2式)	遺構外
第29図28 図版7-2-28	深鉢	胴部 破片	厚1.2	外反する／膨らむ胴部下位から窄まる頸部付近か	半歳竹管状工具の覆面引きによる方形区画／区画文内には爪形文列が充填	橙／砂粒・礫多量	中期中葉 (勝坂2式)	遺構外
第29図29 図版7-2-29	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	やや内湾／口唇部内面で断面三角形状に肥厚／円筒形深鉢か	口縁部上端外面には、押圧や斜行沈線が付された隆帯による蛇体把手／把手内面には太く深い沈線が2本横走り、横長の渦巻状文となるか	橙／砂粒・礫多量	中期中葉 (勝坂3b式)	遺構外
第29図30 図版7-2-30	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	やや外傾する胴部上位／内湾して広がる口縁部	口縁部無文／口縁部下位に背の低い幅広の隆帯が横走り胴部と画す／胴部上位には単節RL縦位施文	にぶい黄橙／砂粒多量、礫少量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第29図31 図版7-2-31	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	直線的に開く口縁部／口縁部上端内面で断面三角形状に肥厚	肥厚する口縁部上端内面には沈線が2本巡り、沈線間には角押文／外面は無文	暗褐／砂粒・少量、チャート角礫多量	中期中葉 (勝坂3式)	387 Y
第29図32 図版7-2-32	深鉢	口縁部 破片	厚1.3	僅かに内湾する口縁部／口縁部上端内面で断面三角形状に肥厚／口唇部は平坦／円筒形か	口縁部は無文／口縁部直下に太く浅い沈線横走	にぶい褐／砂粒中量、礫少量	中期中葉 (勝坂3式)	279 Y
第29図33 図版7-2-33	深鉢	口縁部 破片	厚0.9	強く内湾する	矢羽状沈線が付された断面三角形の隆帯が垂下／隆帯脇には沈線が1～2本沿う	にぶい黄橙／砂粒多量、礫中量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第29図34 図版7-2-34	深鉢	口縁部 破片	厚0.8	外反して内傾する口縁部か	背の低い幅広の隆帯が横走／有孔鈔土器か	にぶい赤褐／砂粒・礫多量、雲母少量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第29図35 図版7-2-35	深鉢	胴部 破片	厚0.8	外傾する	押圧文が付された隆帯による眼鏡状突起	暗褐／砂粒・礫微量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第29図36 図版7-2-36	深鉢	胴部 破片	厚1.7	僅かに外傾するか／厚手	押圧文が付された幅広の隆帯による渦巻状文	にぶい黄橙／砂粒・礫中量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第29図37 図版7-2-37	深鉢	胴部 破片	厚1.1	外反して内傾する／胴部下位か	三角押文列による区画文か／空白部に施された沈線は三叉状文の一部か	橙／砂粒・礫微量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第29図38 図版7-2-38	深鉢	胴部 破片	厚1.2	僅かに内湾して外傾／底部付近か	多条の沈線による三角形区画／一部の沈線間には角押文が沿う	にぶい赤褐／砂粒多量、礫中量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第29図39 図版7-2-39	深鉢	胴部 破片	厚1.2	やや外反する／口縁部付近か	口縁部無文／押圧文が付された隆帯による区画文／沈線による三叉状文	灰褐／砂粒・礫多量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第29図40 図版7-2-40	深鉢	口縁部 破片	厚1.0	内湾する口縁部／口縁部上端で外折	押圧文が付された断面台形の隆帯による区画文／隆帯脇には沈線が沿う／区画内には沈線	灰褐／砂粒・礫少量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第29図41 図版7-2-41	深鉢	胴部 破片	厚1.3	やや内湾して外傾	地文は0段3条RL斜位施文	にぶい黄橙／砂粒多量、礫微量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外

第18表 遺構外出土縄文土器一覧(3)



第3章 検出された遺構・遺物

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	時 期 型 式	出土遺構 出土位置
第29図42 図版7-2-42	深鉢	口縁部 破片	厚 0.6	内湾して内傾／や や薄手	口唇部に沈線が1条巡る／口 縁部上端には連鎖状隆帯が巡 る／地文はRL縦位施文／連鎖 状隆帯直下には2本の沈線が 横走し、以下には沈線による 曲線文	にぶい褐／砂粒・礫 少量、雲母微量	中期中葉 (勝坂3式～加 曾利E1式)	遺構外
第29図43 図版7-2-43	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	外反して外傾	地文は単節RL縦位施文	にぶい黄橙／砂粒中 量、礫微量	中期中葉～後葉	遺構外
第29図44 図版7-2-44	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	わずかに内湾する 口縁部か	地文は条の幅が狭い燃糸L縦 位施文を基調に、一部斜位施 文となる	にぶい褐／砂粒微量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図45 図版7-2-45	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	口縁部内湾／口唇 部外面で肥厚	地文は燃糸L縦位施文／口縁 部上端に隆帯横走	灰黄褐／砂粒・礫少 量、角閃石多量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図46 図版7-2-46	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	強く内湾する	地文はRL横位施文／口縁部 上端に背の高い隆帯横走／隆 帯脇には沈線が沿う	黄橙／砂粒・礫微量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図47 図版8-47	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	ほぼ直立する	地文は燃糸L縦位施文／2本 1対の隆帯による渦巻状文	にぶい橙／砂粒少量、 礫微量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図48 図版8-48	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	僅かに内湾／胴部 中位か	地文は燃糸L縦位施文／直状 隆帯と波状隆帯が垂下	にぶい褐／砂粒・礫 微量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図49 図版8-49	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	ほぼ直立する	地文は燃糸L縦位施文／2本 1対の隆帯が垂下	にぶい褐／砂粒・礫 微量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図50 図版8-50	深鉢	胴部上 位破片	厚 1.0	やや外反して外傾	地文は燃糸L縦位施文／胴部 上端に隆帯横走	黒褐／砂粒多量、礫 微量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図51 図版8-51	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	外傾する	地文は燃糸L縦位施文／1本 の直状隆帯垂下	褐／砂粒・礫微量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図52 図版8-52	深鉢	胴部下 位破片	厚 1.1	やや内湾して広が る	地文は単節RL縦位施文／直 状隆帯と波状隆帯が垂下	明黄褐／砂粒・礫中 量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図53 図版8-53	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	外傾する	地文は単節RL縦位施文／2 本1対の隆帯が垂下／隆帯脇 には沈線が沿う	褐／砂粒多量、礫中 量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図54 図版8-54	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	外傾する	地文は単節RL縦位施文／隆 帯が垂下／隆帯脇の沈線は甘 い	橙／砂粒少量、礫微 量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図55 図版8-55	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	やや外傾	地文は燃糸L縦位施文	浅黄橙／砂粒多量、礫 中量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図56 図版8-56	深鉢	胴部 破片	厚 0.7	やや外傾する	地文は燃糸L縦位施文／内面 に上から上へケズリ状痕跡	にぶい赤褐／砂粒・礫 少量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図57 図版8-57	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	やや外傾する	地文は燃糸L縦位施文	にぶい赤褐／砂粒・礫 中量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第29図58 図版8-58	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	強く内湾する	口縁部上端には細く深い3本 1対の沈線が横走／口縁部下 位には背の高い断面三角形の 隆帯による半楕円区画文／区 画文内には縦位沈線列が充填 ／隆帯脇には細く深い2本1 対の沈線が沿う	灰褐／砂粒・礫少量	中期後葉 (加曾利E2式)	遺構外
第29図59 図版8-59	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	内湾する	地文は単節RL横位施文／口 縁部上端に断面カマボコ状の 隆帯が横走し、方形ないし反 楕円区画を形成	暗赤褐／砂粒多量、礫 微量	中期後葉 (加曾利E2式)	遺構外

第18表 遺構外出土縄文土器一覧(4)

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	時 期 型 式	出土遺構 出土位置
第29図60 図版8-60	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	やや外傾する	地文は縦位の沈線／2本1対の沈線垂下	橙色／砂粒・礫中量	中期後葉 (加曾利E 2式)	遺構外
第29図61 図版8-61	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	外傾する	地文は単節RL縦位施文／半歳竹管状工具による2本1対の並行沈線が波状ないし直状に垂下する	明黄褐／砂粒・礫中量	中期後葉 (加曾利E 2式)	遺構外
第30図62 図版8-62	深鉢	胴部上 位破片	厚 0.7	外反して外傾／胴部	地文は単節RL縦位施文／胴部上端に巡る横位沈線から2本1対の沈線が垂下／沈線間は磨消	にぶい橙／砂粒微量	中期後葉 (加曾利E 3式)	遺構外
第30図63 図版8-63	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	外傾	地文は単節LR縦位施文／磨消を伴う沈線垂下	浅黄棟／砂粒微量	中期後葉 (加曾利E 3式)	遺構外
第30図64 図版8-64	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	内湾する	地文は条線縦位施文	浅黄橙／砂粒・礫中量	中期後葉 (加曾利E 3式)	遺構外
第30図65 図版8-65	深鉢	胴部 破片	厚 1.3	外傾する	地文は複節RLR横位施文	明黄褐／砂粒・礫中量	中期後葉 (加曾利E 3～4式)	遺構外
第30図66 図版8-66	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	外傾する	地文は条線縦位施文／下端に僅かに隆起を確認	灰褐／砂粒・礫中量	中期後葉 (加曾利E 3～4式)	遺構外
第30図67 図版8-67	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	内湾して広がる	地文は縦位の沈線	にぶい橙／砂粒・礫少量	中期後葉 (加曾利E 3～4式)	遺構外
第30図68 図版8-68	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	やや内傾する／口縁部内面上端が僅かに凹む	口縁部は無文／口縁部直下に太く浅い沈線横走	にぶい橙／砂粒・礫微量	中期後葉 (加曾利E 4式)	遺構外
第30図69 図版8-69	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	内湾して内傾	口縁部上位は無文／地文は単節LRで、口縁部上位は横位施文、下位は縦位施文	灰褐／砂粒・礫中量	中期後葉 (加曾利E 4式)	遺構外
第30図70 図版8-70	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	内湾する口縁部／口縁部上端で肥厚	無文	にぶい黄橙／砂粒・礫少量	中期後葉 (加曾利E 4式か)	遺構外
第30図71 図版8-71	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	やや外傾する	微隆起線による区画文／微隆起線間は無文／地文は単節LR縦位施文	にぶい黄橙／砂粒・礫少量	中期後葉 (加曾利E 4式)	遺構外
第30図72 図版8-72	深鉢	胴部 破片	厚 1.3	外反して開く／頸部付近か	一端を重ねない半歳竹管状工具の腹面引きによる横位沈線を地文とし、交互刺突の付された隆帯が横走する	にぶい褐／砂粒多量、礫微量	中期後葉 (曾利II～III式)	遺構外
第30図73 図版8-73	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	僅かに外反する	地文は条線縦位施文／2～3本1対の横位沈線	にぶい橙色／砂粒・礫微量	中期後葉 (連弧文)	遺構外
第30図74 図版8-74	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	外傾する	地文は単節RL横位施文	灰褐／砂粒・礫微量	中期中葉～後葉	遺構外
第30図75 図版8-75	深鉢	底部 破片	厚 1.2	平坦な底部／広がりながら立上がる胴部	無文	橙／砂粒・礫微量	中期	遺構外
第30図76 図版8-76	深鉢	底部 破片	厚	平坦な底部／広がりながら立上がる胴部	無文	橙／砂粒・礫微量	中期	遺構外
第30図77 図版8-77	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	外反して内傾する口縁部	口縁部上端は無文／斜行沈線が付された断面台形の隆帯横走	灰黄褐／砂粒中量、礫微量、角閃石中量	後期前葉 (堀之内式)	遺構外
第30図78 図版8-78	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	外反して外傾する／波状口縁	口唇部には波頂部を除き沈線が巡る／口縁部は無文／頸部には沈線が2本横走	にぶい褐／砂粒・礫微量	後期前葉 (堀之内式)	遺構外

第18表 遺構外出土縄文土器一覧(5)

第3章 検出された遺構・遺物

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	時 期 型 式	出土遺構 出土位置
第30図79 図版8-79	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	外反して外傾する	口縁部上端に刻目が付された 背の高い隆帯が横走／隆帯脇 には沈線が沿う／口縁部下 端には浅い沈線が横走	にぶい褐／砂粒・礫微 量	後期前葉 (堀之内式)	遺構外
第30図80 図版8-80	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	内湾して外傾する	口縁部上端に沈線が4本横走 ／地文は単節LR縦位施文	にぶい黄橙／砂粒・礫 中量	後期中葉 (加曾利B式)	遺構外
第30図81 図版8-81	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	僅かに外反する／ 口縁部上端外面で 肥厚	肥厚する口縁部上端に単節RL 横位施文後、瘤が付される／ 口縁部直下には細く深い沈線 が数条横走	にぶい赤褐／砂粒・礫 少量	後期後葉 (安行1～2式)	遺構外
第30図82 図版8-82	浅鉢	口縁部 破片	厚 1.0	僅かに内湾して広 がる体部／内折し て立上がる幅狭の 口縁部	口縁部上端には竹管状工具の 押しきによる結節沈線が横走 ／口縁部には左下がりの短い 結節沈線	明赤褐／砂粒少量、礫 微量、雲母微量	中期中葉 (阿玉台Ib式)	遺構外
第30図83 図版8-83	浅鉢	口縁部 破片	厚 0.5	やや内湾／把手部 は外折／薄手	口縁部上端に巡る隆帯が円環 状の把手を形成するか／隆帯 上には押圧文が付される	明赤褐／砂粒少量、礫 少量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外
第30図84 図版8-84	浅鉢	口縁部 破片	厚 0.8	内傾する口縁／口 唇部は直立するか	口縁部には単沈線による渦巻 き状文	明赤褐／砂粒多量、礫 少量	中期中葉 (勝坂3式)	遺構外

第18表 遺構外出土縄文土器一覧(6)

挿図番号 図版番号	種別	遺存状態	長さ／幅／厚み (cm)	重量 (g)	特 徴	胎 土	時 期 型 式	出土位置
第30図85 図版8-85	土器 片錘	完形	3.8／3.2／1.2	21.5	方形／挾部2か所／周縁摩耗 僅か／深鉢胴部片利用／地文 は間隙のあるRL縦位施文	黒褐／砂粒多量、礫 微量、雲母多量	中期初頭 (五領ヶ台式)	遺構外
第30図86 図版8-86	土器 片錘	90%	6.1／5.6／0.9	42.0	楕円形／やや大形／挾部2か 所／周縁摩耗／深鉢胴部片利 用／無文	黒褐／砂粒・礫微量、 雲母中量	中期中葉 (阿玉台式)	遺構外
第30図87 図版8-87	土器 片錘	70%	4.8／3.8／1.1	19.8	方形か／挾部3か所／周縁摩 耗僅か／深鉢胴部片利用か／ 無文	明褐／砂粒・礫少量、 雲母中量	中期中葉 (阿玉台式)	遺構外
第30図88 図版8-88	土器 片錘	完形	4.4／2.6／1.0	15.1	方形／挾部2か所／周縁摩耗 顕著／深鉢胴部片利用か／無 文	褐灰／砂粒・礫少量、 雲母中量	中期中葉 (阿玉台式)	遺構外
第30図89 図版8-89	土器 片錘	完形	5.6／2.8／1.3	32.0	方形／挾部1か所か／周縁部 摩耗僅か／深鉢口縁部片利用 ／口縁部外面で肥厚／無文	橙／砂粒・礫微量	中期中葉 (勝坂式か)	遺構外
第30図90 図版8-90	土器 片錘	50%	4.3／2.8／1.0	17.1	楕円形／挾部3か所確認／周 縁摩耗顕著／無文	にぶい赤褐／砂粒・ 礫中量	中期中葉 (勝坂式)	遺構外
第30図91 図版8-91	土器 片錘	70%	4.1／3.4／1.3	19.6	方形／挾部2か所／周縁摩耗 顕著／深鉢胴部片利用／地文 は擦糸L縦位施文	浅黄橙／砂粒・礫中 量	中期後葉 (加曾利E1式)	遺構外
第30図92 図版8-92	土器 片錘	完形	7.1／5.1／1.2	72.1	方形／大形／挾部1か所か／ 周縁摩耗／深鉢口縁部片利用 ／口縁部内面で肥厚	にぶい橙／砂粒多量、 礫微量	中期後葉 (曾利式か)	遺構外
第30図93 図版8-93	土器 片錘	60%	4.2／3.5／1.2	21.5	楕円形／挾部2か所／周縁摩 耗顕著／無文	浅黄橙／砂粒・礫少 量	中期か	遺構外
第30図94 図版8-94	土器 片錘	完形	4.3／3.4／1.0	17.4	三角形／挾部2か所／周縁摩 耗顕著／深鉢胴部片利用か／ 無文	にぶい褐／砂粒・礫 微量	中期か	遺構外
第30図95 図版8-95	土器 片錘	80%	4.8／3.3／1.1	19.4	方形／挾部2か所／周縁摩耗 顕著／無文	にぶい黄橙／砂粒・ 礫少量	中期か	遺構外

(単位：mm, g)

第19表 遺構外出土縄文時代土製品一覧

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文 様 ・ 調整等	胎 土	時 期 式	出土遺構 出土位置
第30図96 図版8-96	壺	口縁	厚 1.0	幅広複合口縁／口縁部は内湾気味に開く／内面に赤彩	外面複合部に単節斜縄文を上下2段に施文し羽状構成、その後棒状沈線文4本を施文／口唇部にLR単節斜縄文を施文／内面及び外面複合部直下：へら磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子を非常に多く、砂粒を含む	弥生後期 後葉～末葉	遺構外
第30図97 図版8-97	壺	口縁	厚 0.6	口縁部は外反する／外面に3段の輪積み痕／内面に赤彩／吉ヶ谷式土器	内面：ハケ目調整後へら磨き調整／外面：輪積みに指頭による成形痕が残る	黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	弥生後期後葉 ～古墳前期	遺構外
第30図98 図版8-98	壺	胴	厚 0.8	外面の無文部に赤彩	外面に鋸歯状文、その上部にLR単節斜縄文を施文／内面：ハケ目調整／外面：文様部以外はへら磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子を多く、橙色粒子・砂粒を含む	弥生後期 後葉～末葉	遺構外
第30図99 図版8-99	甕	胴	厚 0.8	胴部は膨らみをもつ／外面は黒く煤けている	内面：へらナデ／外面：ハケ目調整後粗いへら磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	弥生後期後葉 ～古墳前期	遺構外
第30図100 図版8-100	甕	胴	厚 0.5	胴部は膨らみをもつ／外面は朱色であるが焼斑によるものか	内面：へらナデ／外面：ハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	弥生後期後葉 ～古墳前期	遺構外
第30図101 図版8-101	甕	胴	厚 1.0	台付甕／胴部下半破片／脚台部に近い部分は肥厚している／内面は黒色	内外面：粗い目のハケ目調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	弥生後期後葉 ～古墳前期	遺構外
図版8-102	須恵器 甕か	胴	厚 1.1	胴部下半破片／底部に近い部分はやや肥厚している／東金子製品か	内外面：回転によるナデ	灰白色／白色砂粒を含む	平安時代 (9世紀代か)	遺構外

第20表 遺構外出土弥生時代後期～平安時代土器一覧

挿図番号 図版番号	種 別	器 種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
図版8-103	陶器	皿	厚 0.6	志野釉／口縁部は短く外傾する／胎土：黄褐色を基調、砂粒を僅かに含む／口縁部～体部小破片	瀬戸・美濃系	279 Y	17C
図版8-104	陶器	鉢	厚 0.6	内外面に灰釉／胎土：黄褐色を基調、砂粒を含む／体部小破片	瀬戸・美濃系	279 Y	18C
図版8-105	陶器	徳利	厚 0.4	胎土：黒褐色、精錬されている／体部小破片	不明	308 Y	不明
図版8-106	陶器	鉢	高 [3.6]	複合口縁／体部から口縁部にかけて全体に内湾する／胎土は茶褐色、白色砂粒を僅かに含む／内外面に鉄釉／外面体部にハケ目文／口縁部～体部小破片	唐津系	279 Y	17C
図版8-107	陶器	捏鉢	高 [3.2]	口縁部は大きく屈曲し開く／内面口縁部直下に沈線がまわる／胎土は黄白色を基調／内外面に灰釉／口縁部小破片	瀬戸・美濃系	279 Y	17C
図版8-108	土器	焙烙	厚 1.0	内面：ナデ／外面：ナデ、指頭による成形痕が残る／色調は暗灰褐色／胎土には角閃石・砂粒・小石を含む／体部破片	在地系	遺構外	17C

第21表 遺構外出土陶器・土器一覧

## 第4章 調査のまとめ

本地点からは、縄文時代中期の住居跡2軒（100・121 J）、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡15軒（279・305・308・387～390・396～403 Y）、古墳時代後期の住居跡1軒（16 H）が検出された。ここでは、弥生時代後期～古墳時代前期と古墳時代後期の遺構・遺物について、簡単にまとめることにする。

### 第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物について

#### （1）弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡の新旧関係について

今回の該期の住居跡については、15軒が検出されているが、305・402 Yの2軒を除き住居跡は重複している状況で、特に279・387～390・396 Yの6軒は連続するようにほぼ東西方向に直線的に分布しており、本遺跡での継続的かつ安定的な集落のあり方を示しているものと言えるであろう。

そこで、今回の住居跡の新旧関係を以下のように事象毎に事象A～Cにまとめることにより、本地点における時間軸の設定及び土器様相の変遷を考える上での基本とすることとしたい。

**事象A**（279 Y・387 Y～390 Y・396 Y）6軒の新旧関係（古）→（新）

① 279 Y→396 Y ② 396 Y→390 Y ③ 389 Y→390 Y ④ 389 Y→388 Y ⑤ 387 Y→388 Y

事象Aから判明したことは、396 Yに切られ最も古い住居跡と考えられる279 Y、さらに388 Y・390 Yに切られる389 Yを同時期と考えても少なくとも4時期が設定可能となるであろう。

**事象B**（305 Y・400 Y・401 Y・403 Y）4軒の新旧関係（古）→（新）

① 403 Y→400 Y ② 401 Y→400 Y ③ 401 Y→403 Y ④ 305 Yは400・401・403 Yに近接

事象Bから判明したことは、400 Y・401 Y・403 Yはすべて時期が異なるものと判断でき、3時期が設定可能となり、隣接する305 Yを含めると4時期の設定もありそうであるが、最低でも3時期の設定にはなるであろう。

**事象C**（397 Y～399 Y）3軒の新旧関係（古）→（新）

① 397 Y→398 Y・399 Y ② 398 Y・399 Yは拡張住居で、399 Y→398 Y

事象Cから判明したことは、398・399 Yが397 Yを切ることが明らかであることから、ここでは大きく2時期の設定が可能であろう。

#### （2）住居跡及び出土土器の時期区分について

ここでは、前項での住居跡の新旧関係を基本に各住居跡から出土した土器の特徴を検討することで、時期区分については、1～5期に区分することとした。時期区分と土器編年基準の時間軸上の上限である1期については、壺形土器がまだ頸部形態が屈曲しない、甕形土器は口唇部に刻みをもち、「く」の



字口縁とならないことから、弥生時代後期でも末葉まで下らない後期後葉とし、下限である5期については、出土遺物がない390 Yが住居跡の新旧関係からの設定である。前段階である4期については、壺形土器に幅広複合口縁が存在し、廻間7期以降消滅する傾向である壺C4の瓢形壺が存在することから、廻間6期の範疇とすることとした。甕形土器では、すべて「く」の字口縁が安定するが、口唇部の刻みがあるものとなないものが併存する段階と言える。5期次段階の出土土器はないが、この段階は、高坏である柱状脚高坏の出現、壺では二重口縁壺の共伴などのいわゆる五領Ⅲ式相当の土器構成が見られる段階とすることで、5期については、いわゆる五領Ⅱ式相当である古墳時代前期中葉と考えた。

### (3) 住居跡出土土器の個体数と器種別割合について

本地点における住居跡出土土器の個体数は、全部で89点であった。個体数と器種別割合を示したのが第22表である。これによると、器種別で見ると、埴・器台・甕形土器はそれぞれ0点/0%、鉢形土器は6点/7%、高坏形土器は9点/10%、壺形土器は20点/23%、甕形土器は51点/57%、ミニチュア土器は3点/3%という結果であった。まとめてみると、一番多く出土した器種は甕形土器の57%、次いで壺形土器の23%で、甕・壺形土器のトータルでは80%にのぼり、どうやら、特別な意味合いをもつような祭祀的なものは皆無で、基本的には一般的な食器の類であると推測される。

また特筆すべきは、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、普遍性をもって一般的に出土する筈であろう埴・器台形土器というセットが1例も出土しなかったことであろう。

西原大塚遺跡第180地点(大久保 2018)では、住居跡から出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器を第1期～第5期に区分し、第2・3期(弥生時代後期末葉～古墳時代初頭)の段階で、埴・器台形土器が共伴しており、割合的に低い状況であっても本地点において出土が見られなかったことは、本遺跡全体で一貫して時期毎での器種別割合が同じではないことを示す重要な結果につながったと考えられる。

### (4) 土器様相の変遷について

時期の区分と設定及び該当する住居跡については、比較資料として、基本となる弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年基準を組み込んだ内容を第23表に示した(註1)。

それでは、時期区分毎に各住居跡から出土した土器様相の変遷図である第31図と各器種に見られる主な属性の推移を示した第24表を参考に土器様相の変遷を考えてみることにする。

今回、器種構成の分類としては、①鉢形土器、②高坏形土器、③壺形土器、④甕形土器、⑤ミニチュア土器と便宜的に番号と器種を一致させ時期区分毎に説明することとする。

#### 1期—弥生時代後期後葉(279・308・401号住居跡)

器種構成としては、②高坏形土器・③壺形土器・④甕形土器である。401 Yの出土土器はなかった。

##### ②高坏形土器

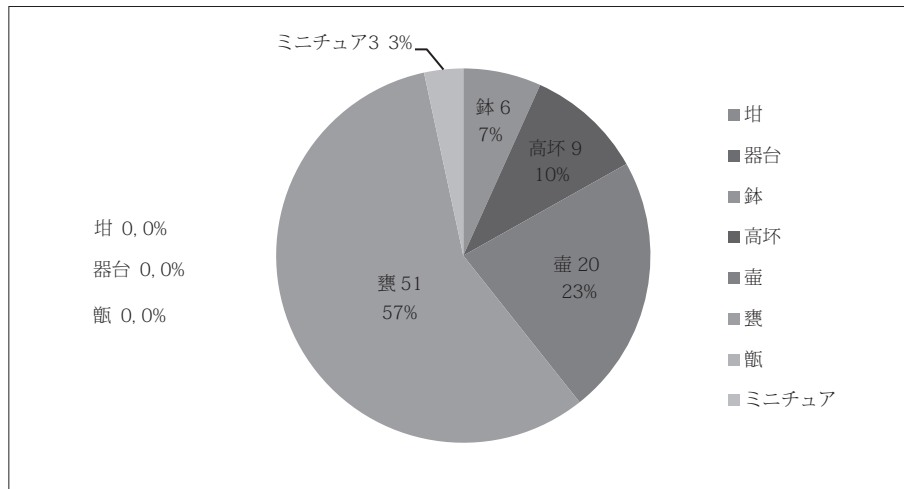
279H-1は赤彩の土器で、坏部下端に稜はないものである。この特徴の土器は笹森氏(笹森 1993)による口縁部が内湾し半球状を呈する器形で口縁部が無文のもの(B類)に該当するもので、I期からIV期まで存在するとし、V期にいわゆる小型高坏や坏部に段をもつものが出現すると説明している(註2)。279Y-7と308Y-1は脚台部であるが、裾部の特徴として、前者は「外反」、後者は



第4章 調査のまとめ

住居跡	埴	器台	鉢	高坏	壺	甕	甌	ミニチュア	合計
279 Y				3	4	10			17
305 Y					2	3		2	7
308 Y				1					1
387 Y				2		2			4
388 Y			2		3	5			10
389 Y			1			3			4
390 Y									0
396 Y					2	4			6
397 Y								1	1
398 Y						3			3
399 Y					3	8			11
400 Y			3	3	5	8			19
401 Y									0
402 Y					1	5			6
403 Y									0
合計	0	0	6	9	20	51	0	3	89

(単位：点)



第22表 弥生時代後期～古墳時代前期の掲載土器個体数と器種別割合

畿内編年	関川 1976	纏向2式		纏向3式		
	寺沢 1986	庄内2式		庄内3式	布留0式	
近年の久ヶ原式編年	安藤 2017	久ヶ原Ⅲ式新段階	日吉台式	-		-
	大村 2004	山田橋2式古	山田橋2式新	中台1・2式	草刈1式	草刈2式
	古屋 2014	北川谷4期古	北川谷4期新～北川谷5期新			北川谷6期
	比田井 1999	後期Ⅲ段階古	後期Ⅲ段階新	古墳前期Ⅰ古	古墳前期Ⅰ新	古墳前期Ⅱ段階
尾張編年	宮腰 1987	元屋敷古段階				元屋敷新段階
廻間編年	赤塚 1994	廻間Ⅱ式				廻間Ⅲ式
		1	2	3	4	1
北関東	若狭 2007	樽式3期		古墳前期古段階		古墳前期中段階
従来南関東編年	横川 1982	弥生町式	前野町式	五領Ⅰ式		五領Ⅱ式
西原大塚遺跡第70地点における時期区分と該当住居跡	弥生後期後葉	弥生後期末葉	古墳前期初頭	古墳前期前葉	古墳前期中葉	
	1期	2期	3期	4期	5期	
	279Y	389Y	387Y	305Y	390Y	
	308Y	396Y	400Y	388Y		
	401Y	397Y	402Y	398・399Y		
		403Y				

第23表 弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年基準

「内湾」と異なり、前者が新相と思われるが、廻間編年では裾部が外反する特徴は、廻間編年6期（新）以降の特徴であり、この時期のものとの対応は難しい。279 Y-7は外面に赤彩が施される特徴からも笹森氏の口縁部が内湾し半球状を呈する器形をもつタイプで脚台部が外反するものであろう。

### ③壺形土器

279 Y-2がやや残りの良い資料となる。特徴は胴部から頸部の移行がスムーズで「く」の字状に屈曲せず、口縁部は単純口縁で外反するタイプである。外面には文様帯を持たずに全体にハケ目調整を残すように仕上げられている。279 Y-10は口縁部破片であるが、器形は甕形であるが、口縁部内面に赤彩が施されることから、壺形土器としたものである。

### ④甕形土器

279 Y-11・13は口縁部形態が「く」の字に屈曲しないものである。口唇部の刻みの有無としては、279 Y-11・12からすべて刻みありである。調整として、実測個体である279 Y-4～6はナデ甕であるが、掲載した資料で小破片を含めて考えるならば、どちらかと言えば、279 Y-11～17からハケ甕が主体と言うべきであろう。なお、279 Y-4・6は、脚台部内面にハケ目調整が施されていることでナデ甕との折衷様であろうか。

## 2期—弥生時代後期末葉（389・396・397・403号住居跡）

器種構成としては、①鉢形土器・③壺形土器・④甕形土器・⑤ミニチュアである。

### ①鉢形土器

389 Y-1の小型鉢が1点出土している。複合口縁を呈し、内外面赤彩の土器で複合部が無文のものである。同器形として、3期の400 Y-5があるが、この土器は外面複合部にRLの単節斜縄文が施文されており、東京湾沿岸系の特徴を有する土器と考えられる。

### ③壺形土器

396 Y-1は幅広複合口縁を呈し、口唇部及び外面複合部にLの無節斜縄文と棒状貼付文を施文する土器で、南関東では弥生町式以降に一般的に見られるものであろう。複合部の貼り付けの特徴が垂直方向に近いことや4期の幅広複合口縁を呈する305 Y-3のように外面複合部にRLの単節斜縄文が施文されるものの円形赤彩文や沈線による縦位直線文が施文されるものと比べると古い特徴と考えられる。396 Y-2は単純口縁を呈し、胴部から頸部の移行が屈曲せずにスムーズである特徴は、3期の400 Y-2の頸部が屈曲する土器と比べ古い特徴であり、弥生時代後期の範疇の特徴と言える。

### ④甕形土器

1期に引き続き、口縁部形態は「く」の字に屈曲しないものである。口唇部の刻みの有無としては、389 Y-2・3から全て刻みありである。調整として、本期以降すべてハケ甕となる。

### ⑤ミニチュア土器

397号住居跡から台付甕の脚台部と思われるミニチュア（397 Y-1）が1点出土している。

## 3期—古墳時代前期初頭（387・400・402号住居跡）

器種構成としては、①鉢形土器・②高坏形土器・③壺形土器・④甕形土器である。

### ①鉢形土器

400 Y-1、400 Y-5は小型鉢で、前者は単純口縁の浅鉢形で廻間I～II式期に見られるものであ

る。後者は複合口縁を呈し、内外面赤彩の土器で口縁複合部にRLの単節斜縄文が施文され、東京湾沿岸系を特徴とする土器と考えられる。400 Y-6は口縁部が受口状を呈し、内外面赤彩の土器である。これについては、単純口縁を特徴する土器であるが、複合口縁を呈するものや口縁部に縄文が施文される土器の外にも東京湾沿岸系の久ヶ原式の中に共伴する土器の類であろう（田中 1993）。

#### ②高坏形土器

387 Y-1・2があるが、笹森氏による口縁部が内湾し半球状を呈する器形で口縁部が無文のもの（B類）に該当するものである。

#### ③壺形土器

400 Y-2は単純口縁を呈し、口縁部から頸部にかけて内湾気味に開き、頸部が屈曲する土器である。この頸部が屈曲するタイプの出現は、甕形土器の「く」の字甕が出現する時期と一致し、本期以降の特徴と言える。甕形土器と共に「屈曲しない」から「屈曲する」へ変化する傾向を示している。

402 Y-1は幅広複合口縁の壺で、2期の396 Y-1のように複合部が垂直に貼り付けられておらず、口縁部の外側にその器形を元に薄く貼られているものである。このタイプは笹森氏のVI期（五領I式）の段階で見られると思われる。

また、400 Y-11・12は自縄結節文、400 Y-13は端末結節文が施文される土器である。結節文については、この段階あるいは次段階においても系統の異なる両者が共伴するものであろう。

#### ④甕形土器

402 Y-2は「く」の字甕である。口唇部の刻みの有無としては、400 Y-14・15、402 Y-2のように確認できる資料ではすべて刻みありである。調整として、ナデ甕はなく、すべてハケ甕となる。

### 4期—古墳時代前期前葉（305・388・398・399号住居跡）

器種構成は、①鉢形土器・③壺形土器・④甕形土器・⑤ミニチュアである。

#### ①鉢形土器

388 Y-1の小型鉢が1点出土している。複合口縁を呈し、内外面赤彩が施される土器である。

#### ③壺形土器

399 Y-4は胴部下半の下膨れが強い土器である。これについては、笹森氏による「胴下半部に接合部分の強い屈曲をもつ」に相当し、第IV期（前野町式後半か）の特徴されている。こうした下膨れの土器は、東海系に強く表れる特徴とされ各地で出土しているが、天竜川東岸から大井川西岸の東遠江地域である、いわゆる菊川様式（中嶋 1988）・菊川式（岩本 1995）に特徴的である。

305 Y-3は幅広複合口縁を呈するもので、文様は外面複合部にLRの単節斜縄文を2段、円形赤彩文を1か所と縦方向の沈線文1本、口唇端部にLR単節斜縄文を施文されている。396 Y-1のように棒状貼付文ではなく、縦方向の沈線文に変化したことで新様相と考えられる。399 Y-6は幅狭のもので内外面赤彩され、無文の土器である。

305 Y-4はいわゆる「ヒサゴ壺」で、廻間I・II式期の特有の形式と理解されている（赤塚 1990）。

#### ④甕形土器

この段階はすべて口縁部形態が「く」の字に屈曲するものである。口唇部の刻みの有無としては、前段階まですべて刻みありであったが、この段階では刻みなしのものが共伴している。調整として、ナデ

甕はなく、すべてハケ甕となる。

#### ⑤ミニチュア土器

305 Y-1・2の2点が出土している。形態的な特徴だけであれば、比田井氏の小型壺の型式変遷であるB1類に該当し、前期I段階(古)～(新)の器形に類似している(比田井 1993)。

### 5期—古墳時代前期中葉(390号住居跡)

該期からの出土遺物はなかった。

### (5) 器種毎の土器様相の推移について

以上、本地点から検出された該期の15軒の住居跡の新旧関係を基本に土器様相の推移を1～5期に区分し時期毎に見てみたが、ここでは今回分類できた鉢・高坏・壺・甕形土器の4器種について、器種別に気が付いたことをまとめることとする。

#### ①鉢形土器

出土個体数が少なく、全体で6点の出土で器種別割合は7%であるが、時期別にみると、1期では出土がなかったが、2～4期で口縁部に複合口縁をもつ東京湾沿岸系の久ヶ原式の中に共伴する土器の類が出土し、3期で廻間I～II式期に見られる小型鉢の400 Y-1が1点のみ出土しているように東海系の要素をもつ土器が少ないと言える。

#### ②高坏形土器

全体で9点の出土で器種別割合は10%であった。3期の387 Y-1・2は脚台部を欠損するものの坏部が残り実測可能になった土器である。これらの土器は坏底部が丸く、廻間式の中で見られる稜をもつ特徴ではなく、やはり東海系ないし外来系の要素をもつ土器とは言えないため、鉢形土器と同様に東海系の要素をもつ土器が少ないと言える。

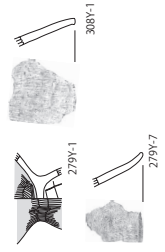
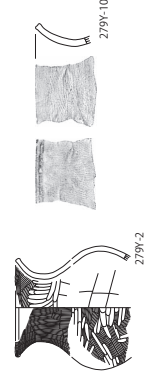
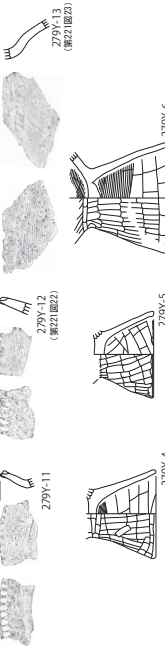
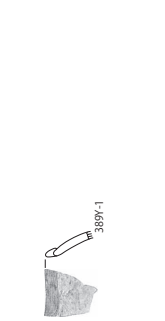
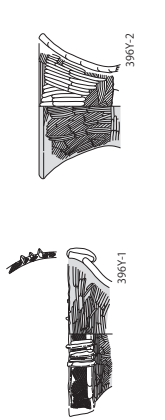
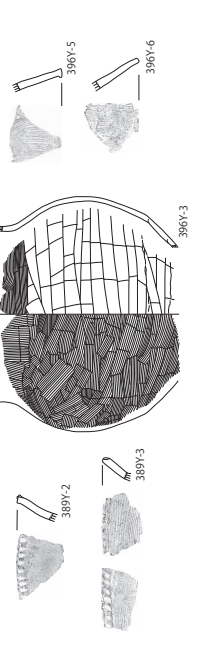

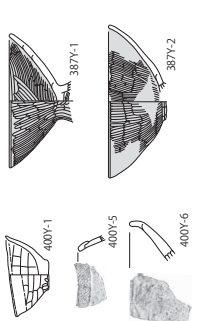
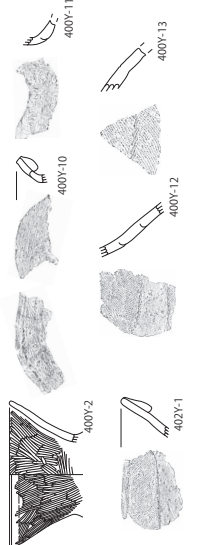
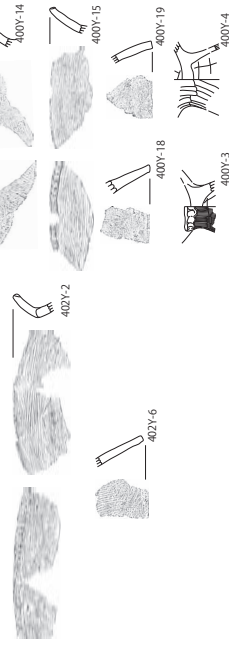
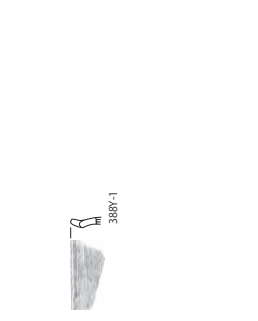
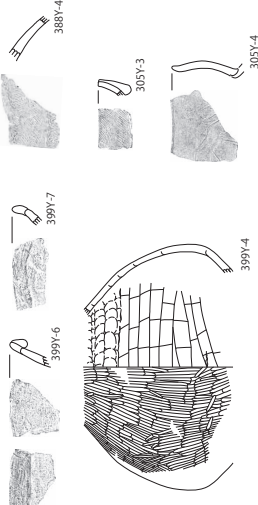
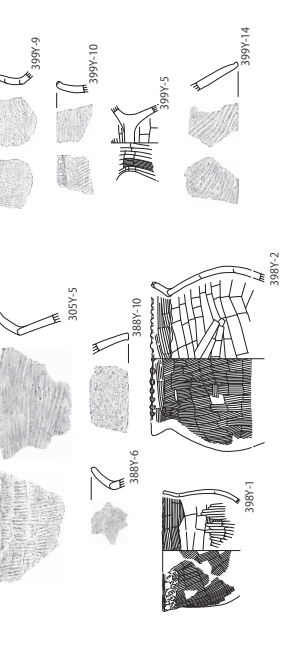
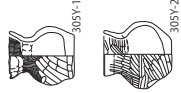
#### ③壺形土器

全体で20点の出土で器種別割合は23%で、甕形土器に次いで多かった器種である。1～4期を通して出土が見られるが、まず口縁部形態で見ると、単純口縁で外反する土器として、1期では279 Y-2・10、2期では396 Y-2が出土しており、4期では受口状の399 Y-7と瓢形の305 Y-4のものがある。複合口縁の土器としては、2期に幅広複合口縁の396 Y-1、3期に402 Y-1、4期に305 Y-3があるが、402 Y-1は古墳時代に入ってから見られる新出タイプと考えられる。頸部形態では、1・2期では緩やかなカーブをもち屈曲しないが、3期以降はすべて胴部上半に張りをもち「く」の字状に屈曲する特徴となる。

文様については、1期では文様のあるものはなかったが、2期以降はあるものとないものが共存している。結節文をもつ土器では、2期で400 Y-11・12に自縄結節文、400 Y-13に端末結節文が施文されるように同住居跡でも混在している状況である。4期では388 Y-4が多段に端末結節文が施文される土器である。

#### ④甕形土器

全体で51点の出土で器種別割合は57%で、一番多く出土した器種である。1～4期を通して出土が見られるが、まず口唇部の刻みの有無であるが、1～3期には刻みがあり、4期であるものとないものが混在するということから、今回の結果では、古い様相のIつとして口唇部に刻みがあるものをあげる

時期	①鉢・②高坏形土器	③壺形土器	④甕形土器	⑤ミニチュア
1 期 弥生時代後期後葉				
2 期 弥生時代後期末葉				
3 期 古墳時代前期初頭				
4 期 古墳時代前期前葉				
5 期 古墳時代前期中葉	<p>出土遺物なし(390Y)</p>			

縮尺(実測:1/8、拓本・ミニチュア:1/6)

第31図 西原大塚遺跡第70地点における土器変遷





ことができる。笹森氏によると、口唇部の刻みについては、「古墳時代には消失するが、弥生町式中葉以降も刻み目のあるものと平縁のものが伴出している」としている（笹森 1993）。頸部形態でも1・2期では緩やかなカーブをもち、「く」の字口縁の特徴はなく、3期以降はすべて「く」の字口縁の特徴をもつように変化の傾向がきれいに推移している感がある。

調整では、ナデ甕は1期のみが存在し、1～4期の全体を通してハケ甕が主体という傾向があるが、今回の結果ではナデ甕については、古い様相の一つとしてあげることのできるであろう。また、ハケ目調整でも粗い目のものが4期で確認されており、新出要素の一つとして考えられる。

## （6）まとめ

以上、今回の報告をまとめるにあたり、大まかな器種毎の時代の推移を見てきたが、ここでは特筆すべき事項を下記にまとめることとする。

まずは最初に気付くであろうが、本地点からは、すでに存在して良いであろう時期であるにもかかわらず、掲載できるような埴・器台形土器そして甔形土器という器種が欠落している状況である。これについては、車塚氏は「東海系土器を検索する作業においても搬入土器や影響の顕著な土器を抽出することは比較的容易いのであるが、影響を折衷的に発現する土器やさらにその影響を明瞭に語りえない数多くの土器が存在するよう感じられ、しかもそれが遺跡ごとに不均質に存在するようみえることがこの時期の特質にさえおもえる」（車塚 1991）と述べているが、「遺跡ごとに不均質」である以上に、今回は同じ西原大塚遺跡内においても同時期に埴・器台形土器が共伴する地点もあるし、本地点では外来系土器が目立たない様相であるのに対し、外来系土器が集中するエリア（西原大塚遺跡区画整理5Ⅱ・Ⅲ地点付近）も存在することも事実である（註3）。このように同じ遺跡内であっても在地的あるいは伝統性を保持する要素をもつエリアが存在し、そしてもう一方では外来的あるいは新出要素をもつエリアが存在するというように確かに「不均質」である現象は捉えることが可能であろう。

また、甕形土器において、ナデ甕かハケ甕かというように大まかな分類で時間的な推移の様相を考えると、1期までは279 Y-4～5のようにナデ甕が共伴し、2期以降はナデ甕が消失し、ハケ甕のみが存在するという結果である。これについては、西原大塚遺跡第182地点（大久保・尾形・深井 2018）でも弥生時代後期後葉に比定される109号住居跡の109 Y-3にナデ甕が共伴し対応しているが、西原大塚遺跡第37地点（尾形・深井 2000）では、第4期（古墳時代前期新）に比定される165号住居跡にも165 Y-6・7のようにナデ甕が共伴している例もあり、単純にナデ甕が古い様相をもつと結論できないという複雑さも有している。これは、やはり前述した車塚氏の「不均質」という言葉がそのまま当てはまるものと言えるのであろう。

今後、こうした本遺跡内における地点毎あるいはエリア毎というように小規模のエリアで土器様相が偏在することが明らかになるならば、西原大塚遺跡全体の中で、異なる集落の集合体につながる事例、さらに、それぞれの集落の役割分担などが明らかになることを期待できるであろう。

現在、西原大塚遺跡では、遺跡面積約165,000㎡の中で、調査地点数240地点（令和5年1月31日現在）が実施され、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡は調査されただけでもすでに650軒を越え、遺跡内どこにでも当該期の遺構は分布している状況である。

そのため、今後の西原大塚遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期、さらに志木市の歴史を総合的に考え

る上で、今までの西原大塚遺跡における調査成果をもとに基礎的分析を行い、まずはその情報を正しく理解することが重要であると考えられる。

## 第2節 古墳時代後期の遺構・遺物について

古墳時代後期の住居跡（16H）は、調査区北西隅から住居南東コーナー部分のみの検出であったが、すでに住居北側の大部分は、区画整理第13IV地点（佐々木・内野・宮川 2009）において、調査され報告されている。出土土遺物についてもその際に掲載されているため、今回は挿図版の掲載を省略しているが、土師器坏形土器（1～4）、土師器甕形土器（5・6）が出土しており、時期は6世紀後半に位置付けられていた。

今回、これらの土器を再考察した結果、6世紀後半より古い様相であると考えられるため、その根拠についてまとめることとした（註4）。

まず、土師器坏形土器は、1～3が内湾タイプで、1・3は丸底、2がやや平底状のものである。赤彩については、既報告において、3のみが施されているとされているが、今回、1についても内面及び外面口縁部に施されていることが確認できた。この内湾タイプは、志木市における坏形土器の編年のC類に分類され、5期（5世紀末葉）～7期（6世紀前葉）で捉えられるものである（尾形 2000）。しかし、口径に着目すると、1は15cm、2は16cm、3は14.7cmと大型化が明瞭であるため、須恵器坏形土器の大型傾向のMT 15段階（田辺 1966・1981、佐藤 2007）以降の特徴を基本とすると、7期（6世紀前葉）に比定にできるものである。

4は底部が丸底を呈し口縁部が外傾する小型品である。この土器については、城山遺跡第1地点54号住居跡（佐々木・尾形 1987）から類例があり、5世紀代から継続して存在し、おそらく小型埴からそのルーツを辿れる可能性がある。ほぼ同じ時期に底部が丸底を呈する甕形土器が城山遺跡第1地点12・18号住居跡からも出土していることや本地点の6の出っ尻状の底部もこの時期の共通する特徴の一つとも言えるであろう。

土師器甕形土器については、まだ胴部が長胴化を遂げず卵形状を呈することから、おおよそは6世紀代に位置付けすることは可能である。しかし、5のように口縁部の特徴である「く」の字状がやや崩れ、間延びしているタイプは5世紀代にはなく、6世紀からの特徴と言え、志木市の甕形土器の編年のD2類に比定することが可能である（尾形 2001）。

以上から、今回の報告において、16号住居跡出土の土器を検証した結果、区画整理第13IV地点において6世紀後半と報告された資料であるが、6世紀前葉に改めることとする。

### [註]

- 註1 本書での弥生時代後期～古墳時代前期の時期区分については、弥生時代後期・古墳時代前期をそれぞれ5区分し、初頭・前葉・中葉・後葉・末葉と表記することにした。
- 註2 笹森氏による時期区分は、I～IIIは弥生町式、IV・Vは前野町式、VIは古墳時代初頭の五領I式に相当する。
- 註3 365 Yからは五領III式のメルクマールである、柱状脚高坏・二重口縁壺・伊勢湾型壺・S字口縁甕・甕形土器などの良好な資料が出土している。このエリアはまだ未報告資料の第72地点があるが、405 Yからは有段高坏・S字口縁甕・タタキ成形甕・甕形土器・絵画土器・石製品（勾玉・砥石）、406 YからはS字口縁甕、408 Yからは二重口縁壺、416 Yか

#### 第4章 調査のまとめ

らはS字口縁甕・タタキ成形甕などのように複数軒から外来系土器が集中して出土している。

註4 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書において、特に古墳時代後期の住居跡の時期について、ここで再考察した結果をまとめると以下のとおりである。再考察においての1世紀の区分基準は、初頭・前葉・中葉・後葉・末葉の5段階区分を想定している。

遺構名	旧	新
14号住居跡	古墳時代後期(6世紀後半)	古墳時代後期(6世紀中葉)
16号住居跡	古墳時代後期(6世紀後半)	古墳時代後期(6世紀前葉)
17号住居跡	古墳時代後期(6世紀後半)	古墳時代後期(5世紀末葉)
18号住居跡	古墳時代後期(6世紀後半)	古墳時代後期(6世紀初頭)
20号住居跡	古墳時代後期(6世紀前葉)	古墳時代後期(5世紀末葉)

#### [引用・参考文献]

- 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 安藤広道 1990「久ヶ原遺跡と久ヶ原式土器」『平成28年度特別展 土器から見た大田区の弥生時代』大田区郷土資料館
- 岩本 貴 1995「菊川式土器における編年上の問題」『10周年記念論文集』財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大久保聡 2018「第5章 調査のまとめ」『志木市遺跡群23』志木市の文化財第70集
- 大久保聡・尾形則敏・深井恵子 2018『志木市遺跡群23』志木市の文化財第70集
- 尾形則敏 2000「志木市における古墳時代の土師器の編年(1)」『あらかわ』第3号 あらかわ考古談話会  
2001「志木市における古墳時代の土師器の編年(2)」『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
- 車塚正彦 1991「東京都における後期弥生土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第8回東海埋蔵文化財研究会 浜松大会 東海埋蔵文化財研究会
- 佐々木保俊・尾形則敏 1987『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳 2009『西原大塚遺跡Ⅰ～Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合 埼玉県志木市遺跡調査会
- 笹森紀巳子 1993「大宮台地における弥生後期土器」『二十一世紀への考古学』櫻井清彦先生古稀記念論文集
- 佐藤 隆 2007「6世紀における須恵器大型化の諸様相—陶器窯跡編年の再構築に向けて・その3—」『研究紀要』第6号 大阪歴史博物館
- 関川尚功 1976「畿内地方の古式土師器」『纏向』
- 田中清美 1993「唐崎台遺跡の竪穴住居跡等の編年試案」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ—設立10周年記念特集—』財団法人市原市文化財センター
- 田辺昭三 1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ  
1981『須恵器大成』角川書店
- 中嶋郁夫 1988「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』2号
- 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』
- 比田井克仁 1993「小さな壺から—西方社会へのささやかな抵抗—」『史館』第24号 史館同人  
1999「遺物の変遷—遺物から見た後期の社会変革—」『文化財の保護』第31号 東京都教育委員会
- 古屋紀之 2013「横浜市都筑区北川谷遺物群における弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年」『横浜市歴史博物館』VOL.17  
2014「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『久ヶ原・弥生町期の現在』西相模考古学会 記念シンポジウム資料集
- 宮腰健司 1987「尾張における欠山式土器とその前後」『欠山式土器とその前後：研究・報告編』
- 横川好富 1982「埼玉県の古式土師器」『埼玉県史研究』第10号 埼玉県
- 若狭 徹 2007『古墳時代の水利社会研究』学生社

版 图







1. 確認調査風景



2. 100号住居跡



3. 100号住居跡遺物出土状態



4. 121号住居跡



5. 279号住居跡（第70地点）



6. 279号住居跡（区画整理第39 I 地点）



7. 305号住居跡



8. 308号住居跡（第70地点）





1. 308号住居跡 (区画整理第39Ⅱ地点)



2. 387号住居跡



3. 388号住居跡



4. 389号住居跡



5. 390号住居跡



6. 387~390号住居跡

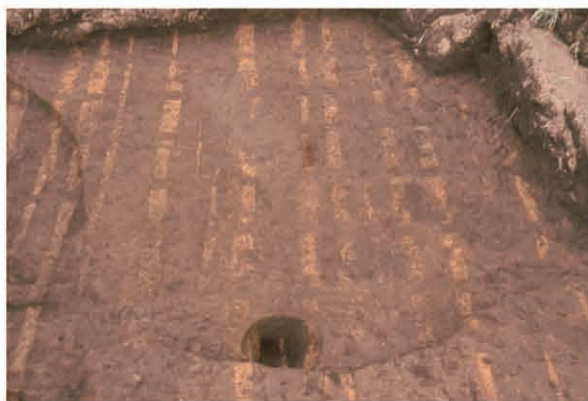


7. 396号住居跡



8. 396号住居跡遺物出土狀態





1. 397号住居跡



2. 398・399号住居跡



3. 398・399号住居跡貯藏穴遺物出土状態



4. 398・399号住居跡炉



5. 400・401・403号住居跡



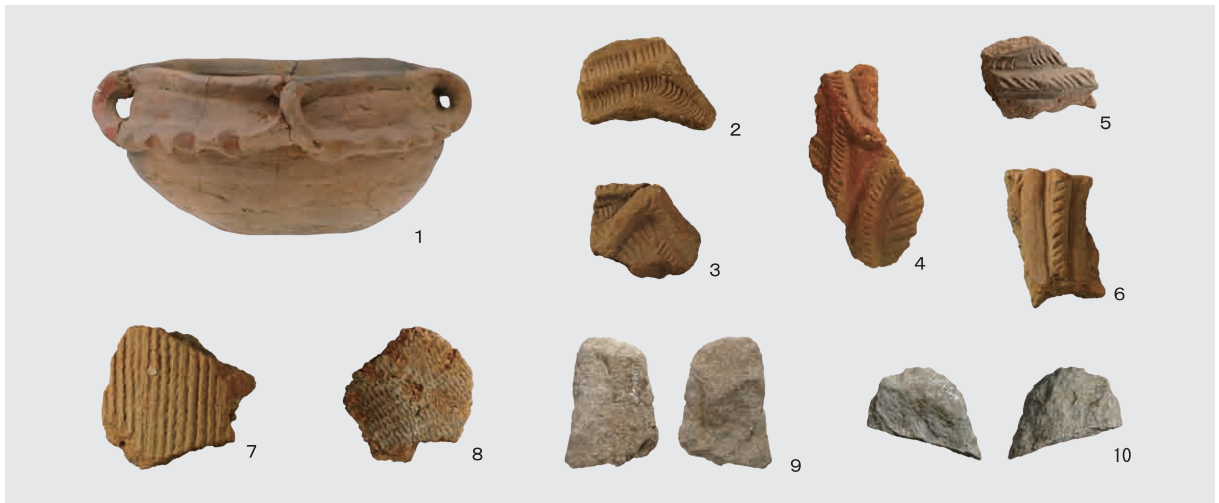
6. 400号住居跡炉



7. 402号住居跡



8. 16号住居跡



1. 100号住居跡出土遺物



2. 121号住居跡出土遺物



3. 279号住居跡出土遺物



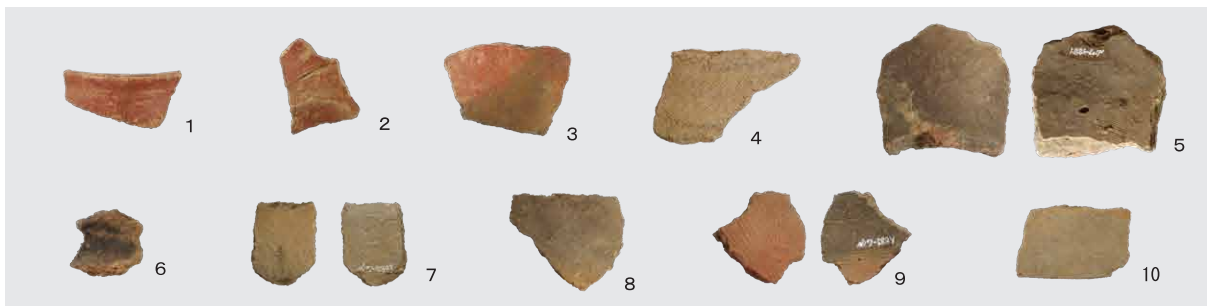
1. 305号住居跡出土遺物



2. 308号住居跡出土遺物



3. 387号住居跡出土遺物



4. 388号住居跡出土遺物



5. 389号住居跡出土遺物



6. 396号住居跡出土遺物





1. 397号住居跡出土遺物



398号住居跡出土遺物

399号住居跡出土遺物

2. 398・399号住居跡出土遺物



3. 400号住居跡出土遺物

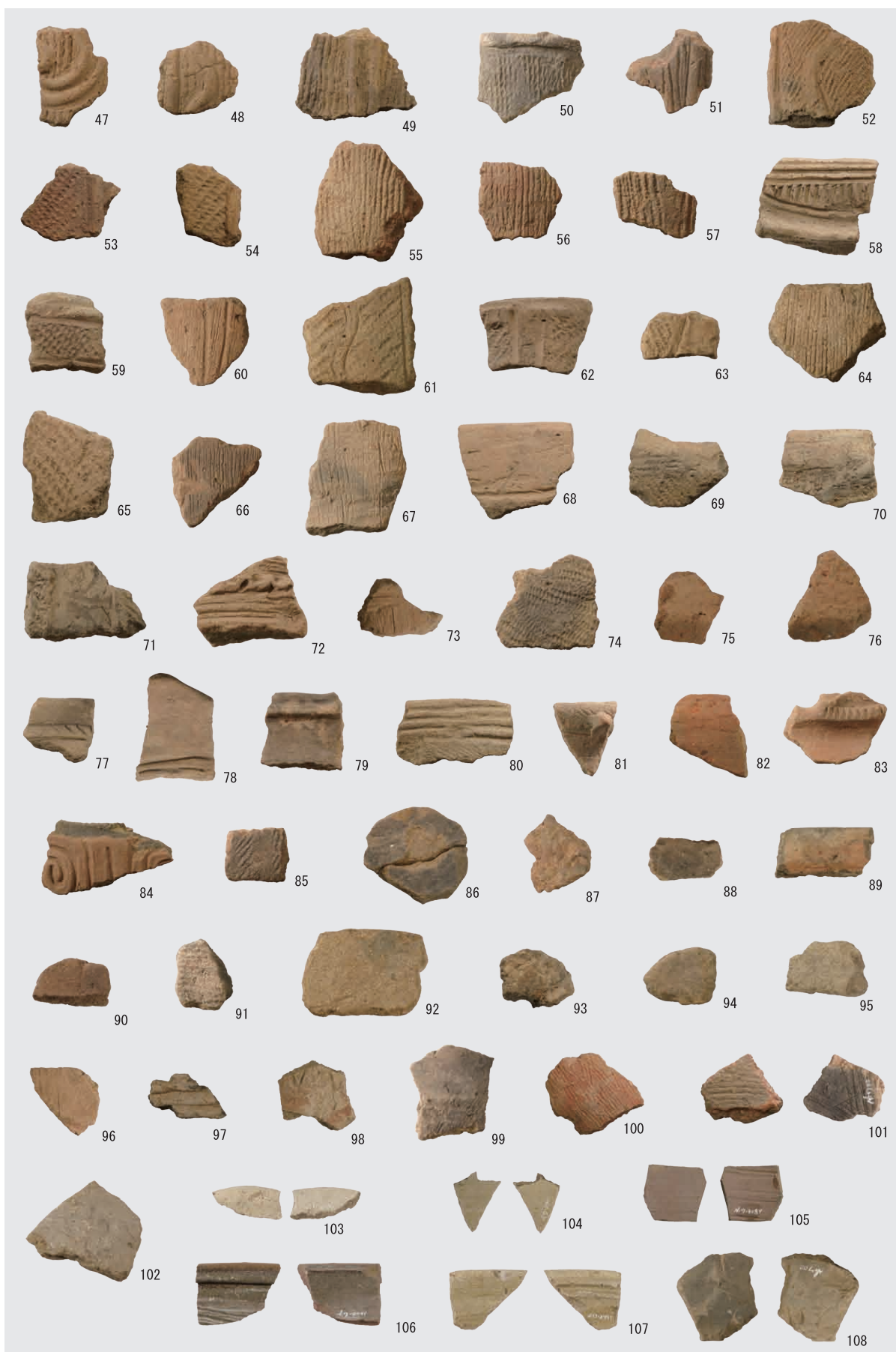




1. 402号住居跡出土遺物



2. 遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	しきしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ9							
書名	志木市埋蔵文化財調査報告書9							
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第91集							
著者氏名	尾形則敏 徳留彰紀 大久保聡 深井恵子							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	令和5 (2023) 年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡) (全体面積)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第70地点)	しきしまいぞう 志木市幸町 3丁目7175～7177	11228	09-007	35° 49' 22"	139° 33' 55"	20021031 ～ 20021127	534.47	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代			主な遺構	主な遺物	特記事項	
西原大塚遺跡 (第70地点)	集落跡・ 墓跡	縄文時代中期 弥生時代後期～古墳時代前期 古墳時代後期			住居跡 2軒 住居跡 15軒 住居跡 1軒	土器・石器 土器 土器		
要約	<p>西原大塚遺跡は、縄文時代中期の環状集落や弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡を主体とする遺跡である。今回は第70地点の調査成果を収録している。</p> <p>本地点からは、縄文時代中期の住居跡2軒、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡15軒、古墳時代後期の住居跡1軒が検出された。特に弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡については、比較的密集して検出され、さらに重複していることから、西原大塚遺跡の当該期における集落の継続性と安定性を示す良好な資料になるものと思われる。</p>							

志木市の文化財 第91集

埼玉県志木市

## 埋蔵文化財調査報告書 9

発行 埼玉県志木市教育委員会

埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 令和5（2023）年3月31日

印刷 株式会社 白峰社